

江戸名所図會

十三

牙
二
三
八
冊

ル 4
5105
13





小石川 水道橋より外白山のあたり逆の惣名なり昔ハ小石川多き

細流數條あぐれ故はかく号するとも江戸名勝志と云る所の小石川と云名所ありとありと據あるは似たり又

此地は加州石川郡の白山の神祠鎮坐の故ありんと云傳ふもとも詳

なげ小石川の白山權現ハ漸く永祿二年小田原北条家の所領役帳に

櫻井某所領の内は小石川本所といへる地名を加へ島津孫四郎と

云人も此地ゆく法林院松月分の地を領せり菊岡治原云く

朕橋の下を流る所の水脈小石川御殿の南より傳通院の後柳町を流れて水府公

御藩邸の内を歴水道橋の上のたぐく神田川は會する所の小石川の舊跡ありといへる

田國雜記 小石川といふと丁渡あり

あやをせむひゆありく小石川の川を流すと云ふと云ふ人ありん

黄葉集 江戸よそよりくる頃小石川と云所ゆく

久方は月をる高の涼も隣ありたりる川のふ

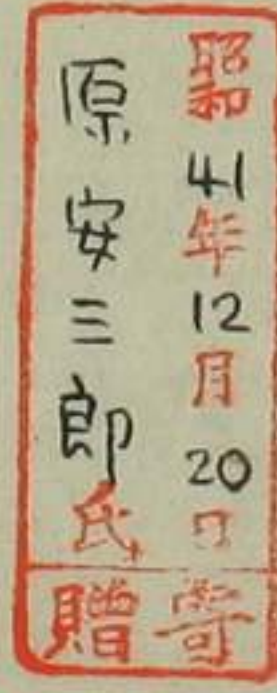
一はるもあやふりこりこり

涼風や移なうへハ小石川

道典
准后

鳥丸
光廣

芭蕉
宗因





傳通院裏門

無量山傳通院

壽經寺と号す

小石川牛天神乾の方二町をくりの

あり浄家十八檀林の一員なり

本尊阿彌陀如来ハ惠心僧都の作

めり當寺ハ明德年間了譽上人開創せり

梵刹より寮舎百餘

御靈屋 傳通院殿の御靈屋なり 御遺言に依りて 御尊殿ハ同所宗慶寺に納め奉り 和漢三才圖會に慶長 七年壬寅八月二十九日逝去とあり 開山堂 本堂の右ハ幡宮 同所あり 天正年間一光文字ある石の額を得り 辨財天祠 當社ハもと白山御殿の地なり 白山水川と別當ハ景久院と号し 辨財天ハ勸請 多入藏主稻荷社 境内裏門の方あり 往古孤僧ハ心自ら

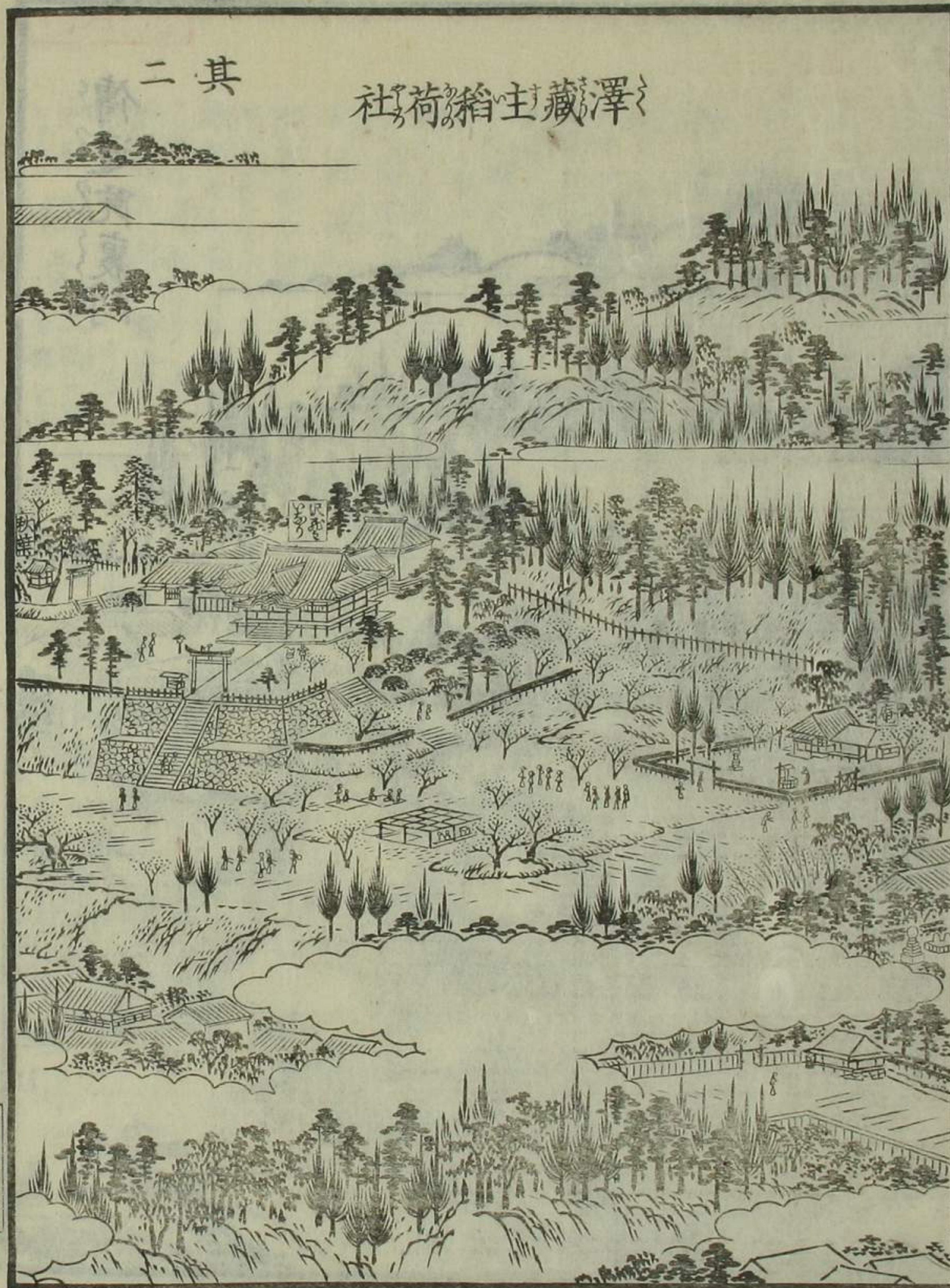
論と云り 後ハ稻荷に勸請 常念佛堂 塔中眞珠院 新念佛堂 同瑞真院 大黒天 寺中福聚院あり 菊岡治宗云く 初井と攝とく 其土中より此尊像を得る 橋磨候の櫛の内とあり 極樂水は混せしめ 彼井も又同一屋敷の

縁起云く 當寺ハ安置の大黒天ハ三國傳來の靈像なり 大黒多門辨天等の三神一體の尊影なり 孝徳天皇の御宇 高麗國の大臣 録求の土古とのり 人本邦に携來りて 近江國蒲生郡あり 明和年間 豐譽靈應上人感得し 空師

の筆 經堂 正面ハ聖教窟の額をかけ 内ハ明木の二代藏經 無縁塚 年辛丑

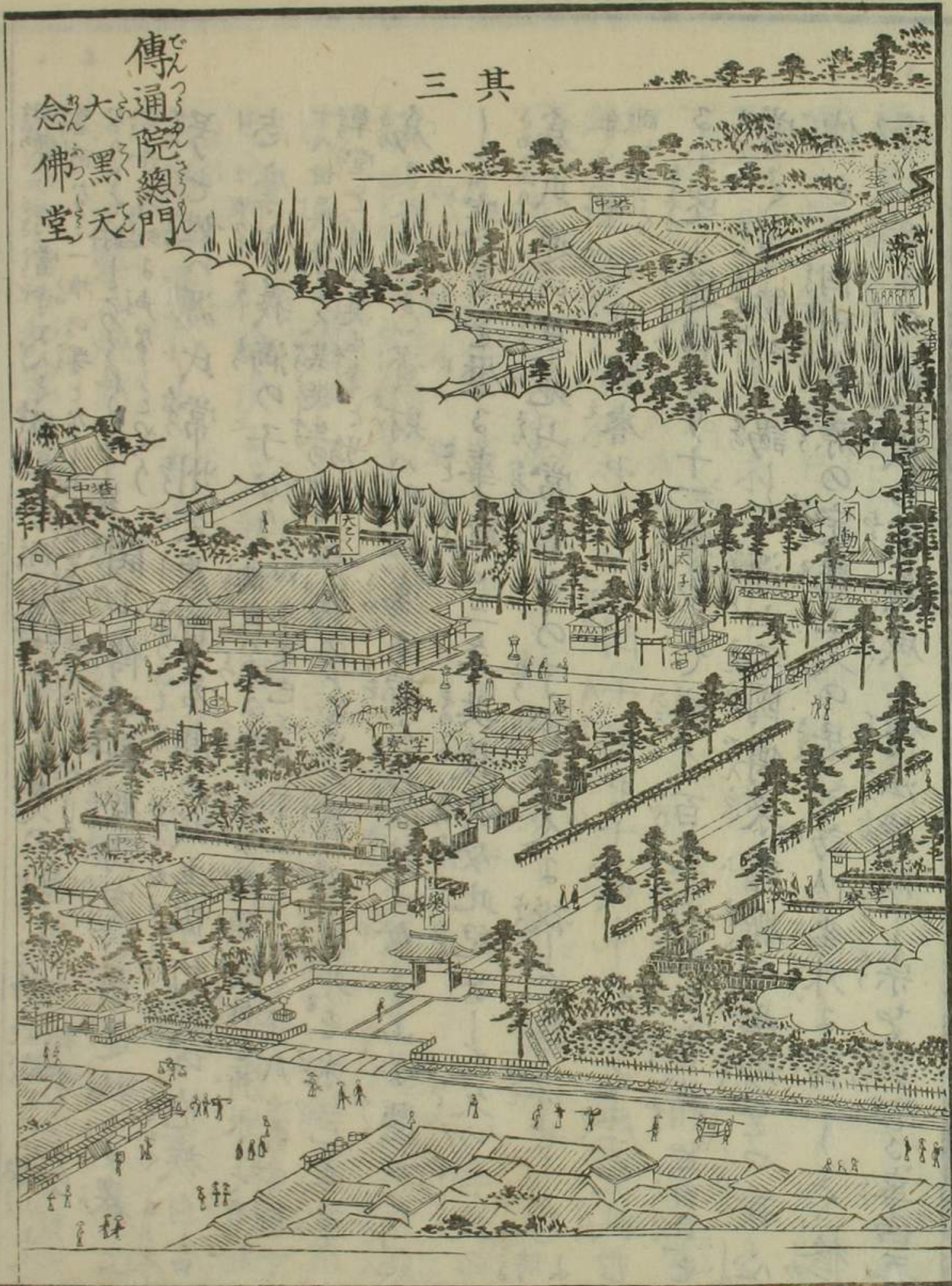
全部を収む故あり 當山の法寶とあり 貴とあり

十三ノ冊 四ノ百七

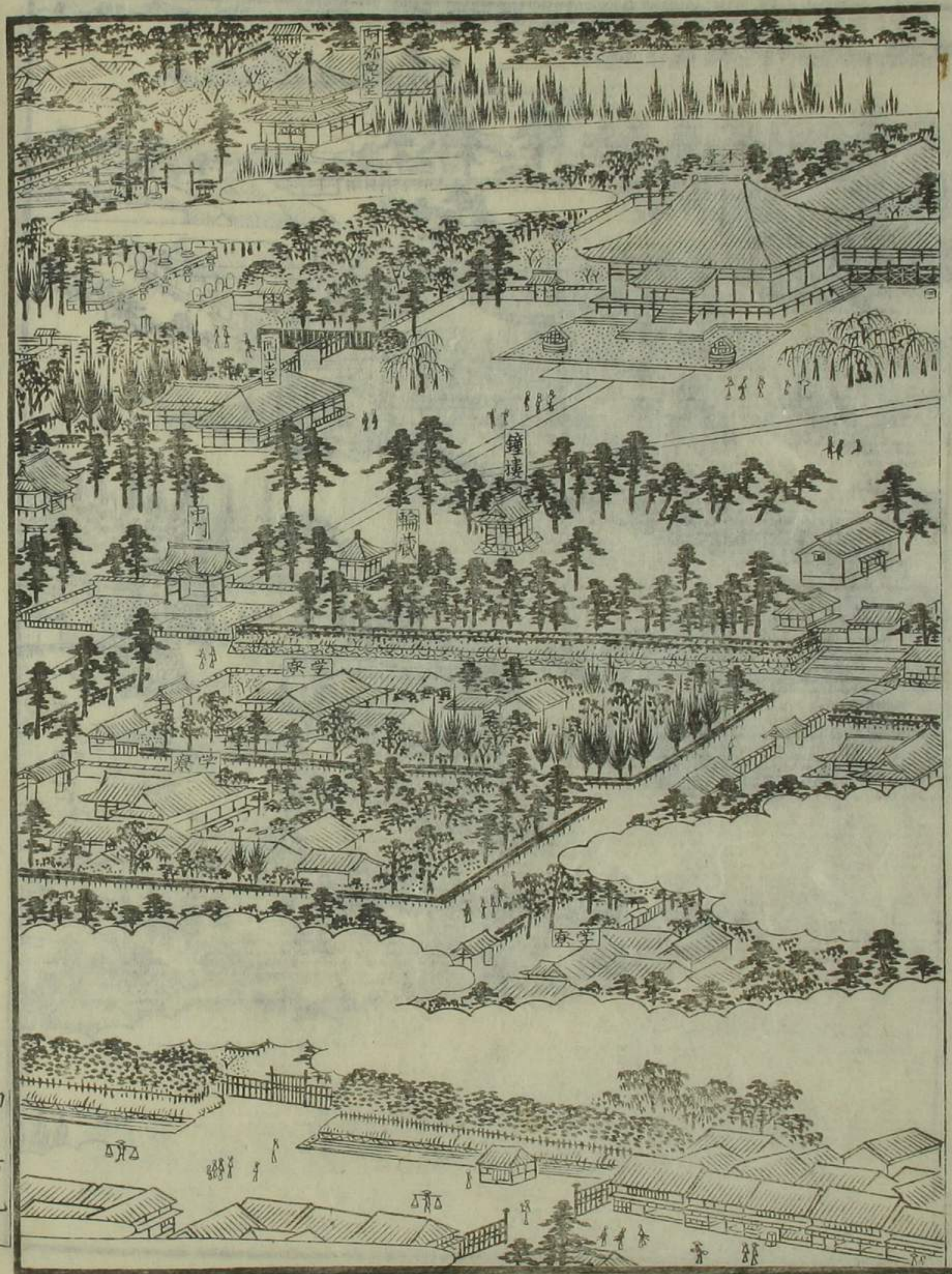


傳通院總門
念大佛堂

三其



四
百九



田録の時當寺に入る焼死する所の男は三百八十餘人の無聲蛙里諺のいふ開山上人墓所なり一堆の塚となり上は堂を建て稱名の音を絶つむ開山傳曰釋聖岡字ハ酉蓮社了譽と當寺の姓ハ聲なりとあり後開山傳曰釋聖岡字ハ酉蓮社了譽と号を姓ハ源氏常州久慈郡岩瀬の城主佐竹氏の花族白吉志摩守義満の子なり滿或ハ光ニ作る父母岩瀬明神ニ祈求して層應四年辛巳正月二十五日出生を後成連の常福寺十八世眞譽上人其誕生之地ハ五歳のとき父義満戰死を采邑を敵の草堂を開き誕生寺と号く爲ハ棄つる資財ハ賊の爲ハ掠りたる故ハ女子山ハ隠れ落魄して寒暑を歷る事既ハ三年其後其母此兒をして父の菩提の爲ハ瓜連の草地山常福寺の了實上人ニ投して難渋せしむ時年ハ歳聖天性聰睿や一聞十悟を十歳やして始て學を試む剛と号く不速ハ通習せり十一歳やして博く百家内外の書籍を自見せ嘗く蓮勝師ニ謁して淨土三國傳來譜脈の幽妙を口授心傳を又相州桑原の定慧上人の居を訪ひ坐外ハ寓しして修學ハ竟ハ白旗一派の宗義成く傳法授戒ハ宗を弘むる事四五

箇年白旗ハ寂惠上人住の地の名なり以て宗名とす道俗化と蒙る者甚多一師年四十六常陽小

還る時ハ實師齡已ハ八旬則問師をして常福ハ主たりしむ年七十五

又應永二十二年乙未の冬武州小石川の畔ハ閑地を卜し

一字を營修む今の傳通院の權興あり傍ハ清泉あり今の極樂水則元祖の舊

跡ハ準擬しそその水を吉水と号ハ師無量山ハ住を更絶ハ六年

一夕微疾を憂ハ安然とて沐浴淨衣ハ辭世の偈を書きて云く

放行把住知不識日滿八十年即今端的輝東山月西天矣

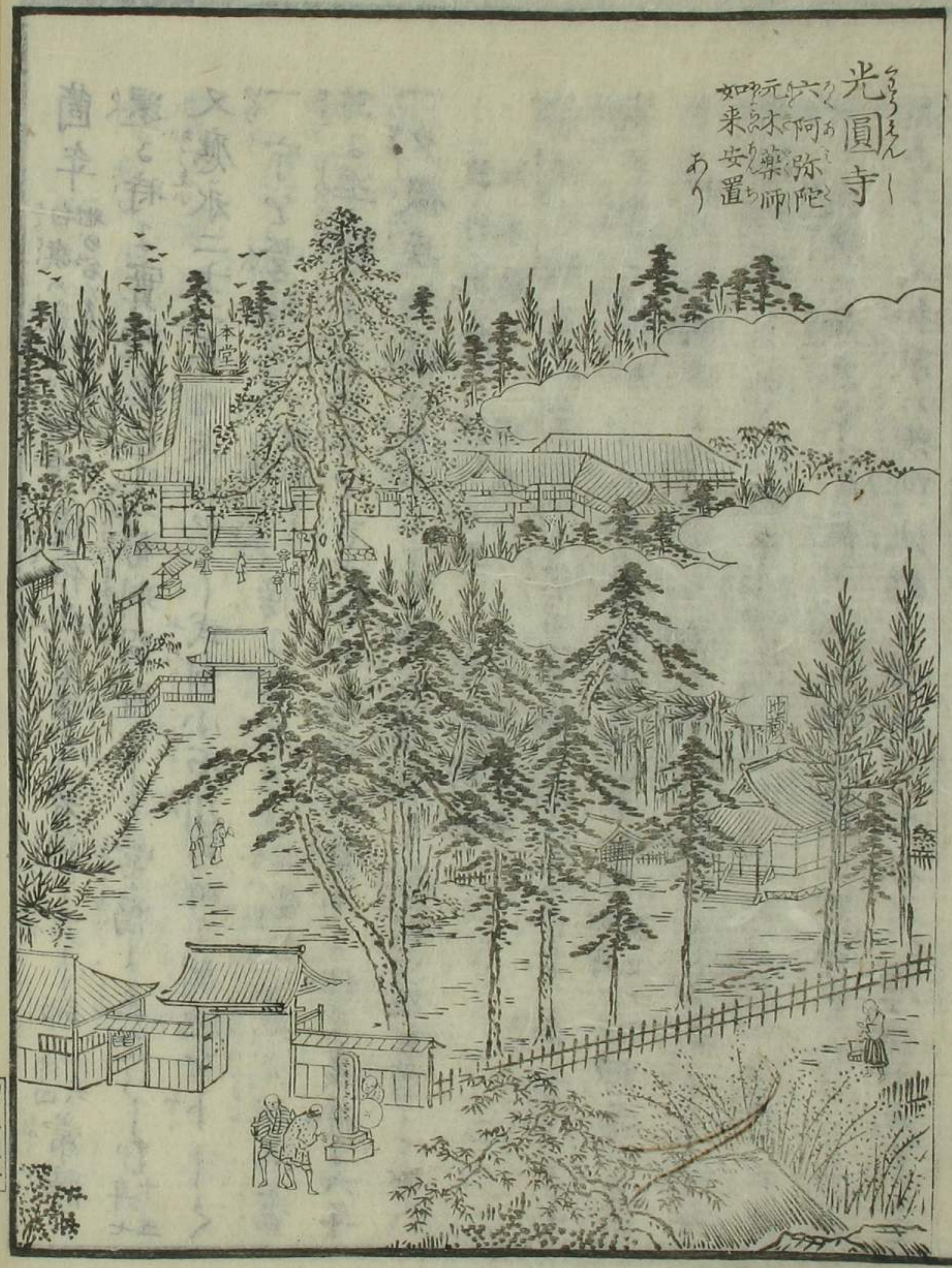
書畢て端坐合掌ハ口ハ宝号を唱へ西へ向ひく奄然とて

寂を昔ハ應永二十七年庚子九月二十七日世壽八十師常ハ坐臘七十三

其影的爾とて相映を此故ハ世ニ稱して生平撰述の書ハ牛ハ

汗ハ文藻ハ煥然とて微を窮め妙を極む世舉く師ハ十徳の目ありと又和歌ハ頓阿法師ハ傳受ハ古今ハ序注十卷を製を

光圓寺
 六阿彌陀
 元來安置
 如來安



法器豪英ゆゑに道徳ハ終古小隆盛ハしと聲ハ宇宙に高しと
 謂ゆべし緇門の柱礎浄家の棟幹なるものなりと
以上了譽上人傳の

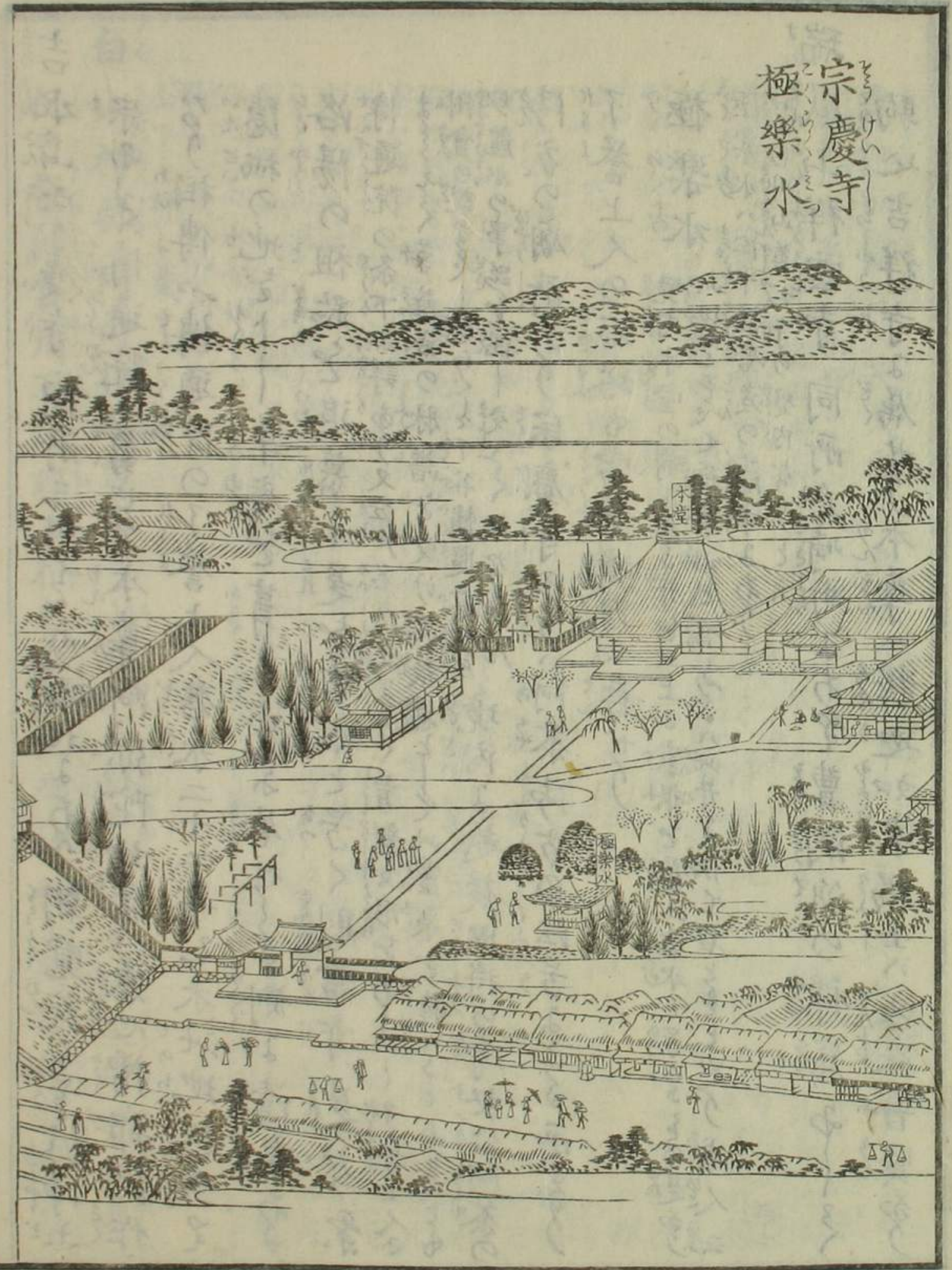
當寺ハ浄土宗流の一派ゆゑに所化學道の談林なり學業と
 勤むる輩聚螢映雪の功積りて眼を經論の面よけし五重
 相傳の窓前ゆゑに五念修行の悉地を求め三心具足の床の
 わね住不退轉の法義を期す

中臺山光圓寺醫王院と号し傳通院の西二町あり久保町と
 云ふは浄業の精舎なり傳通院の閑山了譽上人當寺を
 興復あり上古の閑山ハ行基大士とを了譽上人の時浄宗より更たすなり本尊阿彌陀如來の像ハ惠心

僧都の作あり當寺を中臺山と号するは此地舊中臺村と云ふあり由縁起ふにせり
 本本藥師如來同寺ハ安を本尊ハ行基菩薩の作あり一尺の
 立像なり慈母藥師女の脚影を摸しぬ故小女體ありと云ふ

毎年四月八日十二日閑扉結縁せむ
 縁起云天平十三年辛巳行基菩薩歳四十三東國の群類を化度
 せむと先南紀熊野權現へ叅籠あり歸路傍に杉
 大樹あり此を像材と佛像を造立せんと其木を伐せ誓て
 云く善此より佛意ふ協ひなむ此木我ふ先より有縁の地に至る
 至ると云く彼所の谷川は流さむ夫より東國は赴き此地に
 至るもあふ彼靈木あはれ入江は漂着せ往古此邊より高田の邊に
神田橋の内外迄まで必入の
 江河なり仍佛意を尊と慈母の為則東方に向ひ香華を捧げ禮
 拜なり信心の誠を盡しあふ然るは面親藥師女金色の光を放
 ちて顯れあふ依り行基菩薩件の杉の本木を以て此本尊を
 模刻し此境は一字を営んで安置せり又六道流轉の衆生我
 救へる末本を以て六所江戸六阿彌陀と
稱するものありの彌陀像を彫造し六所に分ちあり

宗慶寺
極樂水



吉水山宗慶寺 同所三町をり西北あり朝覚院と号し浄土

宗の傳通院に屬せし本尊阿彌陀如来ハ惠心僧都所作

なり相傳ハ傳通院の了譽上人應永二十二年乙未此地に至り

隱栖の地をト一草庵を葺くあり小居せし側ハ清泉あり

洛陽の祖點を追慕し是を吉水と号く則當寺是が宗

傳通院の条下ハ詳あり又江戸名所記云く昔龍女形をわたり了譽上人ハ

附會の説あり恐らく下谷横隨意院の境内ハ越後必將の淨母公阿茶の

妙龍水の事蹟を混交云々云々

了譽上人の石塔も當寺境内に存せり

極樂水 境内本堂の前ハ井を云上ハ家根を覆ふ吉水と号する是あり

瑞鳳山祥雲寺 同所戸崎町ハあり曹洞派の禪窟也

駒込吉祥寺ハ屬せり本尊ハ釋迦如来脇士ハ文殊普賢あり

寺記云當寺ハ天文元年癸辰遠山隼人正創建の精藍也

小田原北条家の分限帳ハ遠山隼人佐江戸平川を領せし時同一人あり

六年甲子正月八日北條國府臺の合戦ハ討死せし人ゆゑ當寺ハ靈牌あり法名ハ月溪

正圓居士と當永祿七年甲子寺成り淨光院と号し當寺過去帳ハ

永祿三年庚申二月九日ハ設花陰宗順大禪定尼と稱し此死ハ遠山隼人正の室中

北條上總介の女なりと云々淨光の文字禪ある故ハ室永の頭今のゆく祥雲寺と

改む吉祥寺第二世大州安充和尚を請く開祖と云云當寺創

今の市城内和田倉の辺あり吉祥寺其項ハ同ハあり今ハ吉祥寺ハ駒込

引移を當寺ハ國初以來駿河臺ハ引移小石川金杉ハあり今ハ今ハ今ハ

禪師撰もる所の當寺花經の銘ハ大明心越 茨木春朔墓 門内右の方鎮守稻荷祠の

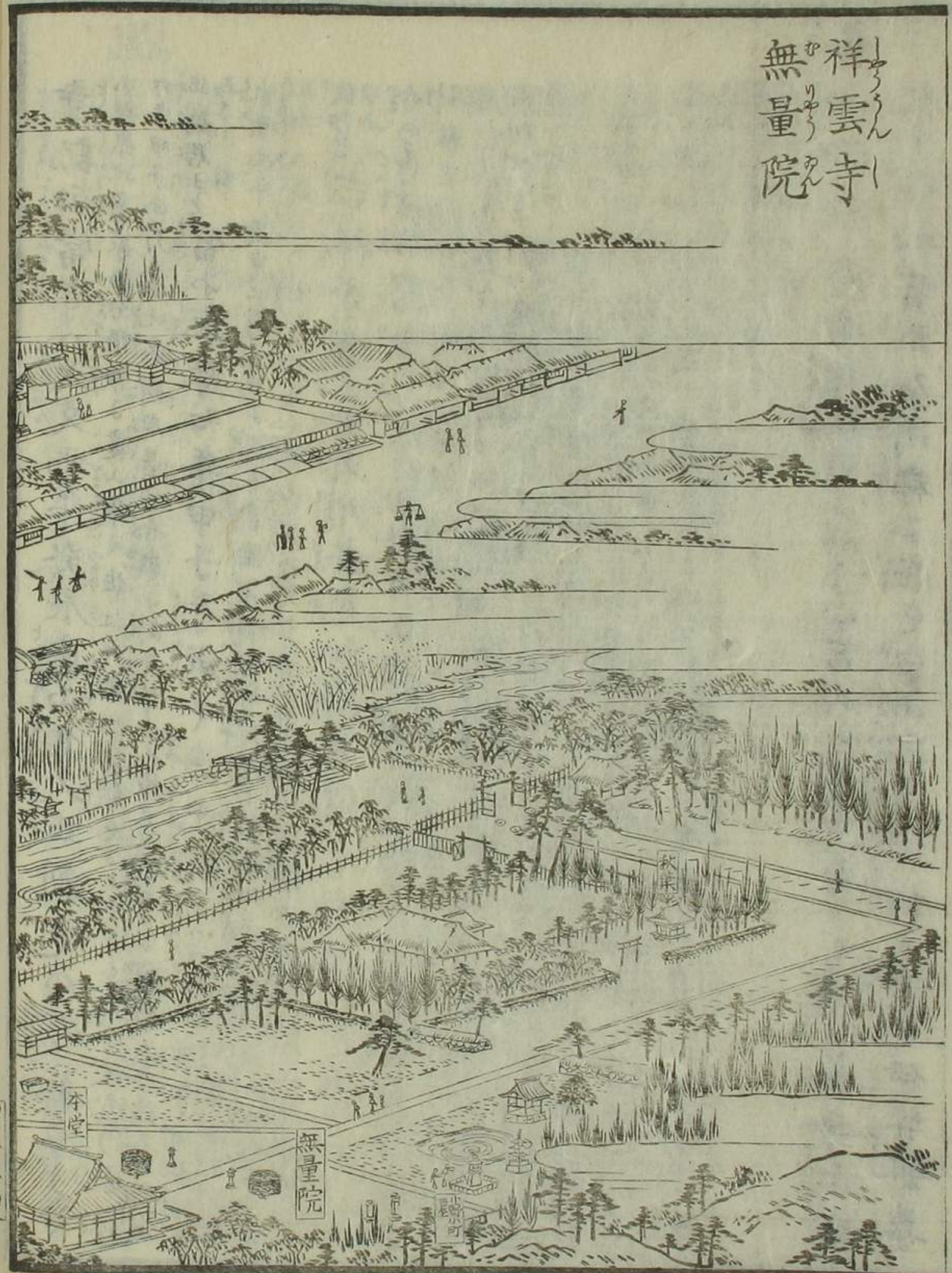
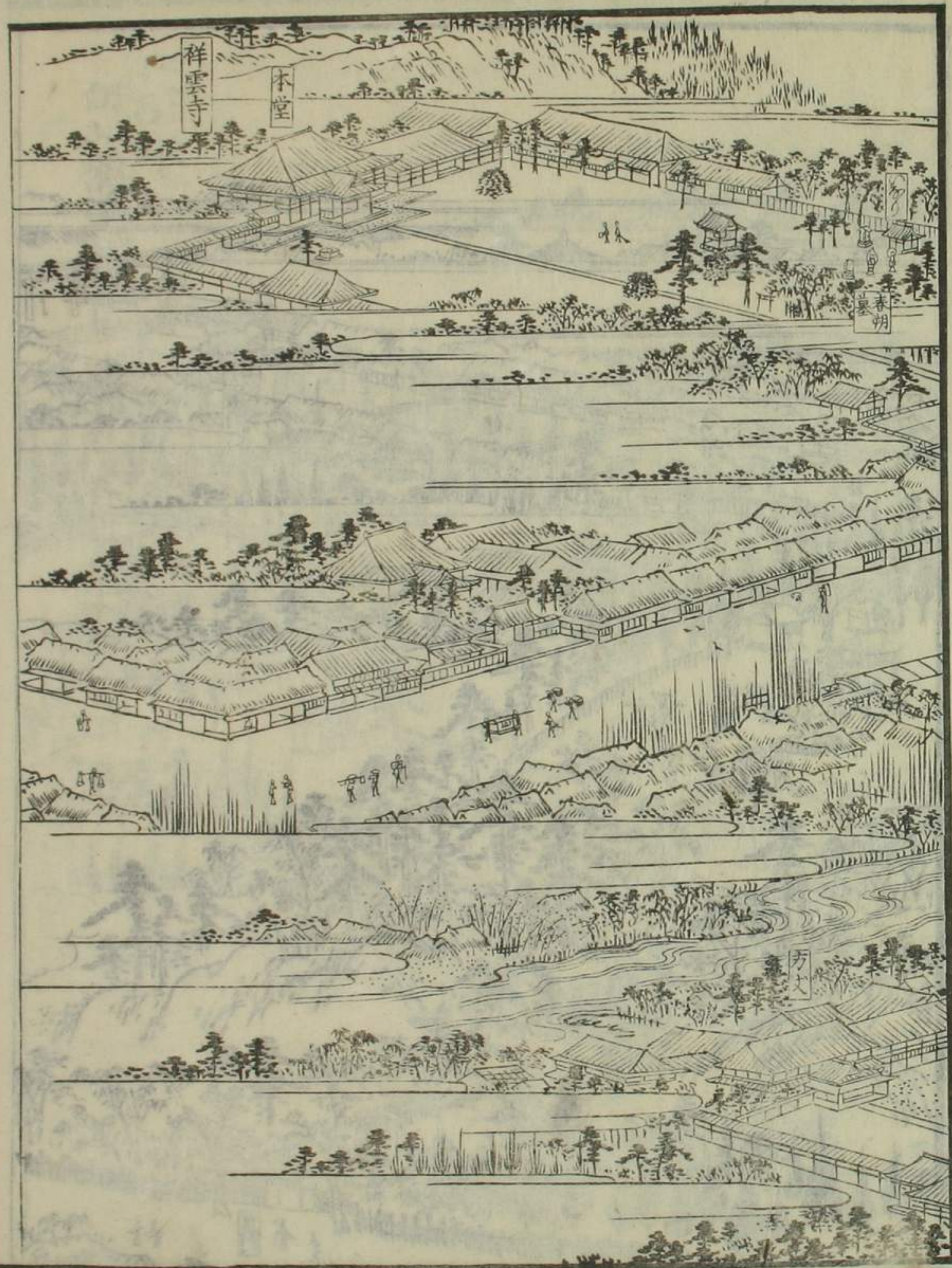
地黃坊檀次と云々酒の備置家三浦氏の親なり延宝八年庚申三月八日酒を戲すを

原ハ住池上太郎右衛門底深と云々醉客と酒戰せし戲編あり當寺ハ所ハ石

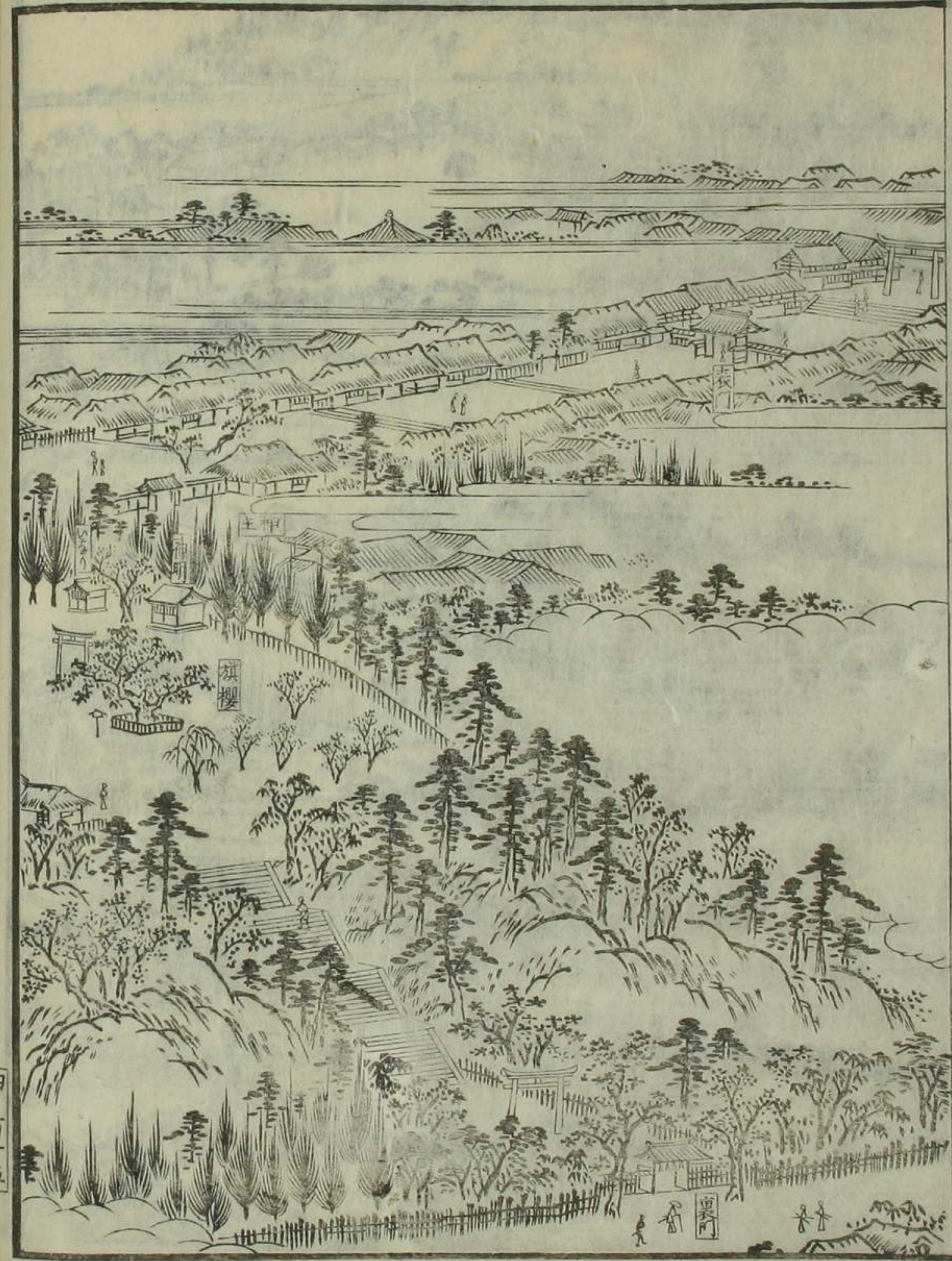
酒の儀ハ高永菅住と云々人遺立せし遺骨を葬せし墓ハ谷中妙林寺ハあり

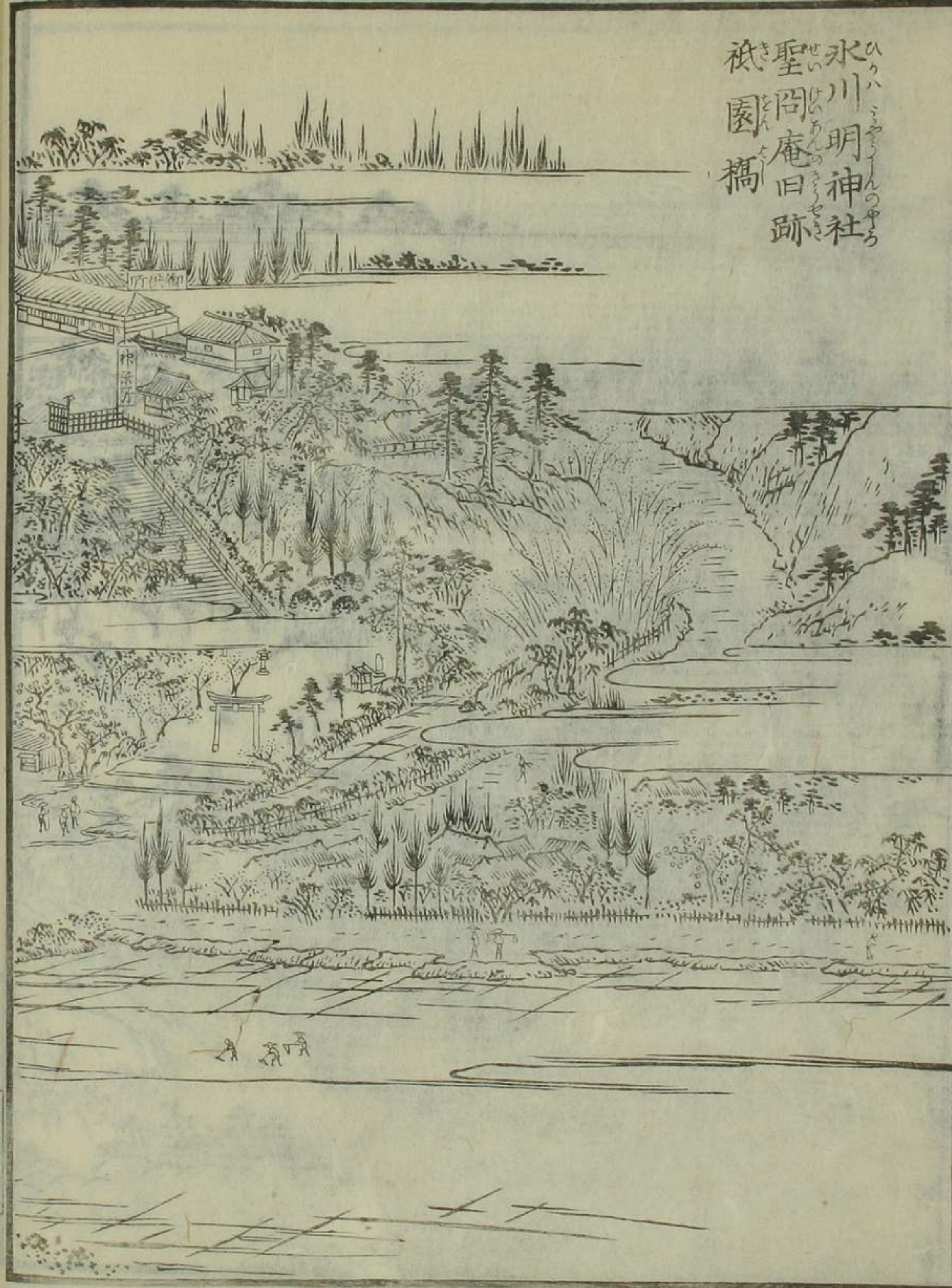
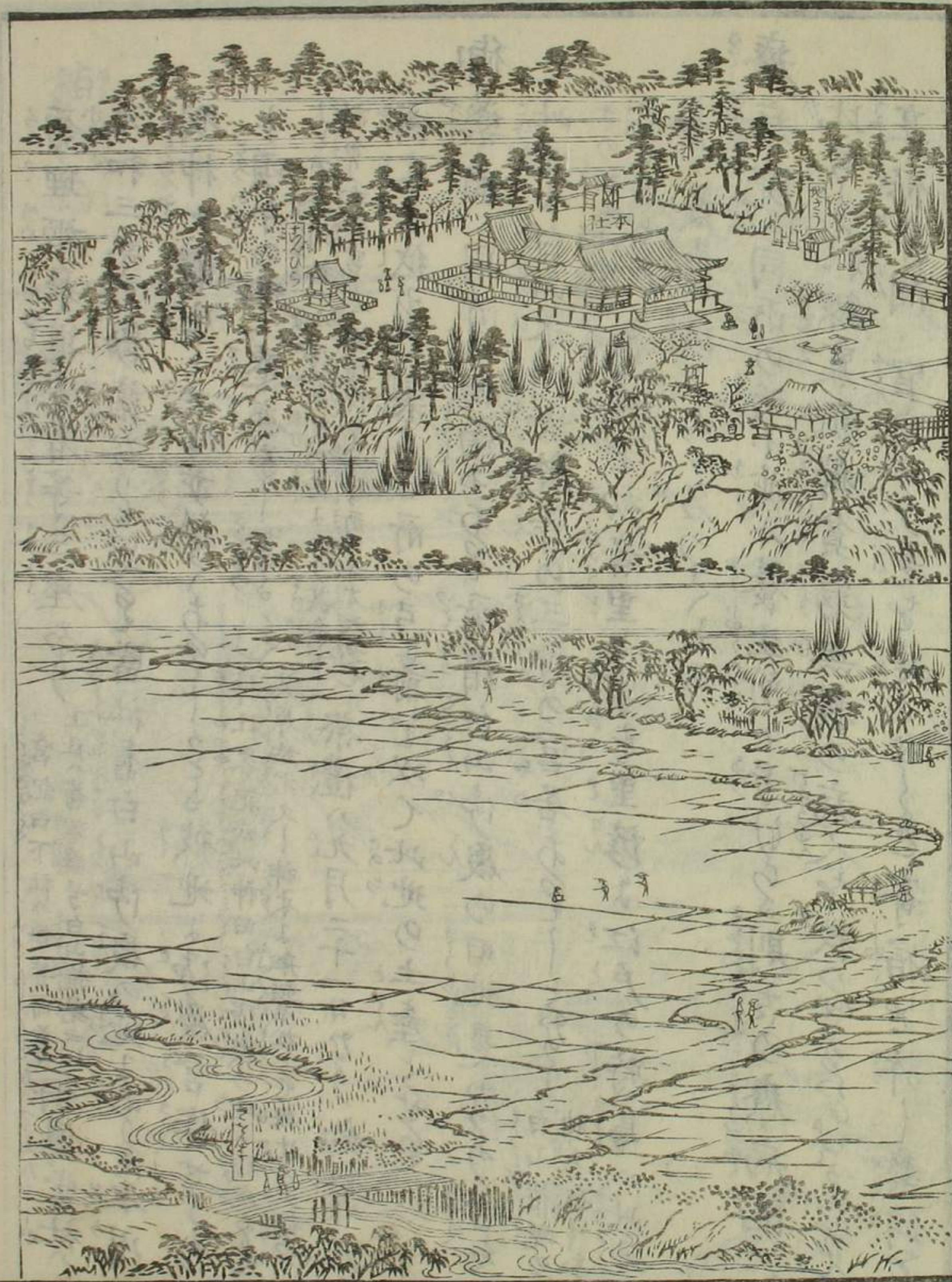
白山神社 同所指谷町ハあり小石川の鎮守也ハ神主中井氏奉

祀を祭神賀州石川郡ハ在也白山比咩神社ハ同ハ伊弉册尊



小石川
白山権現社





氷川明神社
聖問庵跡
祇園橋

猫狸橋



菊理姫泉道守者等三座あり 一宮記曰下社ハ伊弉册尊 相傳當社の
 元和三年の勸清なりといへる當社舊白山沙殿の地ありて氷川
 明神女體宮と共に並びてありていへるも彼地は沙殿宮作せし
 一頃今の地へ遷座ありていへる也 神社畧記云此神曰白山沙殿の地は鎮座ありて
 其原始尤久し神本は船繫松と無比の天樹あり
 詳あり文幹宮も今傳通院の南あり所の形木天樹也 祭禮ハ九月二十一日なり 釣樟此
 齒木と紙わく製せる所の弓箭を以て此地の土産とせし
 御薬園 同所の西南ありて所謂白山沙殿の旧地是なり古
 此地は白山氷川女躰等の三神の宮居ありていへるなり 白山権現の
 神本船繫松
 此の松も此地は 此邊を初音里と字を里彦は江戸の時鳥ハ此地
 ありて發声を故にありて名つくと云
 療病院 同所の西に並ぶ養生所と号けりる則古の療病院に
 比せしれ鰥寡孤獨貧窮無頼の病人を救つせありていへるなり
 享保年間 官府より是を建てせしめ寄宿を許し藥飼を

氷川明神社 巢鴨眞性寺



賜ふ所仁惠實は百世不冠たりといふべし

氷川明神社 同所西北の方五町をかりふあり相傳ふ 孝明天皇の

御宇に鎮座なりと云々 祭神武州大宮の氷川明神より昔ハ

白山湧殿跡の地よりありし白山権現と共に地を替りせらるし

より當社ハ此地より遷る極樂水宗慶寺の持中にて祭祀ハ九月

十日なり

武藏國風土記曰 足立郡巢鴨郷氷川神社 觀松彦香殖稻

天皇御宇三年戊辰所祭素盞鳴尊大己貴命奇稻田比咩
合三座也云云

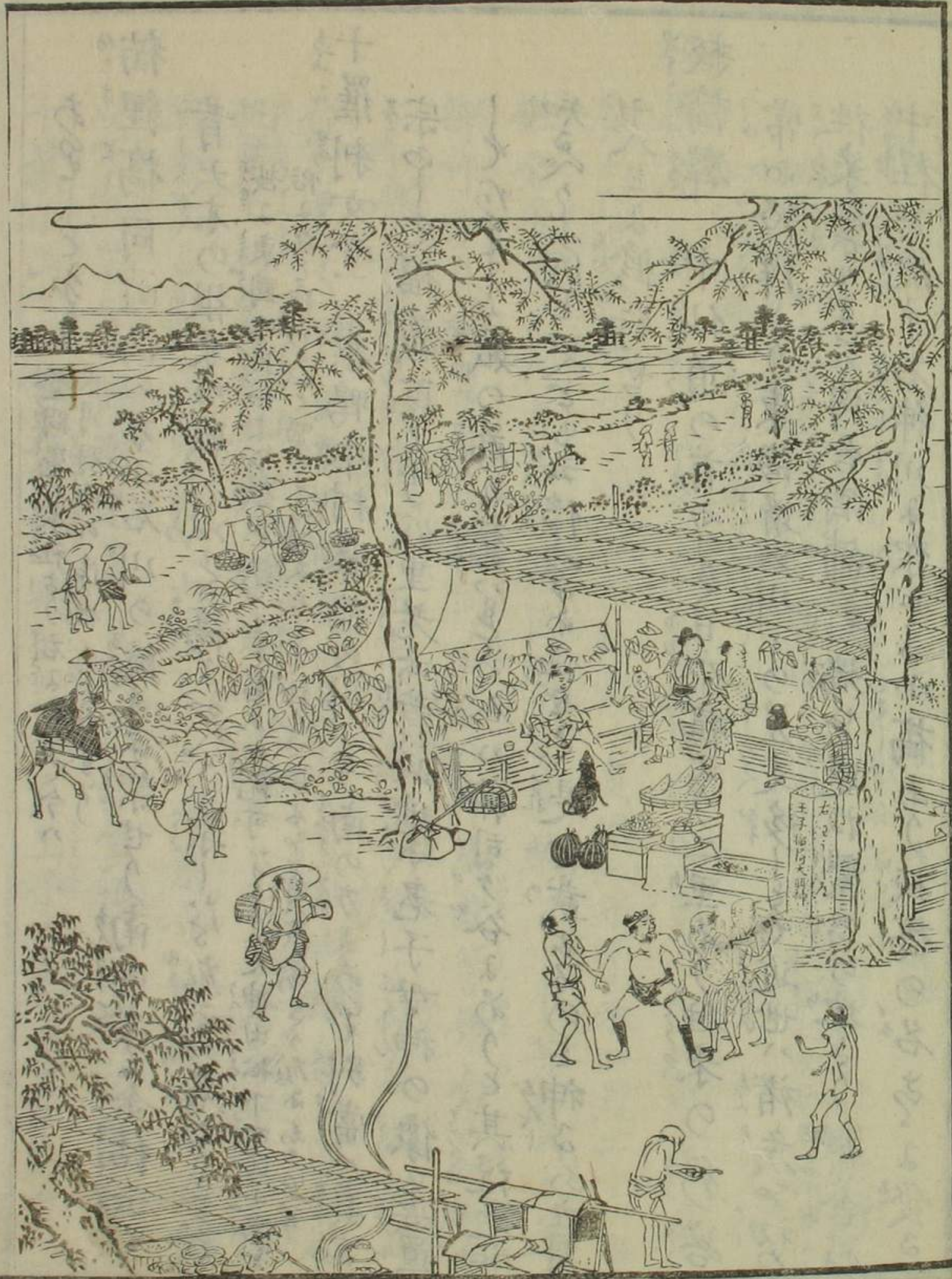
按此巢鴨の地昔ハ足立郡に屬せし所なり今ハ豊島郡の内に入り

當社ハ千有餘年を経る所の宮社ゆりて八幡太郎義家公奥

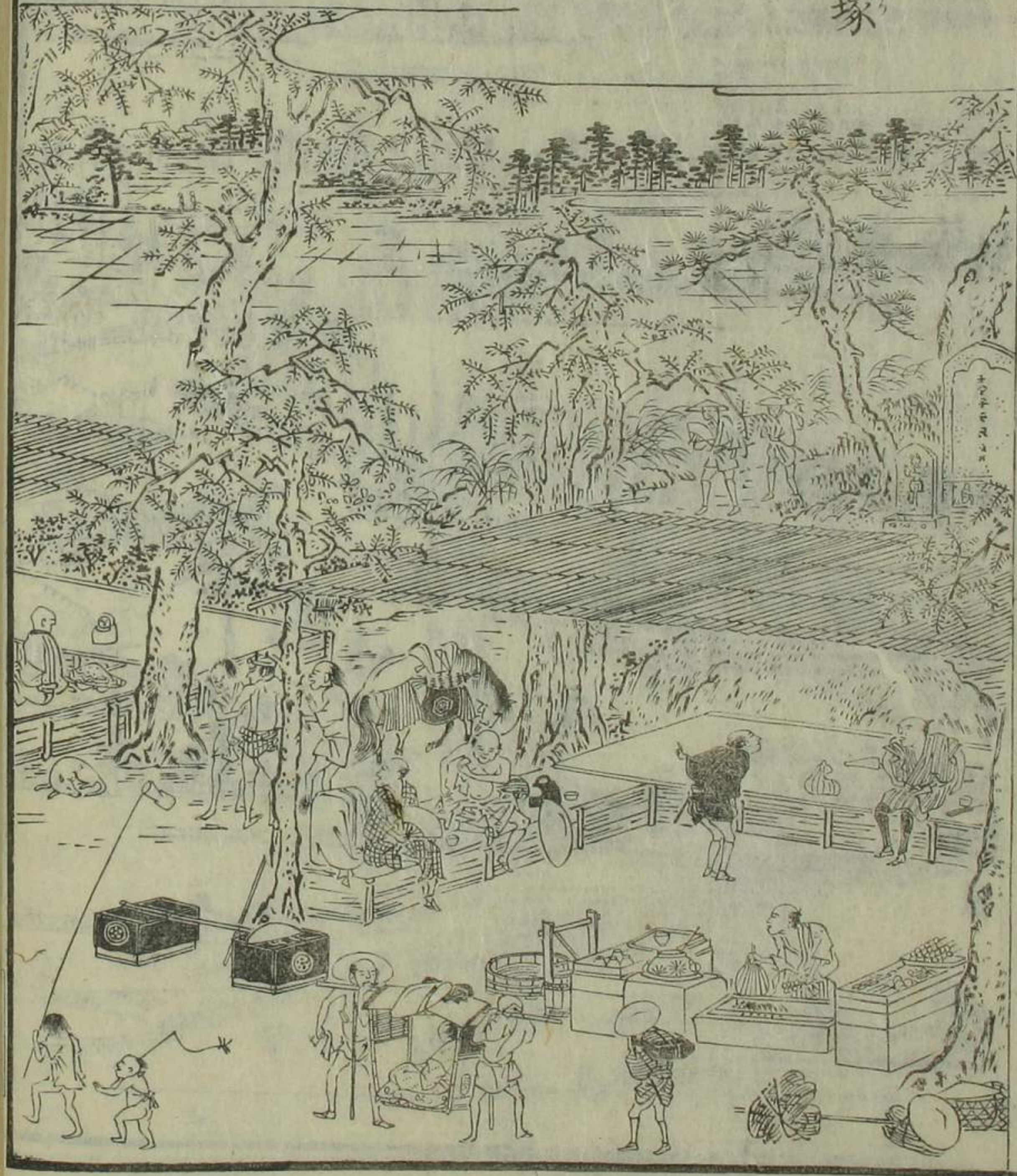
州下向の時當社より恭籠ありしと云傳ふ中古荒廢し其形

をわし残るしを傳通院の開山了譽上人此地の幽邃を愛し

庵を結んで聖岡庵と号け此地より閑居ありし頃宮居を重修



庚申
鴨塚



あまのこあり 聖阿闍梨本社より右ありて今ハ
水川明神の御供所となせり

猫狸橋 同所西の方小石川の流るる架せり南向亭茶話云く

昔大本の根本の朕を以て橋よかへて架したる故此名ありとぞ

按東國の里俗木の根を根之本と唱ふ此説可なり又神田松下町の小路を
俗は為と名せんと唱ふも材木屋多く住んで根本を賣家多きをなすあり

十羅刹女堂 巢鴨本村藤橋の川より南の方あり別當ハ真言

宗ゆくと福蔵院と号し里老云昔此地ハ鬼子母神の像も安置

しとつるが賊の為ニ棄つと今ハ雜司ヶ谷ありと其説是非

知るべしと云傳ふるも任せと是を載するの神のハ九月

十八日ハ修行せり

板橋驛 中仙道の首より日本橋より二里あり往来の仍客

常小絡繹より東海道ハ川の差支多しと近世ハ諸侯を初め

往来繁々も傳舎酒舗軒端を連ね繁昌の地より驛舎は

中程を流る石神川ハ架する小橋あり板橋の名あり發る

板橋ハ上下に分てり此地を下板橋と稱し上板橋ハ練馬
と稱し
板橋又太郎板橋と唱ふも義経記より小田原北条家の所領役帳に
板橋又太郎板橋と記すも此の地を領し大田新六郎も板橋大炊助屋敷分の
地を領し恒岡彈正忠も板橋高本
方の地を領するを挙げり

板橋原 都々上下板橋と稱する地を指て云ある一此地とあり

廣々たる平原なり中古治乱記ハ貞治六年丁未四月二十六日

鎌倉管領足利左馬頭基氏逝去を其弊に乗し芳賀入道

禪可子息伊賀守高貞同嫡子八郎高政等鎌倉へ押寄ん

と應安元年戊申正月五百餘騎を引卒し越後國を進

發あると同日武州板橋原へ打ゆる此由鎌倉へ聞えれば

執事上杉憲顯其身ハ鎌倉を守護し子息兵庫頭憲將

同兵部少輔能憲等を大将とし千葉介直胤小山朝明

以下其勢二千餘騎是日武州洲賀茂といふ所陣をり

千葉小山が手勢五百餘騎を引分ち王子の森に置とあり

十羅刹女堂
あつらひせりやう



板橋の驛



早發板橋
曉發板橋驛
迢々遠北門
山柿著日早
草短履霜繁
行李臨東道
長亭徑大原
離家還未幾
遊子易銷魂
南郡



孤雲山乘蓮寺 慶學院と号を同所橋より三町あり 此方道あり

左側より浄土宗あり縁山は属を本尊阿弥陀如来の像を
佛工春日の作閑山ハ英蓮社信譽上人了賢無的和尚と号に

當寺ハ應永年間の草創中々此地の卿主板橋信濃守忠康
といふ人の菩提寺なり當寺五世明譽上人龍宅和尚現住の頃

天正十九年辛卯 御當家より守護不入の朱章を賜ふ又
寛保三年癸亥の夏 大樹此辺涉遊獵の時當寺に憩とせ

あひより永規となるなり

相生杉 寺の後園ありわくし此辺涉遊獵の頃此杉の号を問ひせり住僧答

女男松 堂前あり天下泰平を祝

板橋忠康墓 同境内あり碑面本樹院殿前信州空山有賢禪定門

信濃守忠康ハもと豊島氏なり北条氏直へ仕此地は住し板橋と名はるなり
せりと云く又或へ云豊島氏系譜は滝野川長守守弟を板橋次郎豊清と名つる由記
せりと云く又或へ云豊島氏系譜は滝野川長守守弟を板橋次郎豊清と名つる由記
なりん又北条家の所領役帳に見えり板橋又太郎同大炊介とあり其一族なるなり其餘

木下稻荷祠 同一驛の端を街道より左の小路を入る智清寺と

云る浄家の寺は安置元和三年丁巳當寺中興心蓮社法譽上人
輪宗和尚感得せられり神像なりと云相傳ふ豊臣秀吉公

いまだ木下藤吉郎と称せられ一頃此尊神を崇信しあひ既ふ
して天下の武将とありあつたを以て世は木下出世稻荷と称し

清水坂 志村あり世は地藏阪とも号く舊名ハ隱岐殿坂を

呼べし昔隱岐守何某闢るる故ありといふ此の熊野宮の此地嶮
岨中々往還の行人大ハ惱り依て寛保年間大善寺住住守

呼べし昔隱岐守何某闢るる故ありといふ此の熊野宮の此地嶮

岨中々往還の行人大ハ惱り依て寛保年間大善寺住住守

呼べし昔隱岐守何某闢るる故ありといふ此の熊野宮の此地嶮

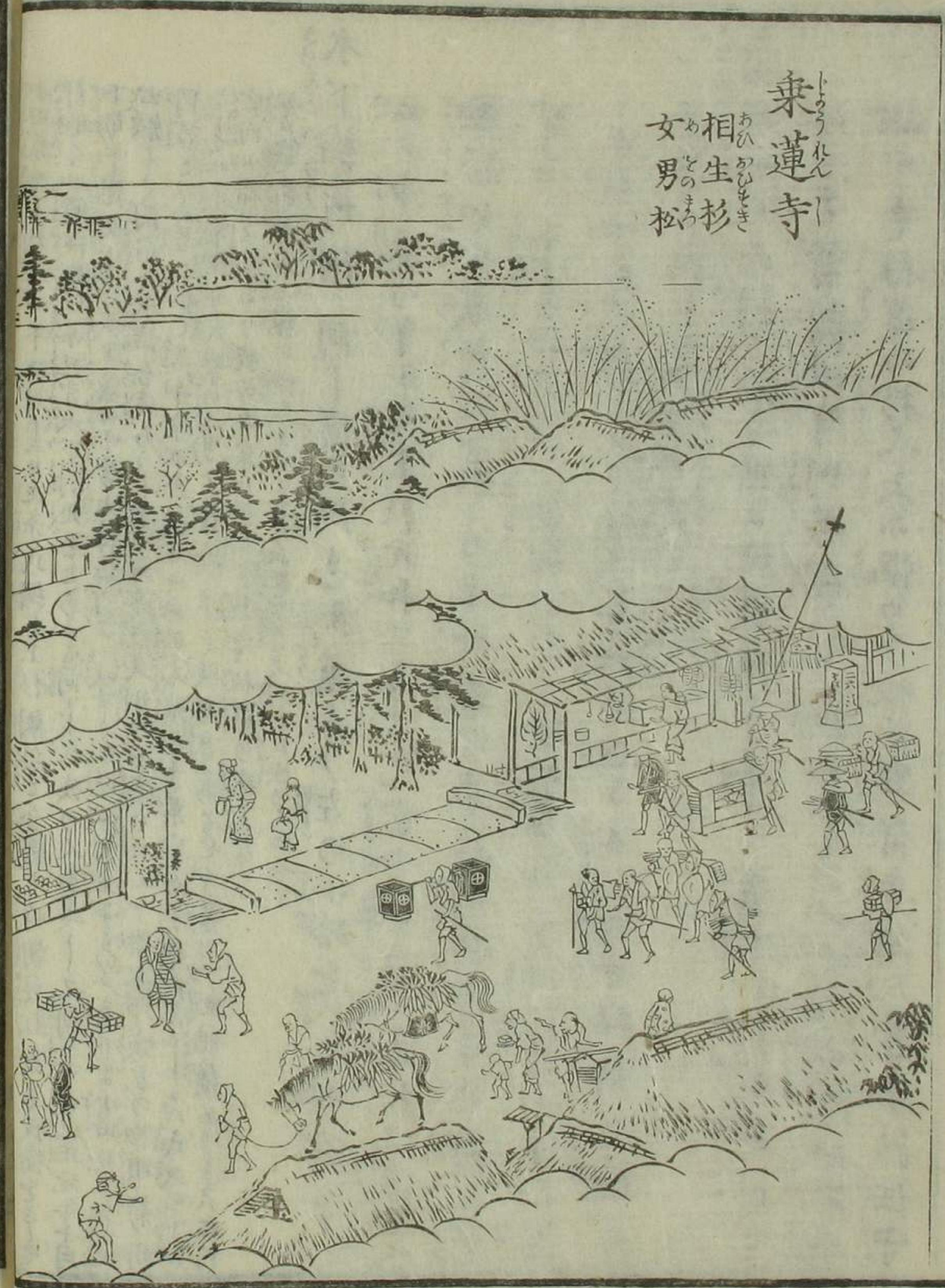
岨中々往還の行人大ハ惱り依て寛保年間大善寺住住守

呼べし昔隱岐守何某闢るる故ありといふ此の熊野宮の此地嶮

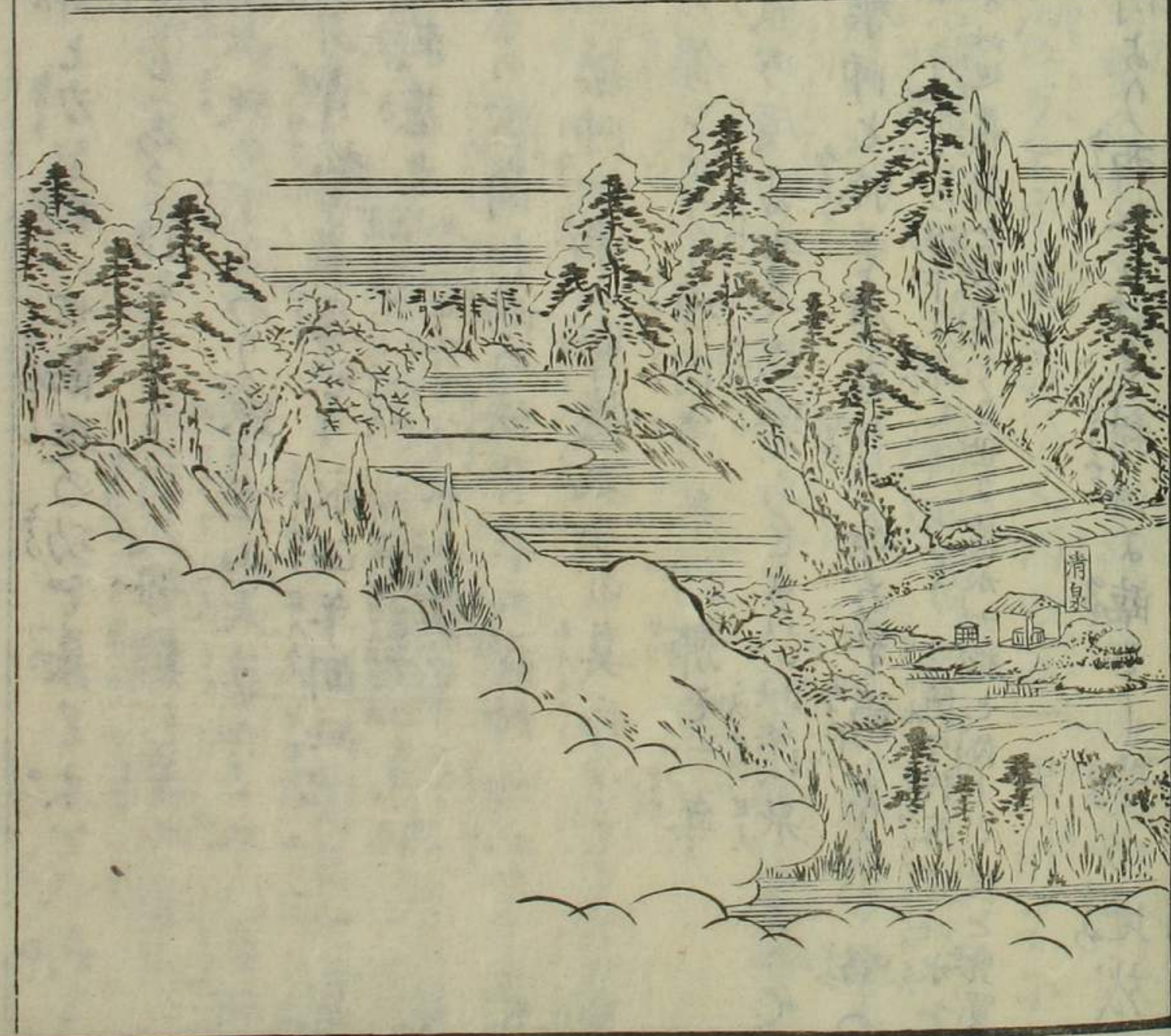
岨中々往還の行人大ハ惱り依て寛保年間大善寺住住守



板橋の驛



乗蓮寺
相生杉
女男松



清水薬師
清水坂
境内山の腰
あり清泉水
如き故に清
水の号あり
此は夏羅葡
を名産とせ
清水種とく
世に賞
まへり



直正和尚僧西岸と力を戮いせ勸進の功を慕ふ本を伐荆を
刈り石を置きて階とせありのり行人苦難の患を道

清水薬師如来 清水坂の下より醫王山大善寺と号し曹洞

派の禪林やぐ芝の青松寺に属せり永正年間此地の農民新見

善左衛門とよめる人閑基を 善左衛門法名を清雲大善庵主と号し其後元龜

年間に至り青松寺の雲崗和尚の法孫在天禪師住職し

法燈を掲ぐ本尊薬師如来ハ聖徳太子の真作やぐ左右

殿壇は十二神將の像を置く境内清泉湧沸を一年

大樹此地は遊獵の項當寺へ立寄らせり此清泉小ありて

此本尊を清水薬師と称する旨命あり爾よりかく唱ふ

此清泉ハ寺前山の涯下は添て沸流せり近隣の村落皆此水を

飲み此水は此迎菴菴を名産とせ世は清水が根と稱しと種を賣買

千葉家城趾 同所より西へけり耕田は臨み臺の地成

指くいへるも今も空塹の如き形所くは残るり此地は項と唱へり

此地の南の方を中臺とのひ又西の方一里計は小

西臺と云地ありて何もの城營の舊跡たりとのひ

熊野権現宮 同所清水坂の上より三町をかり西の方涯續より

社の後ハ涯は臨み松杉等の老樹鬱蒼たり就中樟の大樹ハ

周圍三圍は餘れは當社ハ往昔千葉氏城内の鎮守たりしと

今ハ志村より西の臺地の間 土人此地を隱岐殿とせしと字も今奥の

院と称する地は石の小祠あり十四五年前此地を穿ちて古鏡

二面と刀一振とを得たりしと形りされど其故をあらはれは崇

あらんるを恐る元の如く埋藏したるもあり寛政六年志村の里正

補一華表を石や又上の宮の地は 別當ハ新義の真言宗やぐ三次山

六百三十五株の杉を栽し 延命寺と号し中野法仙寺は属せり

此地の城主千葉隠岐守の家臣三次某の

靈を鎮る

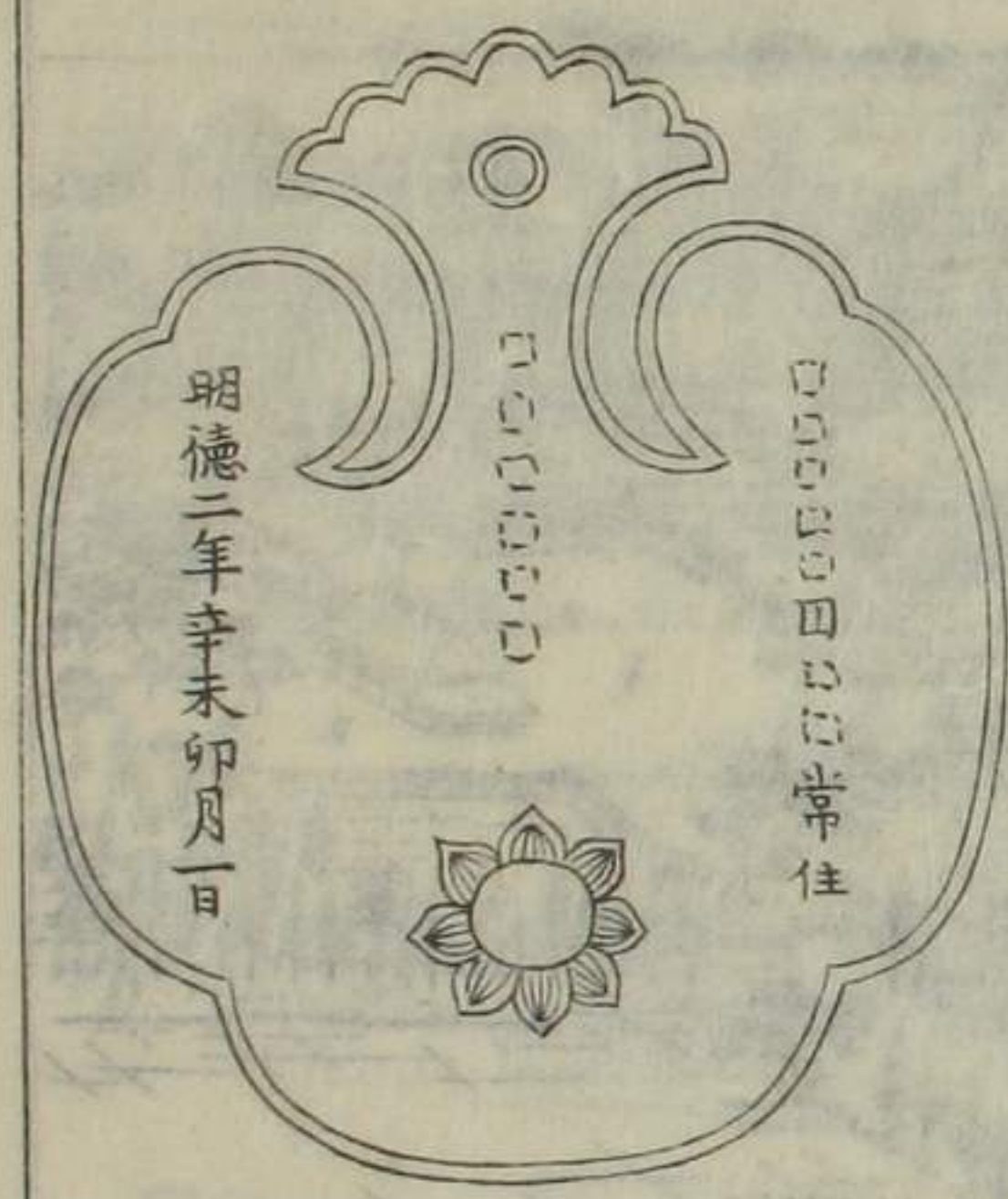
一夜塚 同所西南の畑の中あり此地を前野と号し相傳ふ小田原
 北条家の時千葉家の城を攻落さんとて寄子の軍兵此地に
 於て一夜の間に炮坐を築き城へ向けく此塚上より大発炮を
 放ち竟小城兵を焼討せしと云ふ
 西臺山圓福寺 熊野権現宮より二丁をかり西南の方西臺村より
 曹洞派の禪刹あり芝愛宕下の青松寺は属を本尊ハ拈華は
 釋迦如来座像一尺四五寸あり行基菩薩の作なり或をいふ
 佛首をかり行基の作る所なりと全躰ハ後人の作なりともり太田
 道灌入道の開創なり越生龍隱寺第五世雲岡俊徳和尚岡山
 たり 雲岡開基を所の 當寺ハ旧河越あり頃ハ龍隱寺に末寺あり
 一八ヶ寺の一なり 今寺領二十石を附せる當寺ハ永正年間の古文書あり其文
 左の通り

志村西代之内小系三郎より願後再面に留る

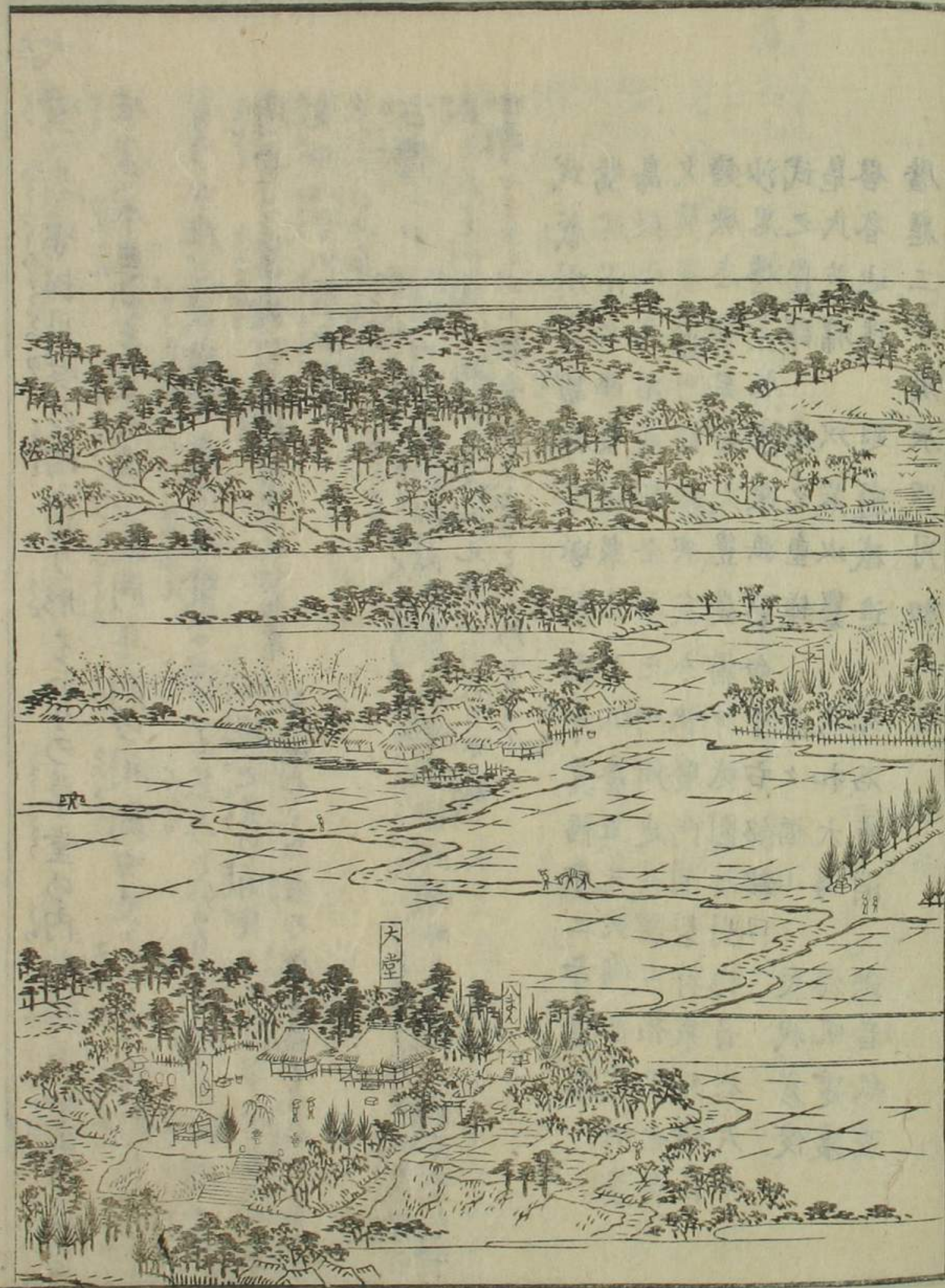
為宗安公永福寺の永代奇進中作又以前
 後勅解堂時寺に面一板寄を中か社合
 貞貞一橋より作爲後日奇進中状也刻
 永正十年癸酉十二月十三日
 由田彦六
 老母

圓福寺

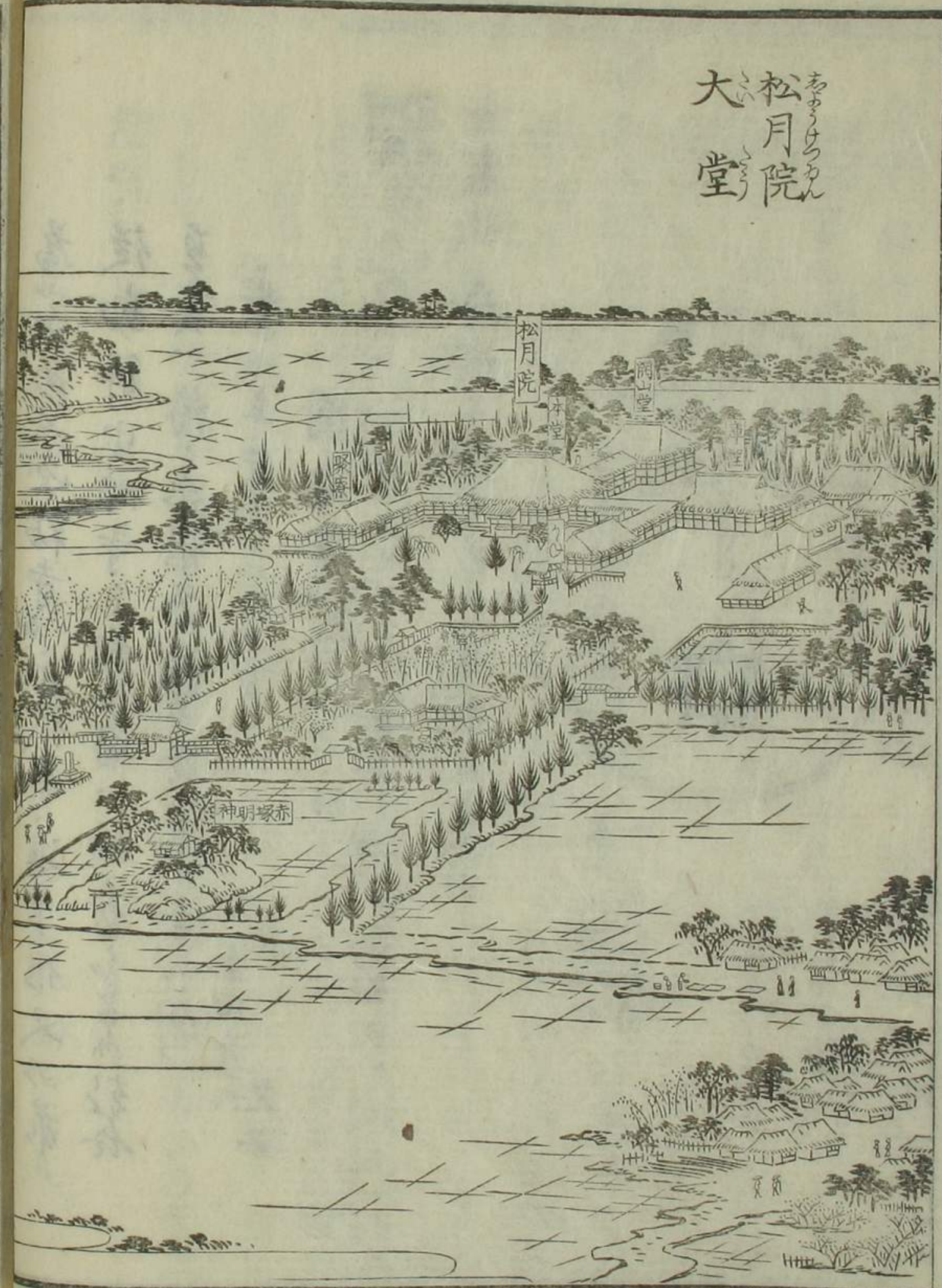
往僧志村城山の辺農民の地小寺面と字も田畠あるハ此多田氏の
 遺趾なりと
 古雲版 庫裡に掛るあり其形左の如し



長一尺三寸五分
 中一尺二寸五分



大松月院堂



大堂

赤塚松月院の南あり形をわりの草堂の内小釋迦如来の像を
安して本尊とを土人傳云大同年間の開創なり古八大刹なりと
なりされど後世数度の兵燹に罹り其土となりて僅小此釋尊法
浄堂と舊鐘のを残りなりと
真福兩寺の舊跡を
今釋迦堂の前後より上寺家下寺家と
鐘の銘は存する所の泉福

古鐘一口 堂前あり長五尺二寸あり口の径二尺二寸あり
執筆中若ハ鑑倉建長寺四十二世佛種慧深禪師より譯八圓月字を中
若と松と東陽ハ嗣法を永和元年正月八日示寂
世壽七十五以上鐵倉志ハ出るとハ流なり

武蔵州豊島郡赤塚泉福寺真福寺二寺鐘銘
驚沈潜之幽壑破衆生之大夢莫先於鐘也武州豊
島彼兩寺者前朝全盛之時所建具體古招提也獨
欠箕簾之器可謂缺典矣今快賢阿闍梨幹衆緣鑄巨
鐘厥志勤矣若夫豐嶺霜降祇園月明揚音於大千
沙界傳蓋於未耒無窮命崇右銘曰
哀我彦俊
武之豐郡州之重鎮
大扣大鳴
洪音無盡
啓昏迪迷 遐邇感進 劫石有消

筆執 三位親慶
大工平次五郎行次
勸進沙門治部阿闍梨快賢

萬吉山松月院

同所北の方通りあり右より曹洞派の禪林あり

常會地なり當寺ハ千葉介自秀開創の佛刹といハ開山と曇榮和尚と号ハ
當寺卵塔の中ハ文明の古碑あり然キハ開山と曇榮和尚と号ハ
文明より前ハ草創ありハ寺隱ありハ
佛殿の本尊ハ釋尊中ハ作者と云ハハ脇士ハ文殊普賢あり
堂前左右ハ木犀の大樹あり禪堂衆寮方丈庫裡ハ左右ハ並ハ
魏然として當寺ハ自秀の靈牌と稱するものあり松月院殿
南州玄參大禪定門千葉介自秀永正三年丙寅六月二十三日
とあり又其室の靈牌として中ハ龍興院殿了室覺公大妙延徳
元年己酉九月十五日とあり墳墓ハ卵塔の中ハ大松樹の下ハあり
古き五輪の石塔三基並ハ建屋中間ハありその尤古ハ蘇
苔滑なり右よりありと云ハハ自秀の名ありと後世造を儲たりと

地味... 則其室は墳墓あり

赤塚明神祠 松月院の門前より所の一堆の塚上は櫛二三株あり

其下は小祠を嘗と白山権現を勧請を土人云此塚の樹木等

觸るる時ハ必崇ありと云尤恐怖なり按上世高貴の人の葬

したる荒陵なり

武蔵國風土記殘編曰 武蔵國 豊島郡 荒墓郷 荒墓神社

大化二年丙午所祭猿田彦也 神貢五十束三字田云云

按赤塚ハ荒墓の訛ありん 歟 東鑑ハ赤塚左近同蔵人資茂と云

十羅刹女宮 同所北の方ハあり 眞言宗常福寺別當あり

田遊祭 毎歳正月十三日此地の農氏當社は詣りて後常福寺は集會一夜ハ

此祭事ハ初餅と擗りて三斗ありあり夫より擗り餅を以て教品の農具を

造る柄あるものを陸奥と云ふを以て製し牛馬の鞍に至るまで造りて

其後其具を以て苗代あり 始りて苗を挿し至り實熟し刈取至りて造りて

織りし等々を以て農具と云ふハ一ツと云ふは淺きなり其學は

尤俗のありと云ふも古に於ては是を勤者ハ悉く其學は

ヨシソウイナソウと稱するを若人の形をなせり安女といハ婦人の假面と云け

太郎次といハ猿田彦の假面と云ふなり尺を節次節と云ふは何れも鎌を

携へざるありヨシホウと云ハ藁を以て製し婦人の形をなせり并當

其席へ引出り飲食せり味に至り九万町の稲一萬町ハ鎮守へありて

蔵ハ積今年の稲ハ延ハ積りて終りてを 按九万町の稲一萬町ハ鎮守へありて

今當國近在の農氏に里談ありて云ふあり其故を問ハ耕田の中尤

中間上ハ稻を公ハ稲を公ハ稲を公ハ稲を公ハ稲を公ハ稲を公ハ稲を公ハ

千葉家古城趾 同所西よありて岳と云ふ土人城山といハ今官林と

なり頂ハ畑ありとされども空塾形杯其修は残り迄城内城と

覺しし所を殊も今も城壕の形ありて水を湛へしと鎌倉大

草紙小康正二年正月成氏市川の城を圍む同く十九日落城

し之實胤ハ武州石濱へ落行自胤ハ同く赤塚へ移るとあれば

此所を自胤の居城なるも必せり按松月院の開基と云ふ

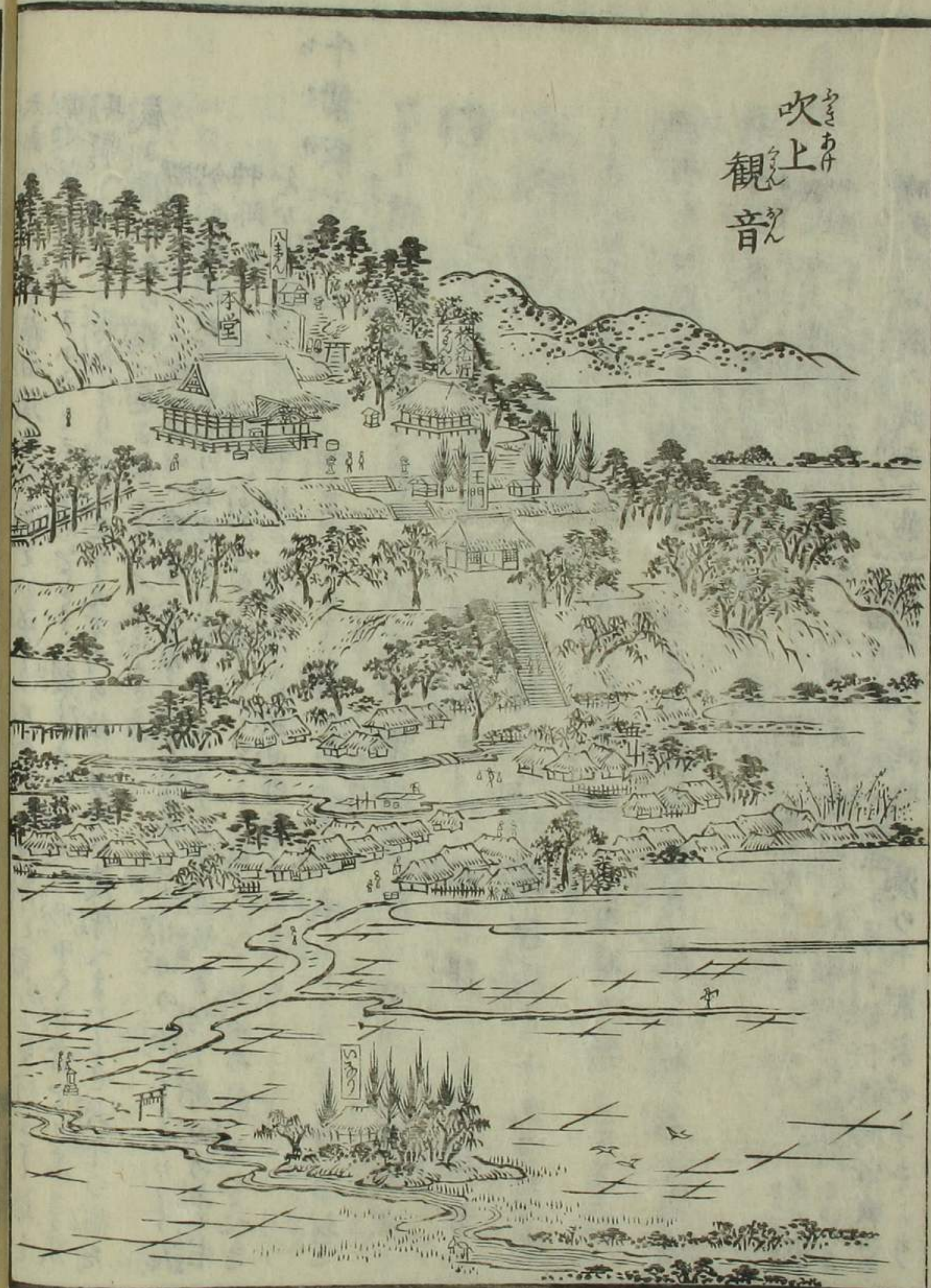
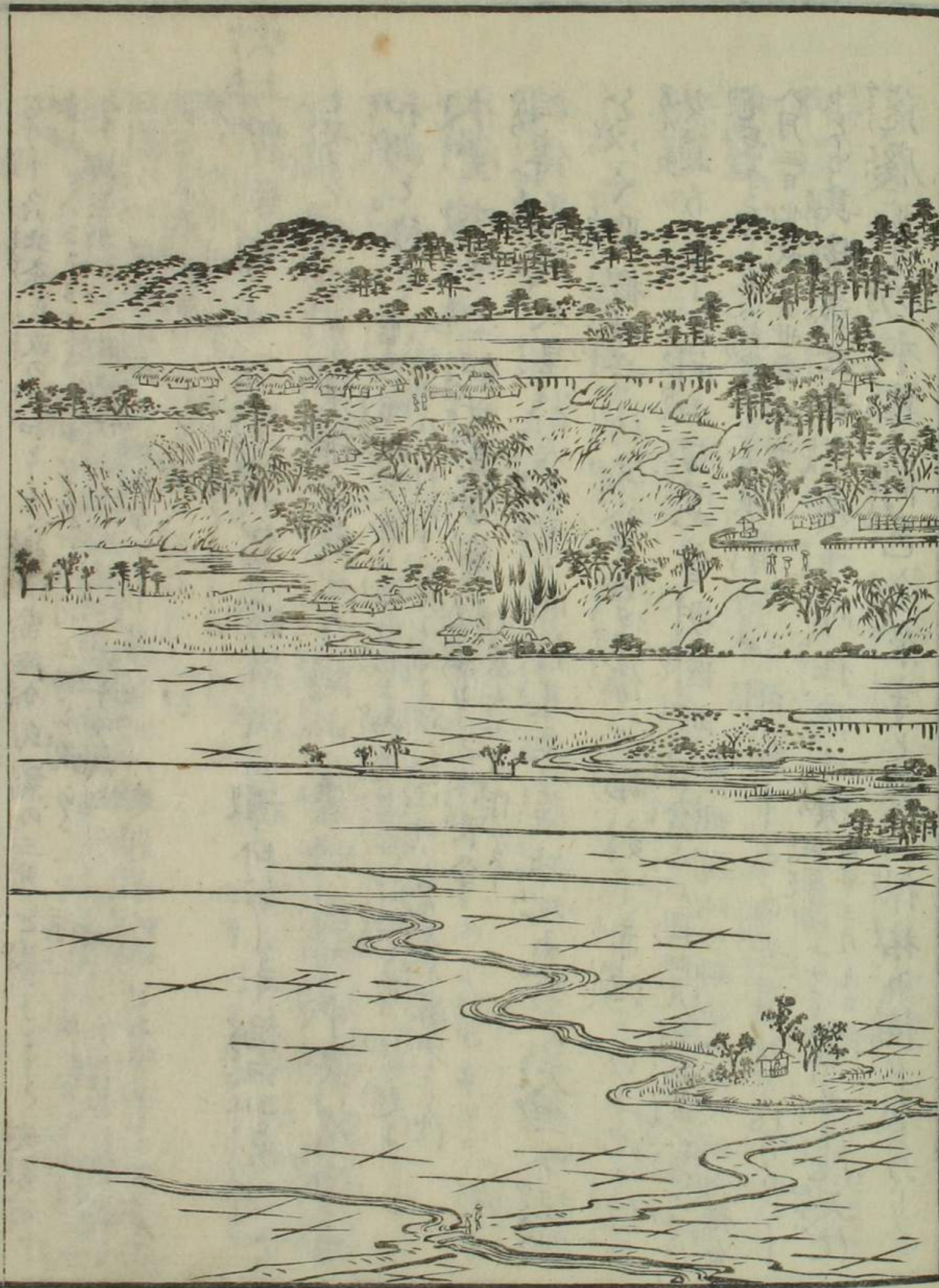
所の自秀も此自胤の氏族あり

按松月院鐘施財の人名の中ハ當邑春日氏の人多し土人云く春日氏

千葉家の味裔なりと云ふ殊も此地ハ其氏族多く今春日平右衛門といハ

人の家ハ古文書ありといハ又田原記ハ天正元年十月下旬下總國宿戰ハ

時武州石濱の城主千葉次郎討死を此時石濱の千葉家女子なり



吹上
観音

なりし北条氏政の下知とて北条常陸介氏繁の三男を養子とて彼息女を
妻合せしむるも幼少なり本内上野に預りて上野村の後に宮内少輔文能
あり彼与力かたを板橋の城主肥後守赤塚の城主越前守なりと云々然時を
石濱の千葉家の城主幼少ありしにわたり赤戸越前守此城をあらせしめり
猶兼五卷平塚の茶下等とありせしむる

吹上觀音堂

下新座村あり臨濟派の禪刹なり福田山東明寺

と号を同邑金泉寺に属せり開山ハ普明國師中興成浄西

和尚と稱す當寺寛文十二年の鐘の銘に勸進普日浄西とあり縁起は

本堂本尊聖觀世音菩薩立像あり長八寸

相傳聖武天皇於天平年間行基菩薩此地に於て天竺の棕樹

を以て聖觀世音淨丈八寸の像を彫刻し赤池といふ池の傍に

安置ありしと開山智覺普明國師鎌倉志曰國師ハ妙葩春屋と号し

建長寺五十五世嘉慶二年戊辰當寺を開創しある安置せしれり

八月三日化寂と云世壽七十八此禪師ハ大永四年寺院大に

荒廢せり仍本尊ハ同邑金泉寺といへる禪林小校しありし也

一ヶ元禄年間信州より沙門浄西なるも此地に來りし頃

脚痛ありし行歩かなひごとく金泉寺に止りてわたりし夢中

靈感ありて其痛全快しされば此本尊の加護なるをを

報恩の爲當寺を再興し又新し淨丈二尺三寸の尊像を彫刻

し其前の靈像をバ新き佛髻の胎中に籠りてありし也

なり然る往し安永五年丙申十二月十日夜二更の頃觀音堂の

内陣より出火し火焰盛なり衆人近寄りあつたをみるハ既

火中埋れぬ然る唯左の床と右の淨足とを焦のこむ

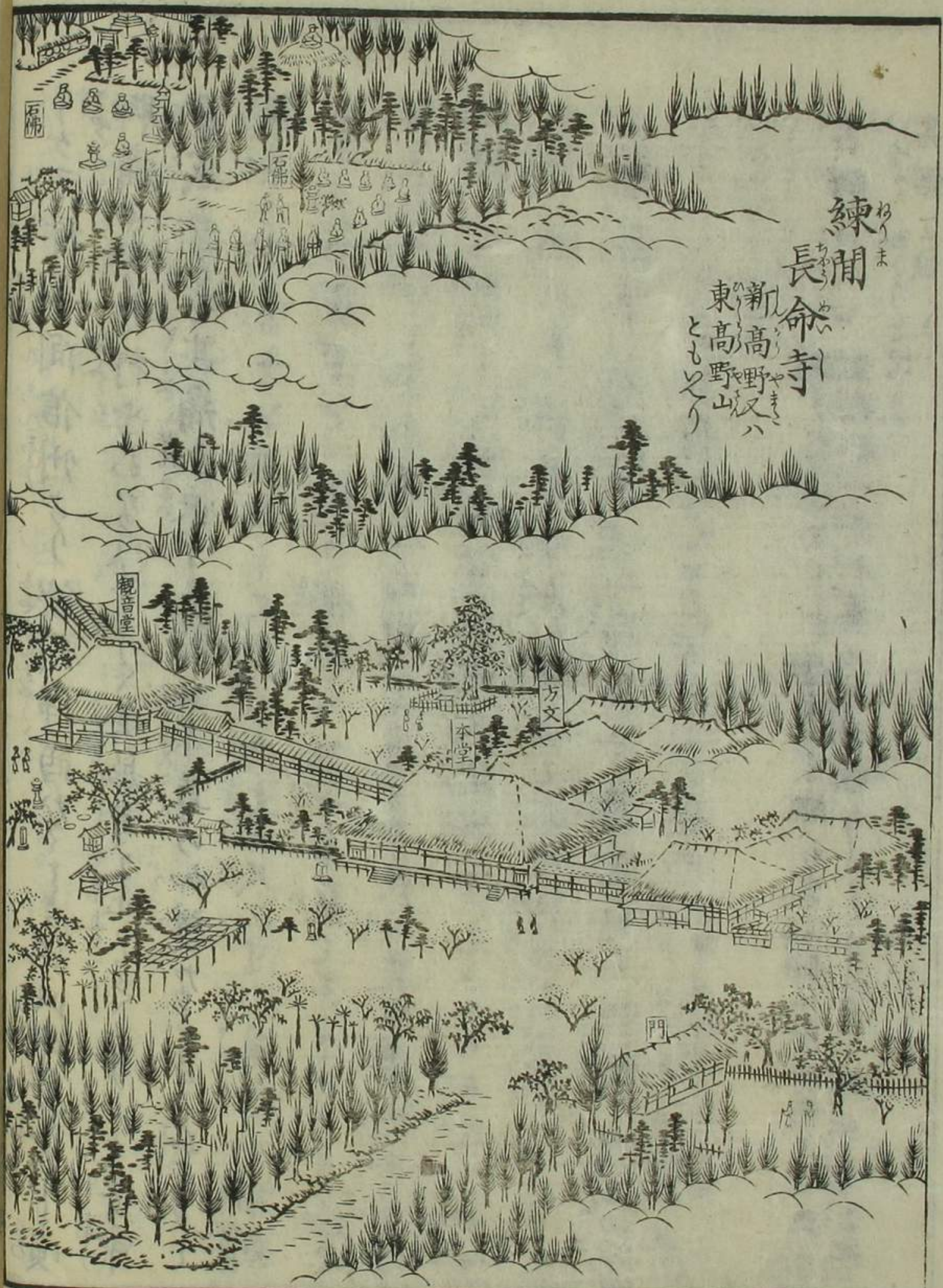
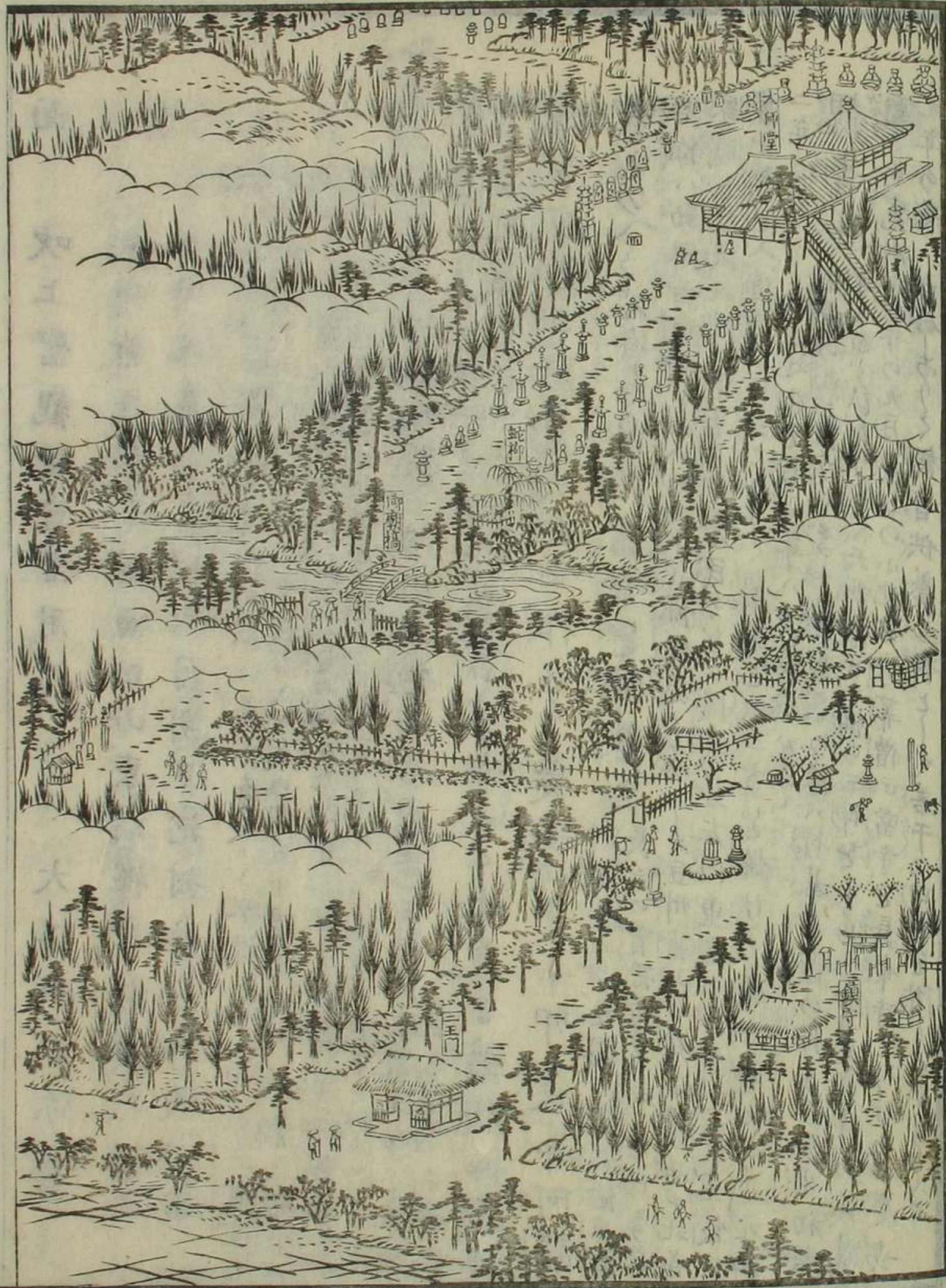
全髻恙なし同邑に伊三郎といへる農民あり夜明て灰中

探し本尊を得たりし事同正月七日の夜より

同十六日に至り

古鰐一口

渡り六寸五分を厚サ二寸餘あり正保三年丙戌十月觀音
堂再建入佛供養の爲開帳なりし時寺境赤池と
其銘は曰く



練間長命寺
新高野山
東高野山

面 吹上聖觀世音堂用之 大工飯田弥七

背 武州新座郡下村福田山東明禪寺存貞代置之
于時元龜二年 未 六月朔日 河村弥二郎殿寄進

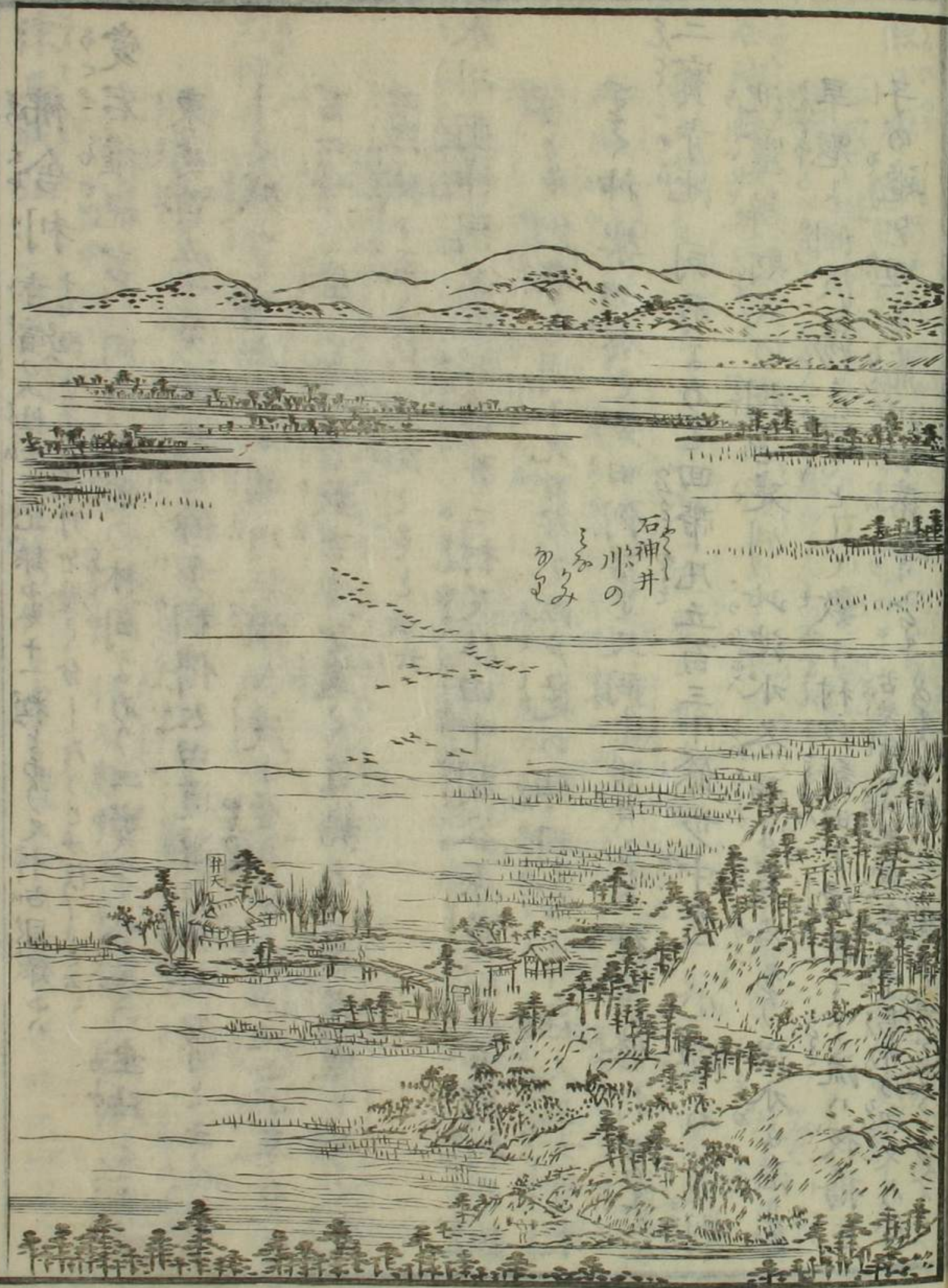
按河村弥次郎ハ小田原北條家の屬下あり永祿二年小田原北條家の
所領 役帳ハ河村照百七十八貫五百六十文の内五十貫文江戸新倉とありハ
永祿より元龜天正の頃迄ハ河村氏此地の領主たりしと云ハ存貞ハ當寺第三世の住
僧也松岳存普右貞如南禪師と号せし電二年辛未六月朔日ハ寂せし此人坊上人
谷原山長命密寺妙樂院と号し上練馬谷原邑あり 永祿二年小田原
北條家の所領役
帳ハ石神井の岡谷原在家岸分の
地と太田新六郎知行の中よ加へり 眞言宗ゆゑ本尊ハ藥師如來の
像と安置を慈覺大師の作なり慶安四年辛卯慶弐阿闍
梨としる本食の沙門當寺と開基也 阿闍梨ハ伊豆國の産北條早雲
俗稱ハ勘解由重明といふ天正中北條氏規ハ屬し豆州莊山の城ハ籠居北條
家滅亡の後此地ハ退居し農民となり其弟左内重國の子新七郎重俊に
家を譲り入道僧衣の身となり慶弐と改め室を儲け蓮中庵と号し元和
二年三月十二日ハ遷化を時年八十餘歳なり
觀音堂 本堂の西あり軒多土面觀音の像ハ行基菩薩の作あり和州初瀬
廟と寛永十七年の九月長谷の小池坊秀篁僧正當寺と長命寺と号けり慶安
元年の冬 台命あり觀音供養の料として若干の田園を附しありとあり

鐘 同所あり銘文ハ
當寺定昌師撰也
大師堂 本堂の西北教百歩あり是と興の院と稱せ今本堂より大師堂より
之ハ北州野山大師入定の地也と摸擬せ其堂前ハ萬燈堂あり又ハ廟也
地標 同前庭あり左右ハ七規を六地菴等の石像其石像五輪の
塔也増島氏累世の墳墓也並ハ建又堂の四隅ハ五重の宝塔立十三佛十五
石像等の類ハ累々野山の規制なり三輪の松と稱するものあり
今ハ樹失り樹林鬱蒼 弘法大師の法影を當寺開山慶弐阿闍
梨感得の靈像なり

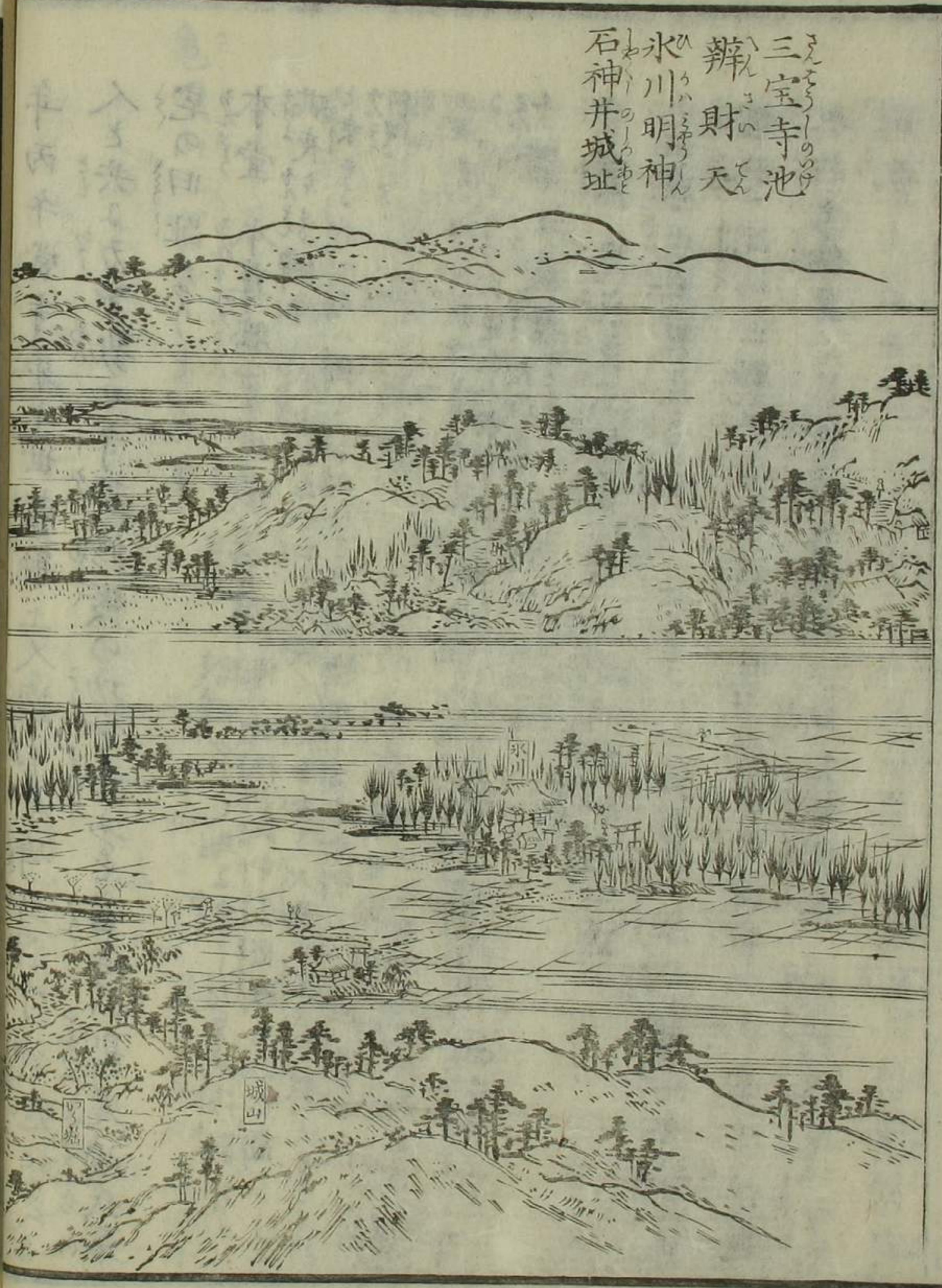
寺記云開山慶弐阿闍梨紀州高野山より入りより五穀と斷本
實と食ひ阿觀禪念をありけり年あり一夜大師夢に
告く曰く我昔諸國化度の時讚岐國ありし自像を作ると
其像ハ今同國多渡郡劔の山としる地の人家に存せり汝が本國
我山は遠し急ぎゆく彼像を得汝が舊里に安置し此山と摸くと
あふ恭詣なりけりき婦女子等の為に結縁せし然時を吾山よ
登る小等しけり云々遂ハ阿闍梨其地に至りて靈像を

感得一奮里一宇を宮く是を安置し當寺阿闍梨化
寂の後も志を繼其子重俊新荷土を催し工商をたげ
諸堂を營紀州高野山大師入定の地勢を摸擬して永く衆生
化縁の佛場となせしありしを世に東高野山又新之
とも唱へしを重俊の嗣平大夫重辰より重俊諸堂舎を修復を
引く法を定昌嗣名を信有より三室を信一九歳の時より利髮得度
住職正僧正に任を學業より勝もなり
當寺昔東光觀照等の子院ありてを諸堂舎輪煥より
覺を並べ實野山の傍をたせしもの年火災罹りて徑
營悉く鳥有とありり依元祿中再建ありしとも旧觀復さる
りありしを今其十と存するの
龜頂山三寶寺 密衆院と号を上石神井村ありし真言宗の道場
して頗大刹あり法印權大僧都幸尊應永元年甲戌此創建
たり往古ハ勅願の地あり故勅書數通と藏すて以慶長十一

年丙午當寺第十世賴融上人檀主尾崎出羽守資忠といへる
人と共よ力を勸めせ寺院修復の功を全くを當寺ハ則尾崎氏第
宅の旧趾なりといへる
本堂 本尊勝軍地藏菩薩 傳形にして馬を乘りたりなり
其夜本住持の夢中告て曰く我願く化を垂す六趣の衆生を救はんとすこれ
と乘る所の馬ハ猶く不止むと云ふ住持覺醒至る堂中拜せり其夜起る
彫刻あり古の馬上に安まり其の尊と相荷祠堂前左の所あり里光相續の
日光狐鳴り寺院を廻り三回其福をありし故は火消相荷と稱ますといへり
千體地藏堂 表門の左ハ幡宮 同右
寺寶 後奈良院勅書一通 正親町院勅宣一通
小田原北條家氏秀證文 當寺第七世尊海法印大僧正官勅許之
證狀 同八世賢珍法印權僧正官勅許之證狀 同當寺住職
勅許之倫旨 北條氏秀制札 同乙松制札 同岡入道江雪老
制札



石神井
川の
の
み



三寶寺池
辨財天
氷川明神
石神井城址

佛舍利 寺僧の往昔の記録を十一粒とあり又中古録云

愛宕権現宮 同所西南の林岡にあり三寶寺本尊の垂跡を其地

東西百五十歩南北百餘歩相傳太田道灌の城跡なりと土人の字

一城山と唱ふ前小川を懐き後遷井を負ふ北小阜あり

富士峰を望む南の方數百歩を過く直塘あり道灌塘と号く土人

云江城に至る此直路と云と云

氷川明神祠上下石神井二村及び田中關谷原等以上五箇村の鎮

守を例祭九月十九日なり江戸芝の神明宮より社人巫女等来

三寶寺池 同所あり回帶凡五百三十餘歩中一小嶼あり則

池靈辨財天の祠を建川此池水冬温夏冷あり洪水は溢るを

早懸の洞は湯汗として數十村の耕田を浸漑下流は板橋王

子の邊を廻り荒川は落會へ

照日塚 同所あり菅光相傳當寺岡山曾在京の頃八月十五夜雲上座外侍

此塚に傳へて感あり照日上人の墓ありと云

石神井城址三寶寺の池の傍にあり其地北小池水を帯びり大手と稱

此城は住と云

或人云豊島家譜に豊島三郎兵衛泰友の子三郎兵衛入道泰景

の跡を継ぐ武蔵國足立郡新倉豊島五郎と云

下は載たり如く文明九年四月十八日太田道灌の城を築き

石神井の地は豊島山道成寺といふ寺あり土人は是れ古城跡なりといふ

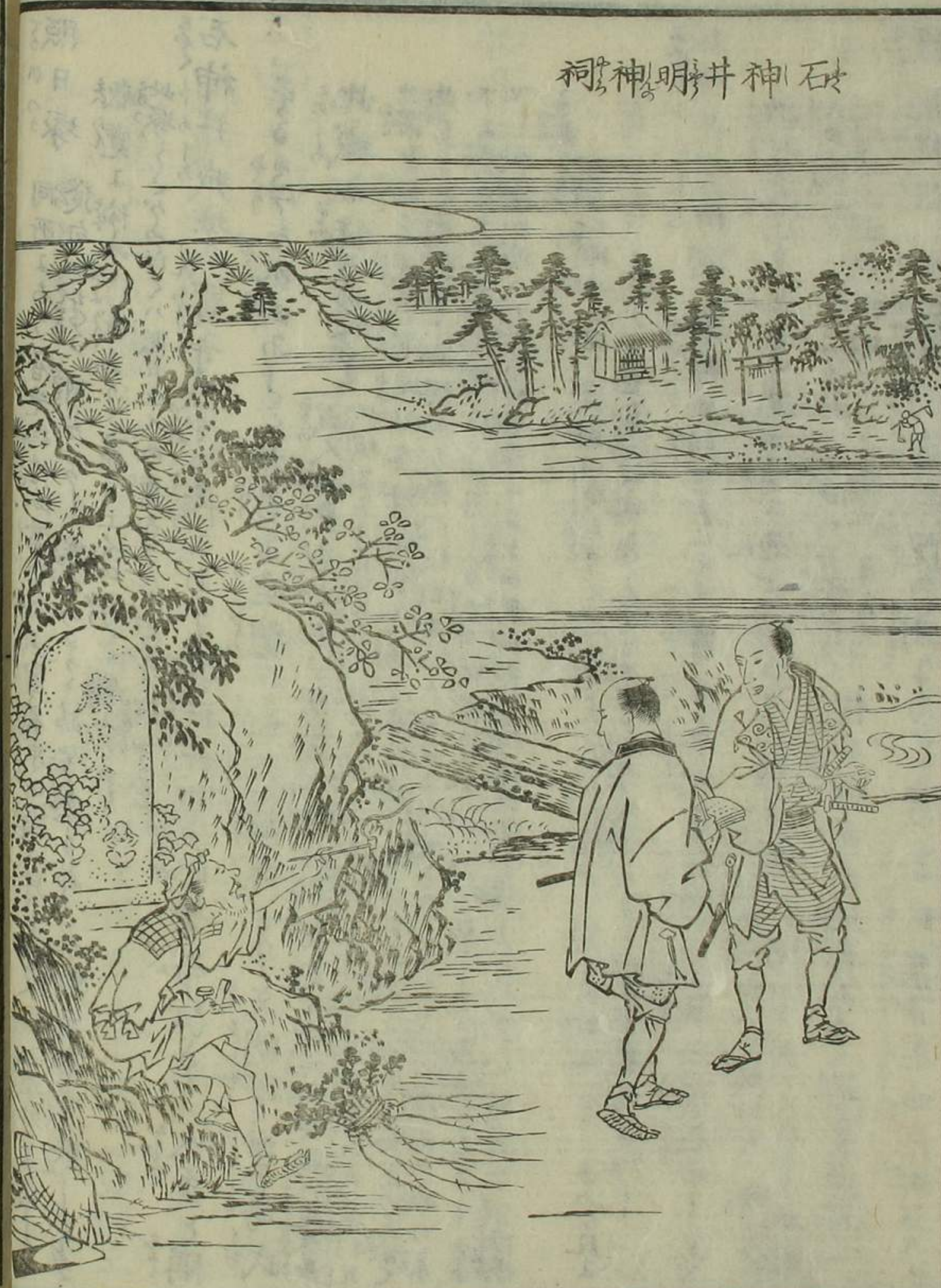
石神井明神祠 石神井村にあり三寶院奉祀を神體ハ一顆の靈石あり

往昔井を穿とく其土中は是を得たりと云

依石神井の地名あり起るなり

練馬城址 上練馬村愛染院の側にあり豊島氏某が居城の地なり

石神井神明祠



一とひひの先の石神井の城跡の跡下と合せて永祿の頃八小田原北条家の
 謀も御馬を領する由北条家の分限帳よき同書は鳴津源四郎と
 鎌倉大草紙曰文明九年正月十九日の夜頭定憲房定正三人小勢
 めつちを叶あしと上杉方申合上野へ打越大勢を催し景春を退治
 せべしと太田道真を殿ゆく利根川を渡り那波の莊へ引退景春
 一味の族ゆち武州豊島郡住人豊島勘解由左衛門尉同弟平左衛門
 尉石神井の城練馬の城を取立江戸河越の通路を取切云々又同書
 曰文明九年四月十三日道灌江戸より打て出豊島平右衛門尉が平
 塚の城を取巻城外を放火して歸る所は豊島が兄の勘解由
 左衛門を頼る間石神井の城練馬の両城より出攻来られ太田
 道灌上杉利部少輔千葉自胤以下江古田原沼袋と云所は馳向ひ
 合戦し敵ハ豊島平左衛門尉を初とて板橋赤塚以下百五十人
 討死を同十四日石神井の城へ押寄せられ降参し同月十八日小

罷出對面まひだりあひめん 要害破却あやうのてきまつ 志こころき由申よしまうしあぐり又敵對たてあひの様子ようすよんえ

立野舊跡

今指所いまさしどころ一かゞとととも新座郡あらんに属ぞく引又村ひきまたむらの南に

隣となりに館村たねむらと称なづする地あり是れ其舊跡そのきうせきなりん

自ら古名このなをうりあの中古あちこに至りては又別またわかり

多知たかとも多天たてんと稱なづす字あざとも今館村いまたねむらと更またなり

川白子かわしろこの邊あたりに追おの地ちまへ古の牧野まきのの旧跡きうせきありと云依より考かんがゆる小

其地水濱そのちすゐひんゆり地勢ちせ尤馬ゆまを牧かよ便たより

似にたり同名の地足立賀美又大江戸おほやえどの方かた地ちは練馬ねりま竹馬たけうま澤内さわうち牧

馬うま引ひ馬ま多た今馬いまうま多たを馬うま引ひ澤さわ駒こま林はやし野の牧まき今野いまの馬うま等らの地名ちがひ多おほきも

牧野まきのは因よる澄あやかり

拾芥抄しゅうがいしょう曰い年中行事部なちゆうぎんじぶ 八月二十日はつげふにじふにち牽武蔵けんぶさう小野おの御馬ごま中略ちゆうりやく二十五日にじふごにち牽武蔵けんぶさう

立野馬たちのうま 同書曰どうしょい牧名まきのな 石川いしかわ 田比たひ 立野たち 小野おの 秩父ちちぶ 已上武蔵いじやうぶさう云

公事根元こうじねんげん曰い八月はつげふ廿日にじふにち武蔵國ぶさうのくに小野おの御馬ごま四十足しじゅうしやくをひく其外そのほか秩父ちちぶの御馬ごま

後撰集こうせんしゅう 兼捕かねとら朝あさ臣みこ左近さこん少将しょうしょうは

新勅撰しんしつせん 日ひををててハハ雄お風かぜをを一いっ指さ馬まののたたらら野のののととああららせせりり

續千載じゆせんざい 在あるるののたたらら野のののととああららせせりり

夫本つまもと 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

同どう 旅り人ののたたらら野のののととああららせせりり

同どう 柵さく馬うまのの原はらのの種たねををももちちかかききををゆゆわわしし給たまふ

伊平家奇合いへいけあきあひ 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

古今六帖ここんりくはつ 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

貫之つらゆき 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

有重ありしげ 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

公朝こうてう 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

太政大臣たいていだいじん 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

新院しんゐん 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

冷泉れいせん 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

信實しんじつ 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

藤原ふじわら 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

入道にゅうだう 今いまののたたらら野のののととああららせせりり

膝折里 新座郡に屬し江戸より河越へ至るは街道中々白子下を
行程一里驛站あり所澤ありを良に當り其間三里あり
北条家の分限帳に六郷慶所領と
ある中川越内藤折世貫文とあり
田國雜記 例の御池を築くは乃ちなり
商へてつてそん孫の市は御多を海をあり
此和奇の脚氣と詠せられ一家筋或は家屋は作を正字とせ此地の農家
古来より飯器を収めるの具なりと云禮記の語に筍ハ食を盛の器なりと云
協し今ハ茶碗を入る具とを道與准后の詠ハ膝折といへをとてあると云
家筋を脚氣よりあされう秀句あり

宗岡宿 引又の宿より北の方内川とつて隔て向あり
引又の新座 此地ハ古の奥州街道中々其項相州鎌倉への通路あり
郡に入り 今の中仙道上尾浦和等の地より入て宗岡引又及び野火留の南を
折る清戸の邊より多摩郡の府中へかゝり今の大山通道といふを
徑て鎌倉へハ終つとあり 此地ハ用水あり引又の宿の中を流れて内川の橋
樋を通る宝永の頃秋元侯川越を領せられ項農耕の助とて野火留の用水を
そ引つてつとあり其項白井某ある人此樋の懸板を工夫なう四十八段あり

たりといふ此故は土人字とて
りろは樋を稱せり
田國雜記 此の岡といふ所を通るをへり
夕煙わくそふをせり系系くのむの宿 道與 准后
内川 水源ハ多摩郡秩父郡善の山谷より發する所中々入間郡に
入る川越の北を東流し引又と宗岡の西を梁瀬川の水と合して
内間木の南を流る荒川は會するものをまへ内川と稱せり
荒川ハ入間郡の北の際を流れ此の川宗岡引又の間に至るを
川ハ其南を流るゆゑ内川の号あり 此川宗岡引又の間に至るを
引又と十五間ありあり引又の方ハ船路運送の地中々
江戸迄凡九里計あり

十五院 南城山八幡寺と号し宗岡より十八町程を隔て西北の
方下南畑村あり本山派の修験中々本尊不動明王立像一尺
七寸脇士二童子一尺寸ありて共智證大師の作ありと云り
此地ハ難
心住り一曰武成院あり同郡水子村あり後清戸芝山の地に移り又難成田
陣正戦死すの後此條家より此地を賜りてとて此陣正が墓あり

七寸脇士二童子一尺寸ありて共智證大師の作ありと云り
此地ハ難
心住り一曰武成院あり同郡水子村あり後清戸芝山の地に移り又難成田
陣正戦死すの後此條家より此地を賜りてとて此陣正が墓あり

宗岡里内川

伊予波通音
此地の領主
又より
岡の地へ
通へ農耕の
助とせし
頃平八段
掛りけ
ありけ
と

田國雜記

むの岡と
通りまへ
つひ夕の

煙をそと

夕煙あつ

そと

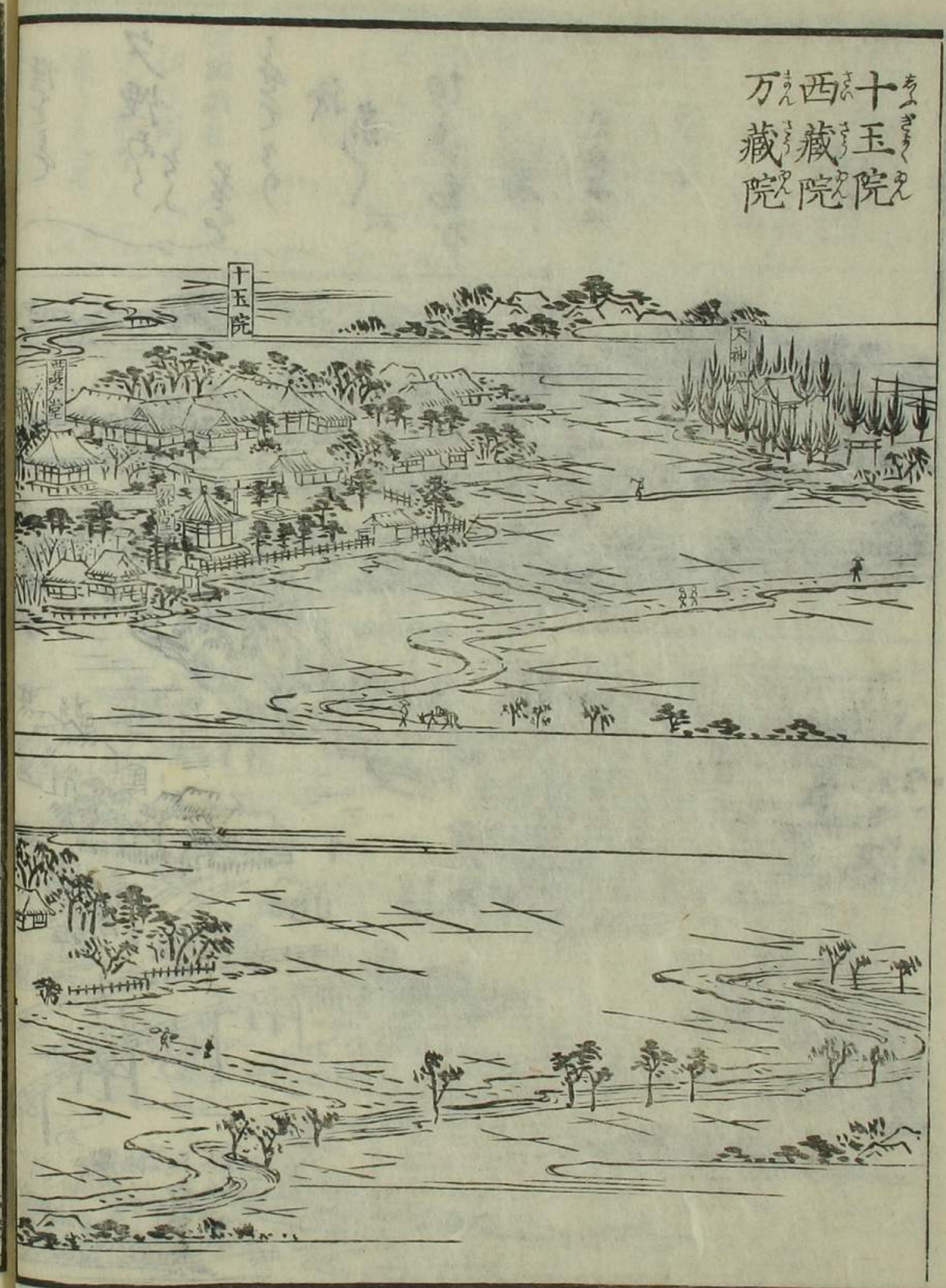
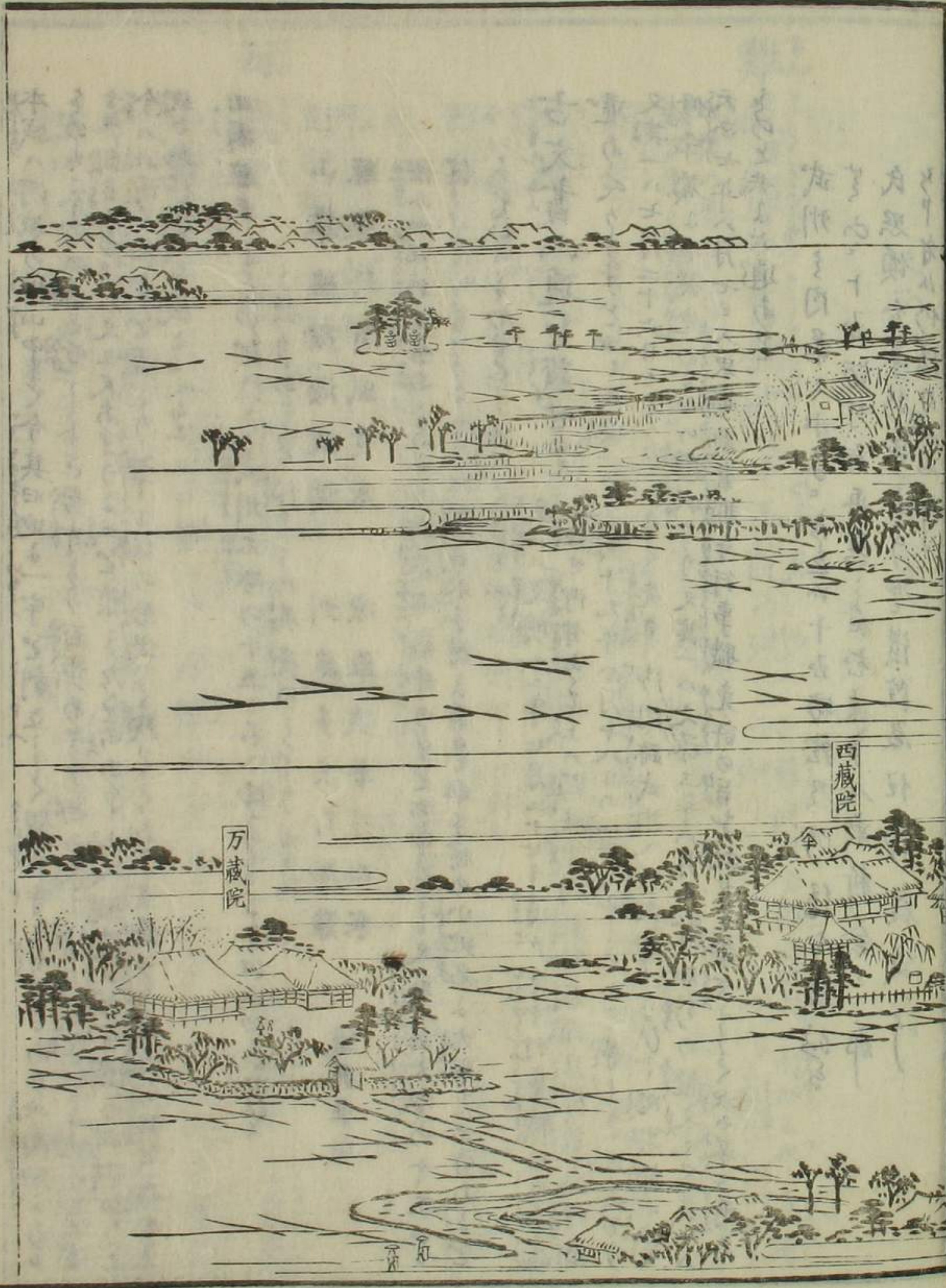
後家

むの岡の

岩

道真准石





万藏院
西藏院
十五院

本城ハ河越の山の中今其地一宇と創立し觀音寺と号すあり此南相ある
 今ハ此所稻倉を置り此下ハ堀の形残りあり其餘ハ空地の形と存せり

回國雜記 武州大塚の十五、六へ向ふに江山のくまひ

山攀峻險海波瀾 到處多其行路難
 疎屋終宵風雪底 凍難嘆夢月西寒 道興准后

按此紀紀ハ佐西とあり高麗郡藤井の郷と云ふ也又或人云大塚の十五、六
 故ハ此地の字と城と云へ

古文書六通を蔵せり 其ハ文明十二年七月二十七日清戸年行事職の事申請
 違ハ一ハ七月二十六日と云々又其ハ文明十九年正月十八日の證文中云上ノ等ノ義あり
 又其ハ一ハ七月二十六日と云々又其ハ文明十九年正月十八日の證文中云上ノ等ノ義あり
 又其ハ一ハ七月二十六日と云々又其ハ文明十九年正月十八日の證文中云上ノ等ノ義あり

武州ノ内希く水子におまひ十五坊能及以絶今叙改る
 氏照領分年行事職を撰選院及任涉改文

天正七年庚辰二月三日 氏照判

十五坊

難波田彈正舊館地 十五院の地を云 難波田今南波田或ハ南相と作此地
 小田原記等也

朝興の家人ハ同國松山の城を守りて天文十五年四月廿日

河越の夜軍ハ燈明寺口あり古井へ墮入る横死せり 燈明寺は作れ

東明寺と号す其地跡なり燈と東とを考ふる 彈正忠の墳墓と稱

其の年歴大違へりといへハ 墓碑ハ日蓮大居士とありて天正

西蔵院 同所十五院より四町半西にあり本山派の修験中東廓

山觀音寺と号す觀音ハ座像身長五寸八分弘法大師の彫造

中ノ古大師此地に至る頃靈夢に依りて造らんと云

應永年間古谷七郷の領主中筑後守

資信といふ人 資信何人か知りしは 按東鑑建久六年乙卯三月十日未

雑掌の中は 那珂中左衛門尉又同建長二年庚戌三月一日剛院造菅原

當寺住僧を縁とありし其嫡男資親當寺に入らせ世を忍び

入道一々行阿と号を資親中氏の祭祀絶んを悲し其子

某を修験の僧と託し号を如道と云則當寺に任せし此時より

當寺に修験の法流となしと云 其先ハ真言の ありし一々逆乃

後天正以來四海承平の時に至り 御當家より 觀音面田の地を

賜りし御祈禱を命せしと云 寺僧云資信法号哉

無寂大禪門と号を應永六年癸卯卒也 此地より二里を

云地小善神寺と号を禪林と云其寺境ハ中筑後守が居城の地なりし也

文字ハ磨滅し讀得べし又同く傍ハ其家臣の碑と稱するも下の

百八燈供養古碑 高サ三尺七寸なり 中一尺一寸餘の青石ハ一々碑面

一結衆等教自文安二年乙丑十月とあり 寺僧ハ資信菩提のくめハ其氏族の

阿蘇明神祠 西藏院より西南の方三丁計あり 同所本山派修験

萬藏院奉祀の宮あり 萬藏院ハ中筑後守の後裔 當社ハ中筑後守此

産土神なりと云傳ハ當社梁牌の文ハ曰

奉造 永正元甲子年 別當本山修験萬藏院

七月大吉祥日 同牌後面

天下太平國土安全氏子繁 此下文字讀

野火留河越街道の立場中へ膝折驛より一里あり西の方小

伊勢物語 昔男ありしはむすめを盗りてむすめを奪へり

いと物は盗人ありしはむすめを奪へり 盗人の守りかたきりむすめを

あまのこを火に焼くはむすめを奪へり 盗人の守りかたきりむすめを

妻を奪はるるを奪へり 盗人の守りかたきりむすめを

田國雜記 此ありし小寺ありしは 塚と云塚ありしハハカを奪へり

塚せしハハカを奪へり 盗人の守りかたきりむすめを



平林寺
大門

より此塚とのひとと名つけし... 道の
堆石

按て昔ハ火田といひく原野ハ火を放ち草を焼く肥し種を下まを焼く
とものひりあり今秩父郡中野ハ信州ノ焼野蕎麥といふ所のありハ則是
なりと云ふ其火の盛あらず至りてハ人家ハ野火の恐あはバ堤又ハ塚
林寺境内ハ九十九塚業平塚など稱するものあり同ハなひなる登
カノ号を唱えし伊勢物後小因りて後人のまうけりしやあらん

金鳳山平林禪寺 養心院と号野火留街道あり八町程東あり花浴
如心寺派の禪林なり古ハ大徳寺云 開山ハ石室善玖大和尚
の法嗣康應元年己巳中興ハ雪堂大和尚と号せ 元和九年
九月二十五日ハ歿す云 足立郡岩附ありしを寛文三年 石院和尚
此地ハ岩附ありし今金重村及び 寮舎四字あり 此地ハ移
佛殿 本尊釋迦如来 此佛殿ハ岩附あり 當
山門 佛殿の前あり 樓上ハ十六阿羅漢の木像を置き
此山門ハ岩觀ありしを平依よ建し建ると云



平林寺



同額
石川文
筆あり

金鳳坐

惣門額
同筆

凌雲閣

客殿額
同筆

弓林禪寺

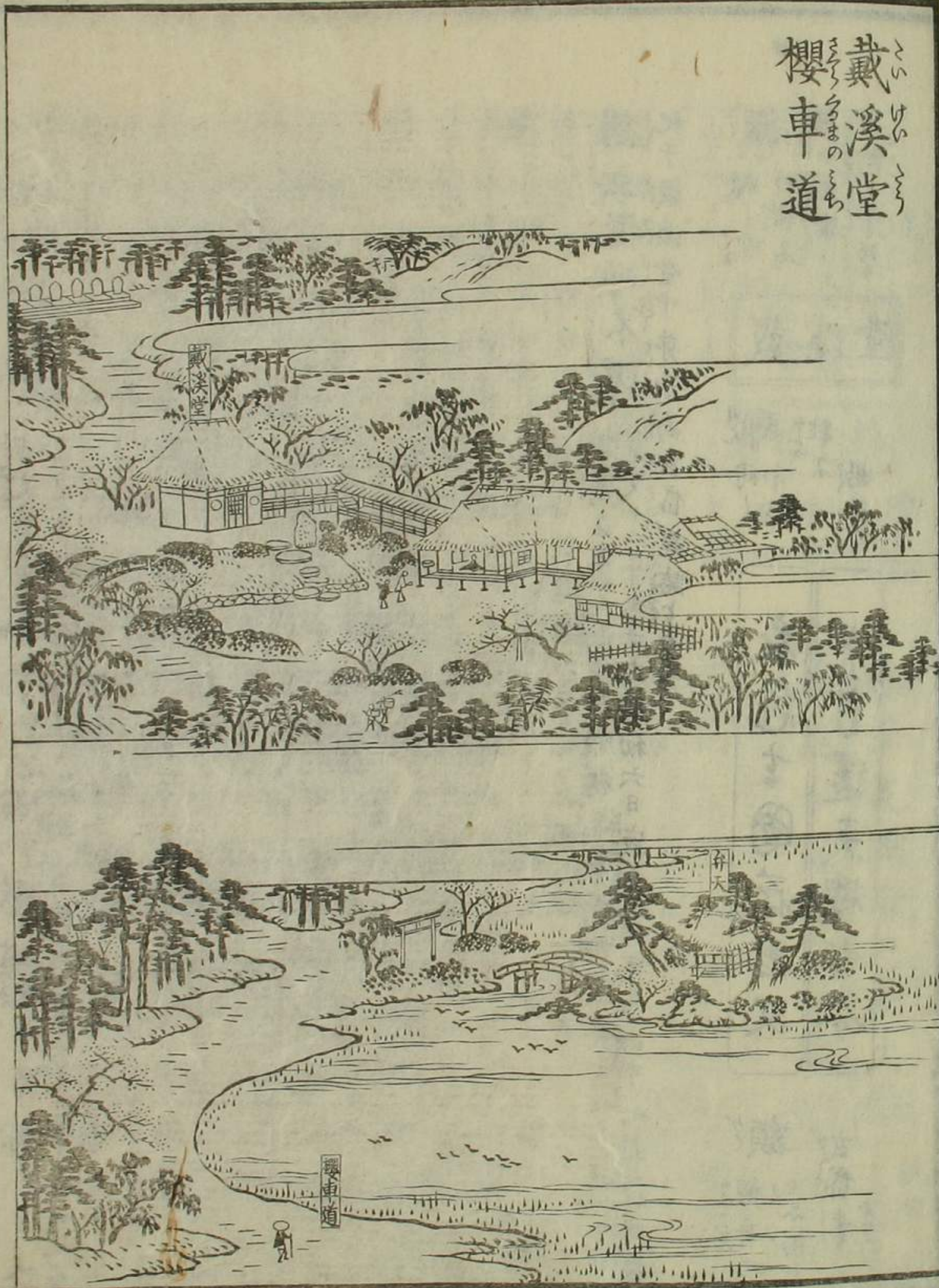
鐘樓
額
佛殿の
前あり

松平豆州侯筆

鐘銘

大寺吉日千本國武州崎西郡岩山莊金鳳山平林禪
 寺良之徒無催崎華之族吾山檀越參州播頭郡
 菴壽與同雄嶽宗英氏士有大河內法林宗無為祥
 鐘以寄鳳山其功德幾萬山其心感命治鐘慶
 猶根數家門之榮者幾眠年矣祝也積岳餘慶
 耳晴清淨鮮外八提寺眠吼則轟地擊兒孫億
 天年光樓閱外明月寺前檀越不孤德兒孫億
 兆于時元和九年癸亥九月十日雲峰宗怡誌
 寺者同州在岩築城之西寬文初山比日雲峰宗怡誌
 載寺記予延寶甲寅之夏來司院於丙辰且堂
 外微火鐘樓尋燿之聲隨扣其響者有曆尺寸
 暮病諸天和壬戌之冬遂命治工再鑄有圍尺寸
 全該舊制及其銘願不永易亮寺門中興之基業祝
 切乘祖越初度之願輪永保寺門中興之基業祝

戴溪堂
櫻車道



當寺開山石室和尚住山之頃鑄治其鐘今下德國大室村發光山大室寺
 江那藤原中務丞政行慶雲禪寺北丘至光小谷野三郎左衛門尉季卿奉行
 左近將監朝貫飛屋山城守修理の逆井尾張守以弥常宗とあり吉一關東
 兵衛市場あるの傍てあり當寺の住持退隱の地なり岡の上は禪堂
 養心庵あり内は観音の像とあり堂の弘安四年辛巳と彫りあり

云劫石有消日洪者無盡時遠也大也
 武州新座郡野火留莊金鳳山比丘默禪寺
 吾鳳山嘗有梵鐘一口其型小而且有釁隙樓未
 復之觀茲有知庫全德微志深檀興有釁隙樓未
 歲與樓同提疏普募有緣體存雲加護貴不巳客
 華章而不同再圓成山銘詞者獨祝遠大峰默雲兩祖
 之梵音大器頻圓成山銘詞者獨祝遠大峰默雲兩祖
 響徹向明功龍次遍野新柱樓臺備法城生雲兩祖
 維時寬延三年龍冶工武西江村和泉守藤原政時
 維時寬延三年龍冶工武西江村和泉守藤原政時

石の古九十九塚 坊より五十歩を隔てて後の山中あり高き古墳あり

後世好事の伊勢物語ありて古墳を述べて秋一を

此道路の両邊に櫻を栽たりて今老樹とありて此の地は

ありて本尊の寶龕及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

置せり禪師の肖像及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

ありて本尊の寶龕及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

置せり禪師の肖像及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

ありて本尊の寶龕及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

置せり禪師の肖像及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

ありて本尊の寶龕及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

置せり禪師の肖像及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

ありて本尊の寶龕及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

置せり禪師の肖像及び龍形を撰りて白紙觀音及び禪師の肖像等を安

戴溪堂

聯の 掛の 掲の

衣冠古國存君父 日月還天耀古今

額 觀音の 上掲の

元三古先生

裏の 戴溪堂中 觀音大士扁額 享保元年丙申 七月穀旦 高玄公置

梅も昇主

同右 普照 國師

五夜禪燈三昧火 萬季藤几乙枝香

觀音の前 の左右に掲 たり天間也 衲自題と

本牌一枚

門立易禪師碑銘并序 因州刺史越智直郷君章父

濂乃襲題頭未朝喜穎率六匱其師門獨 煩往人到坐能竟耽悟二産父先明人立 襟長語下溪為棄文讀月而銓出之高玄 癸水率筆月詩帖八書十乳部晉戴笠荷謹 巳語齊沛留一啤股過九七敬戴安道鈕撰 早溪五然我日放率目日幼未有善世人曼 春巷十澡宿友遊二輒幼觀雙行家公先 發暇明思祇社鹵旬誦名産善世行山陰會 行匱以傑此通湖有幼學亂男母陳氏姚江 三收清出二師依五學舉因師即其大士一 月有代清句賦頌山會城災蚤同實辰也天 抵粵一新自皆應聲趣又當魏序然資 崎人天自皆應聲趣又當魏序然資 時其虜然洗異嗣日我比三豎亂不 兼招塵不盡槽後凡來十有 應同不盡槽後凡來十有 二得勝慘拍不憤 幸海慘拍不憤也

憤矣事未師崇初以捆峰聯分重刹善師三臘抱集山更善十殊容
之稍之光書也七覆載禪芳支建昏之無月月素若侍師庵一七貌
言有輩安賜左日益以師軒折也山以妄朔遙懷于從呵托月十如
慷志悉得者奉也聖至其鹵泓墾日為像日奉負卷慧々未初七生
慨氣聯延旌師扁以卜老北委關金可之賜聘恩唯明而後六夏玉
不之翩至其像曰瑾吉師之給曠鳳圖區殿書極哉護笑事日臘柱
容存而於三以戴壁架默隅庖塾寺也願見夙矣吾送和曰也一
刊必去此季奠溪匪梁雲有涵樹日距言命夜積師靈尚即示十
者效抵而坐之堂日翼和隙元之平都數入戒愧棄骨便今寂九尺
凶其今自關扁中而然尚地早松林鹵掾翰途怛世窆起甚前季餘
慮觀吾明也題位告僚合即不杉前吾之林越怵業於終廢一實衆
數已止於噫梅供竣東議可竭導伊十構顧庚莫已黃為時日寬皆
十伏一世時花範時僅可就人水豆里獨謂寅可四槃下候請文驚
扁念子乎不關金正三之而各玉守外有身二與十山火谷千十異
今吾遺回俱主大德楹乃起便川源武源已月計七有闢日呆二悲
略師耳意霑乃士丙間充之控君州為充直詎季天維日和季悼
表一牽舊上普導申方工住其之信地政選抵謂於外於午尚士不
而生又勤恩照師三之護持子紆綱有聞其武已茲老聖打於子已
出忠老共之國歸月菲木雲院迴之鉅而奈城丑空人壽三廣春

他筆非時後特然尚猶如嘗礙時假司才戊流夢落立國甲七軒長
凍書病健省就而開如書謂其寬還源之戊亞之々號師命月懷崎
折曰何啖觀山往山鍾法濟緣文崎正德九明同山天座有普戴奉
梅鑿事猶國中不豐王正人術三庚重之月曆塵袍下下絕照子行
花々藥壯師起憚之墨鋒及同季子欲笑侍乙也躡一蘿何國曼橘
影塵為季途靜餘廣蹟通物道癸入師出國未並躡間添矢師公正
接々倒至此疾為出東亦神薩治三幻錫時東月儒稟師季脫聘笈請
却傷卧稍作憇力師絕氣本不月寄事革朝從釋殊謂臘白東向留
江海匡牀減而息備邀品含行視八山阻之武侍博可棄月用渡日馳
南邨吟衆回之至駕也芒應方日三不右城普決啣儒八畢大東書
白不吟衆回之至駕也芒應方日三不右城普決啣儒八畢大東書
玉忘哦勸遣所豐虛乙獲機活也載果執宰門典而歸日殘振不上
魂殘自服侍自丰已其施潑嗣出萬政官掌籍無釋也酬諱狀威之師
罷繞忽不祖曰師以雪紙袒藥居止二君者記者計同曰求師歌便
溢空朝聽命白老待峰隻老園不幾季信莫萬云者一性出嘆次住
鬲軒起曰代雲而師即字活國擇罹己綱不治慧青性易家季季有
而啞坐報書室精輒非珍路稱地灾亥暨嘆元地天風字乃眾甲漢
逝任索身平厥勤翩和襲至神無發病有師牽之白光獨歸六午澹

陳平為用慕否於如踏遭之哉挾藩地身與突天被於極之統之
身跡所為芒之耶聲師海時言只勢大中與高忽若乎上乎亂昭其
非因親固吾誠信詩所終亂非此子創起世皇有是重土冕御下之成足高
漢作矣謂師方可者後功方不己字父舉歎背弟義亂相王姚濛氏體盛乎
誓曰其安事仰而世能事其安私繁萬凶無斯親合廣豈也衣德中今帝
不生事然勤之朝凡之不介其乃世兄端逆作日力者以大沈乎皇有
還照之或鉅讀士少卓地天橫而逆而天孫理推以元獸變日月夜成尊
處者弗克之山能無為其歷屈論矣確乎以無窮行光天僧世世高化
惟忍將奚不德一莫能情古其後呼哉侃天挾奉燕照也敢也
義備嘗險難朱穿文之力自雄慨原及也播磨以也々々下長燕照也敢也
文乃勉而雅以也播磨以也々々下長燕照也敢也

多士弄矢河山清宵撫躡踐重關豈道佛性
顛預其顏醉爾遺範後人追攀天開武藏沃墊
遙環金鳳攸止碧水潺湲
享保三季戊戌四月穀旦
弟子高松李江直芙蓉拜建

當寺の境内と周流する所の水ハ兼應元年野火留新田壑關の
時伊豆守松平信綱朝臣二里餘り南の方小川村の地より
多磨川の氷を分るる引しむるとわつと
野火留用水を宗周より引
多磨川の氷を分るる引しむるとわつと
野火留用水を宗周より引
安松山長源禪寺同一西の方安松材あり洞家の禪林あり八王
子の乾晨寺に属せし開山ハ傑用禪師徳英大和尚と号す
元龜三年
壬申七月 開基を英岩道春居士と称せり
當寺元禄年間製する所の鐘の
精舎中々大石道春公の尊創ありとあり然れども大石氏
本尊釋迦如来を
没卒の年月忌日と詳せしむる者洋當寺に北条氏照の靈牌あり
座像七八寸計の本佛なりと作者詳當寺に北条氏照の靈牌あり

古色ありて文字もさうさう

飽間齊藤氏戦死墓碑

野口村の中西宿徳藏寺と号する禅院の

後園

清家の禪宗より江戶赤坂の種徳寺に属せり相傳へて永祿

中不建あり六七年教に當り三丁をりを隔て狭山の嶺に山の中

門中興せり今徳藏寺の寺境に草庵ありて方充和尚といへる

高サ五尺計
碑面三尺五寸餘
幅一尺五寸計

飽間齊藤三郎藤原盛貞生年並勸進院佛
於武州府中五月十五日討死
元弘三癸酉五月十五日致
同孫七家行廿三回死飽間孫三郎
窓長廿五於相州村岡十八日討死 執筆扁阿弥陀佛

飽間氏の墓碑ハ實ニ五百年の蘚苔を帶るといへども三士の雄名を
今埋むるに千載不朽なり 執筆扁阿弥陀佛が書ハ暗ニ元人の
骨法あるを以て普く風流好古の徒此地に至り称揚を依るとの

少

按元弘三年ハ光嚴帝の元慶二年癸酉なり此年後醍醐天皇隱岐國を遷して
歸治し御座りて後ハ三慶の年号を用ひらるる元弘三年とて此年新田
義貞朝臣相模入道と七人と同年五月十五日武州府中の分倍河原へ押寄入道
舎弟四郎左近大夫入道慧性と合戦を義貞打負り終に堀兼をとりて引退く由太
平記に記さるる太平記ハ此地の岩を記せしむる也
此碑はありて討死せし此碑はありて明也

將軍塚 徳藏寺より四五町を隔て北の方狭山の嶺東の嶺の終る所

あり塚上は老松一株雜樹は交りて繁茂せり此地ハ余村及び余川

口村に属す元弘三年癸酉五月新田左中將義貞朝臣上州の笠掛野を

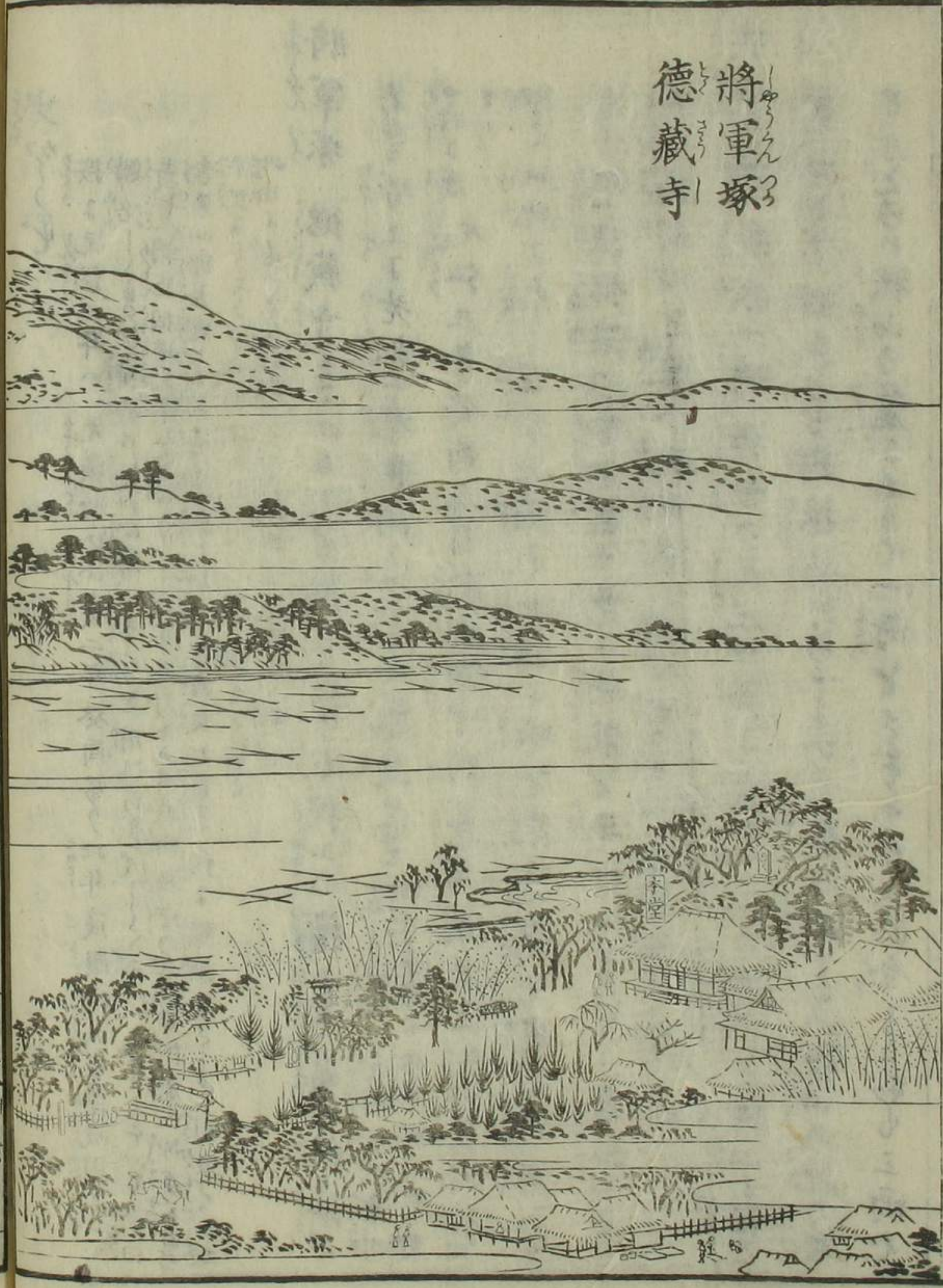
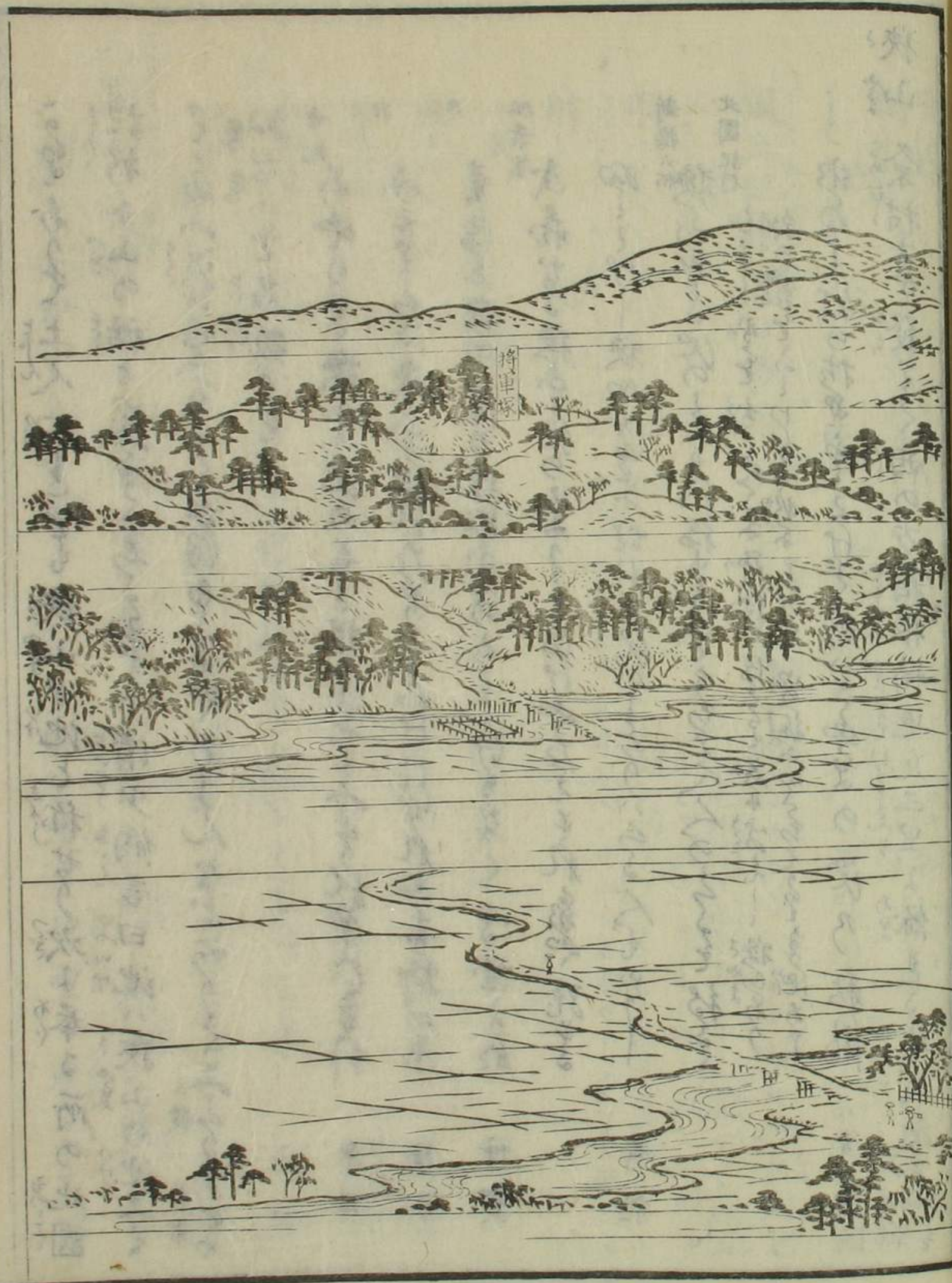
此此地は屯し百歩を隔て東西に塚を築き旗を建て其備へを

なり越後信濃の勢を集め竟に朝敵を平げたるひ一奮跡たるを

土人其武功を慕ひ將軍塚と唱ふ西の塚上は義貞朝臣の靈を祀りたる

狭山の池 箱根ヶ崎驛舎の西北の脊に存する水の池水を狭山が池の

奮跡とす然れども箱根津ふるもの箱の池との狭山の池と稱
するものハ狭山の麓ありて一所をさそふあり今も二所を



將軍塚
徳藏寺

この山ありて土人何をも狭山が池と称せり次は奉る所の北國
記乃小山の裾といふやうなる一清少納言曰池ハ狭山の池みく
里といふ所のをさうく地味もあやあらんなどありきみりあやめ
尊菜 ぬなはを名物とす

奇祝 あやめを狭山池の長き根を是もみり此れわいを引 兼昌

日 みらるる狭山池はたより中かひひれぬま柳の糸 隆祐

日 まゆを狭山池の裾ぬかひのさうくもなく雪煙の如 仲實

松葉集 武蔵なる狭山池のみさうそひけやたえそれ影や籠る

新撰六帖 ぬまけ一狭山池を埋れて池のさうりはるる人もなり 秀能

北國記行 狭山池のさうり此れゆるりもさうあへ人のさうりもゆるり

氷のさうりけの狭山池をさうりけりはるるの池乃秋風 亮惠

狭山 久米村より發せり西の方箱根崎近九三里は餘り連岡と云

同東の 土人一名を尾引山と稱せり嶺の徑路ハ多麻入間の郡境小

嶺あり 一と南より北より麓より登る所二百歩あまり河原或人云武蔵國

風土記殘篇は多磨郡北の向の岡を限るとあるに於て此長岡を

以て向の岡として可なりんとす 土人尾引山の北はありて綿々なる群山

群山のさうりも狭くして堅ま長きとの數條あり此故に山はさうりけるが狭山といふ

号たりあるしある時ハ土人の云へるや此地なての山を合せなつて狭山と

稱し一所は限るなふはあや

十載 八月園狭山を登るとは狭山池の絶る所をさうりてをみる 顯季

續古今 秋風なるひく狭山のさうりやうやうやうみり 後鳥羽院

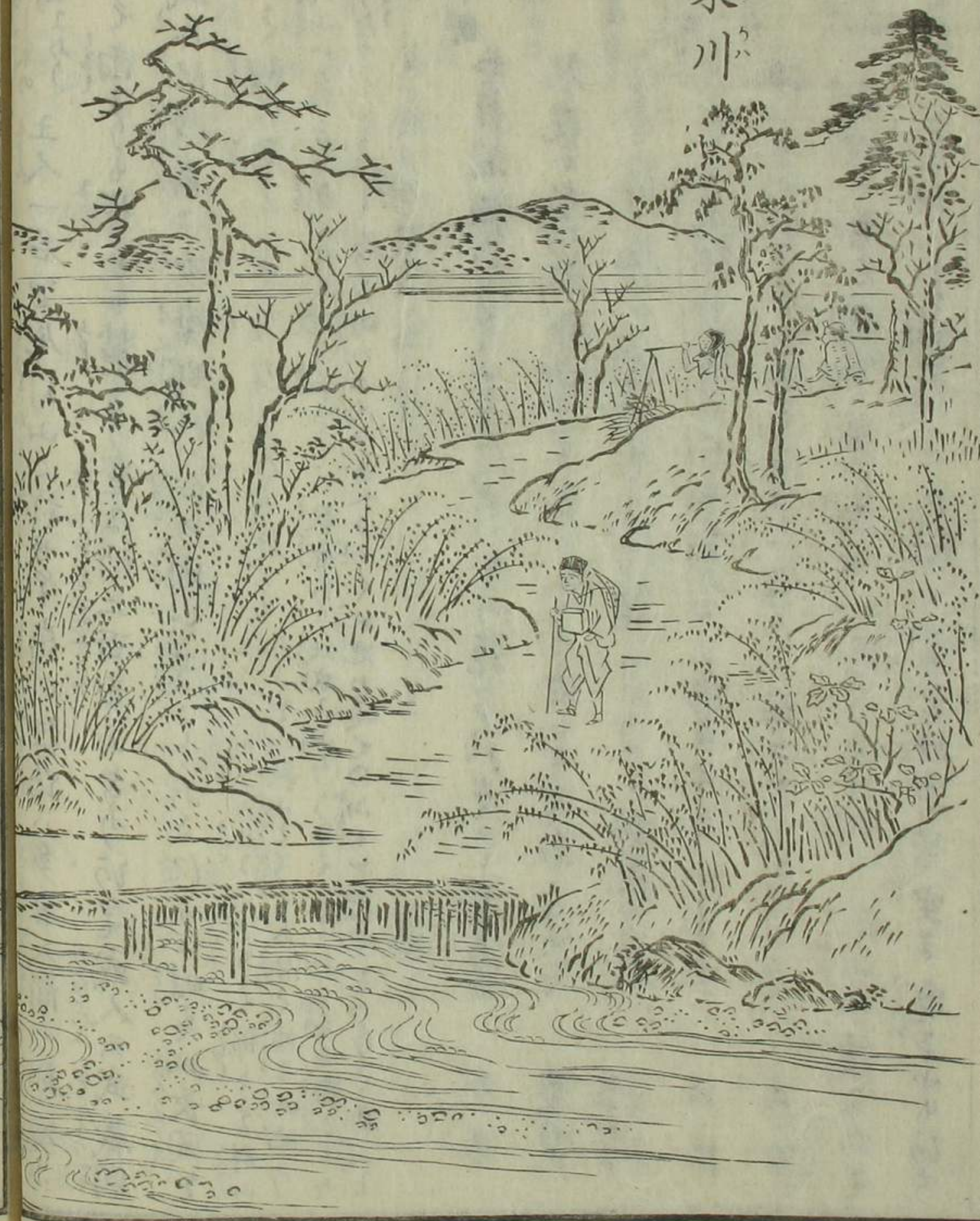
新撰拾遺 秋風なるひく狭山池のさうり眼よとの秋風をさう 前中納言 匡房

大木 秋風なるひく狭山池のさうり眼よとの秋風をさう 家隆

八國山 桑村は屬屯將軍塚の西十八丁をさうり同狭山の續はあり

て以て秀出する所を号くされがう雲を凌ぎ碧空に連るやあり

久米川



回國雜記

久米川と云所
をへり里の勢く
み八井 かのしも
まへて たつ川
と名く 船文のら
ひまるとあんまう
しん丸ハ

里へのさめ

ゆへこれよ

ありなハ

こゆり

こそせあハ

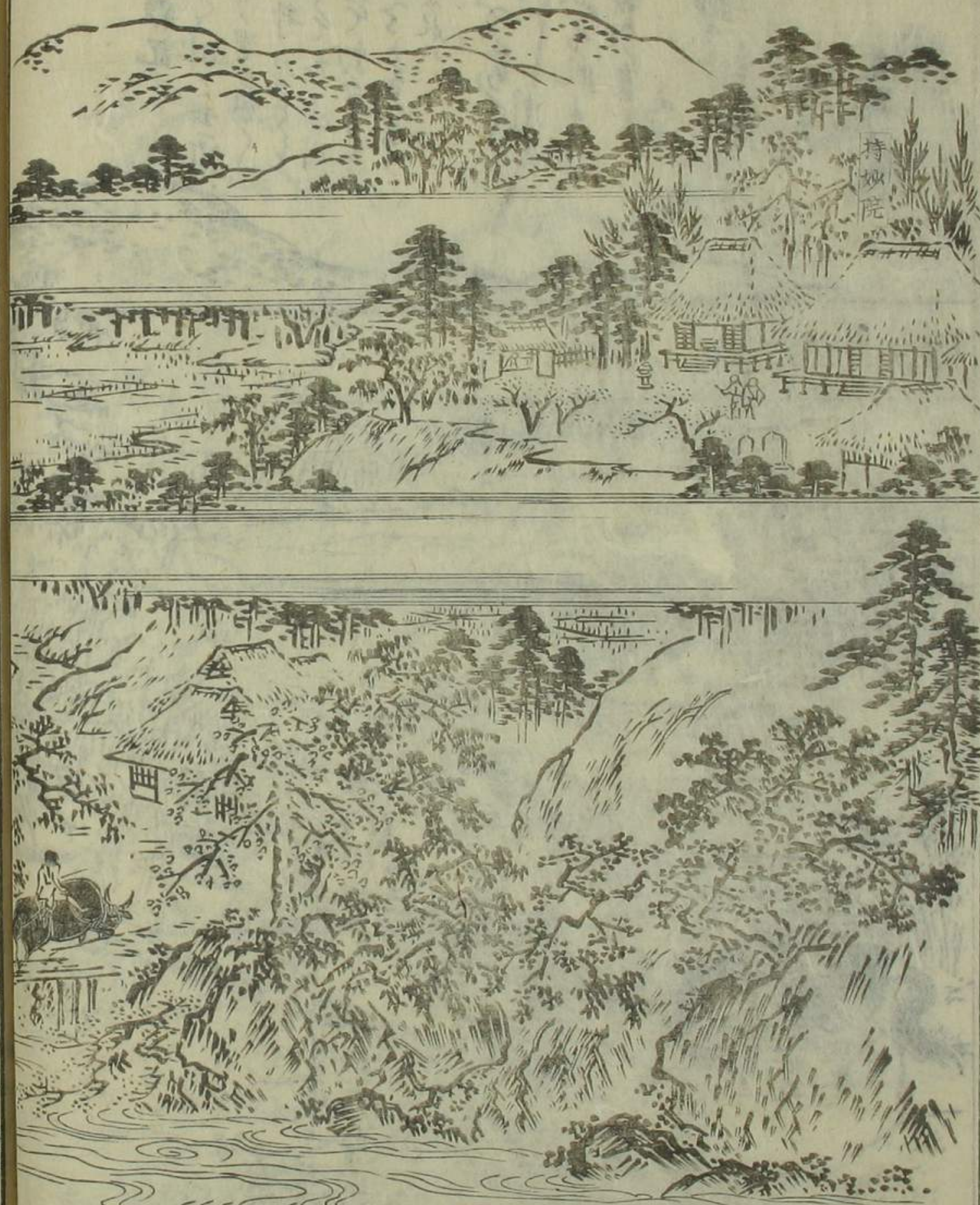
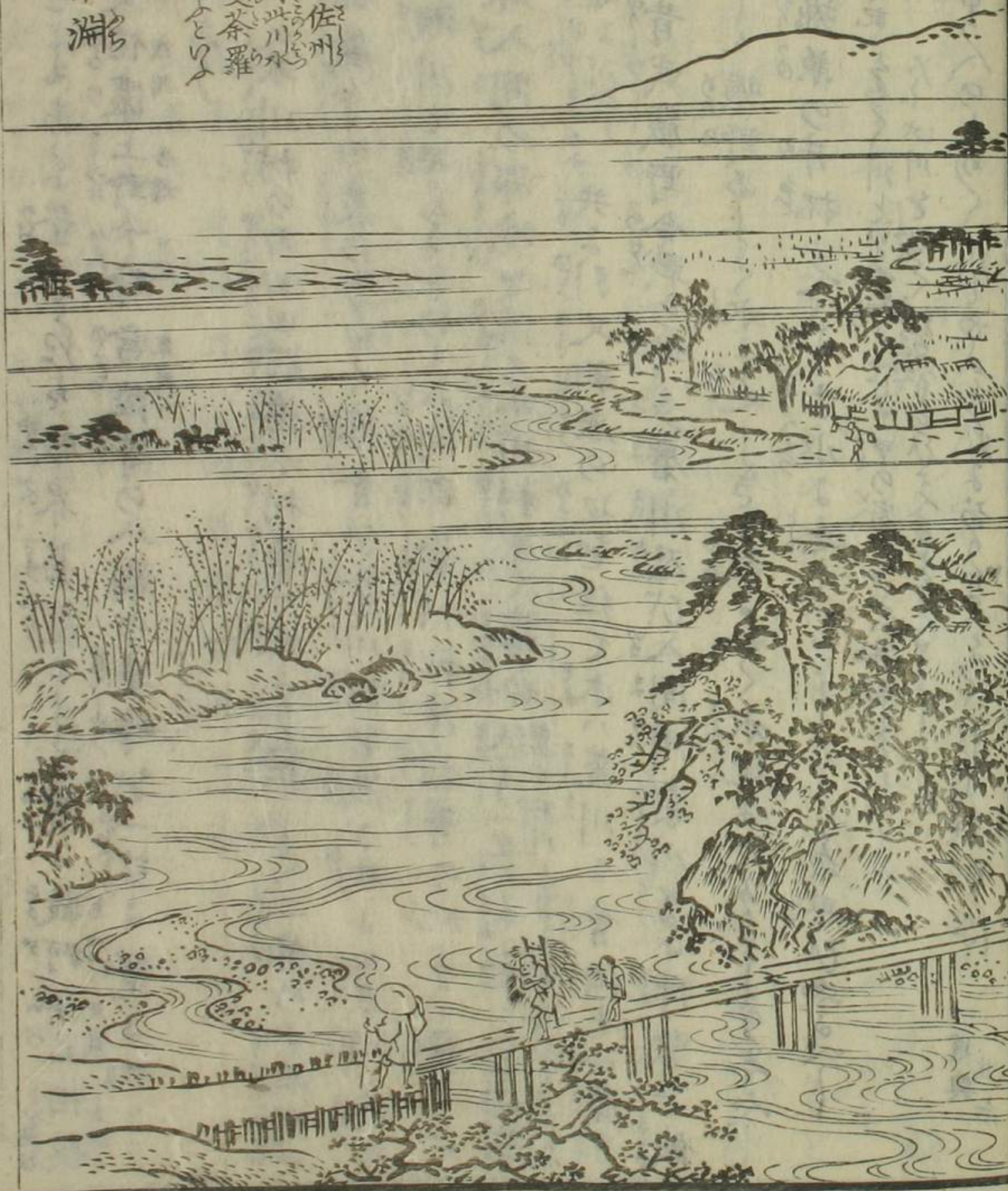
もそ

道真権后



曼茶羅淵

聖蓮上人佐州
配流の時此川
を以て曼茶羅
と書しちしといふ



甲斐信濃上野下野常陸等の八國の遠嶂を一望は覽る故なり
此名あり

久米川 久米川村の西田村清水村等の地より發し二條の小流野口

村徳藏寺の裏の方より落會ひ糸川村を流る故より久米川と号す

又二瀬川と号するものも入間郡糸村秋津村等の地より發し

多麻入間の郡境を流久米川村より落合夫より一里計赤に至り川中漸く

四五間共より引又新座の辺を徑て未ハ荒川は會流を正慶寺

徳の背武藏野合戦の時多磨川及び入間川糸川等ハ陣營を假

たりしハ曠野ゆき水よ乏しき故にかく水辺にたりし者あり

又云堀兼の井杯よるも古水よ乏しき故にありし思ひやるべし

田園雜記 といふ川といふ所を里の家々ハ井を掘りて之を以て

里人のといふ川といふれはありなりハ水も乏しき故に

大龍山永源禪寺 糸村より八國山より北の方小川の流を隔て

五丁沙ふあり曹洞派の禪林中に龍谷竜隱寺ハ屬す昔ハ鎌倉建長

天文年間大石氏開創する所の精舎ゆき開基大石氏法名を

英嵩衛俊大居士と号安松の長源寺ハ衛俊を開山ハ一種長純禪師

と号北条氏照の舎弟ありと云本尊釋尊ハ二尺をかり法座像ゆき

行基大士の作ありといふ

當寺開基大石氏靈牌牌面右ハ透岳宗開大居士中ハ英嵩衛俊大居士左

當寺鐘の銘は奉る大石遠江入道が

多なり長源寺の条下と合せしむべし

洪鐘當寺の住持雪巖和尚

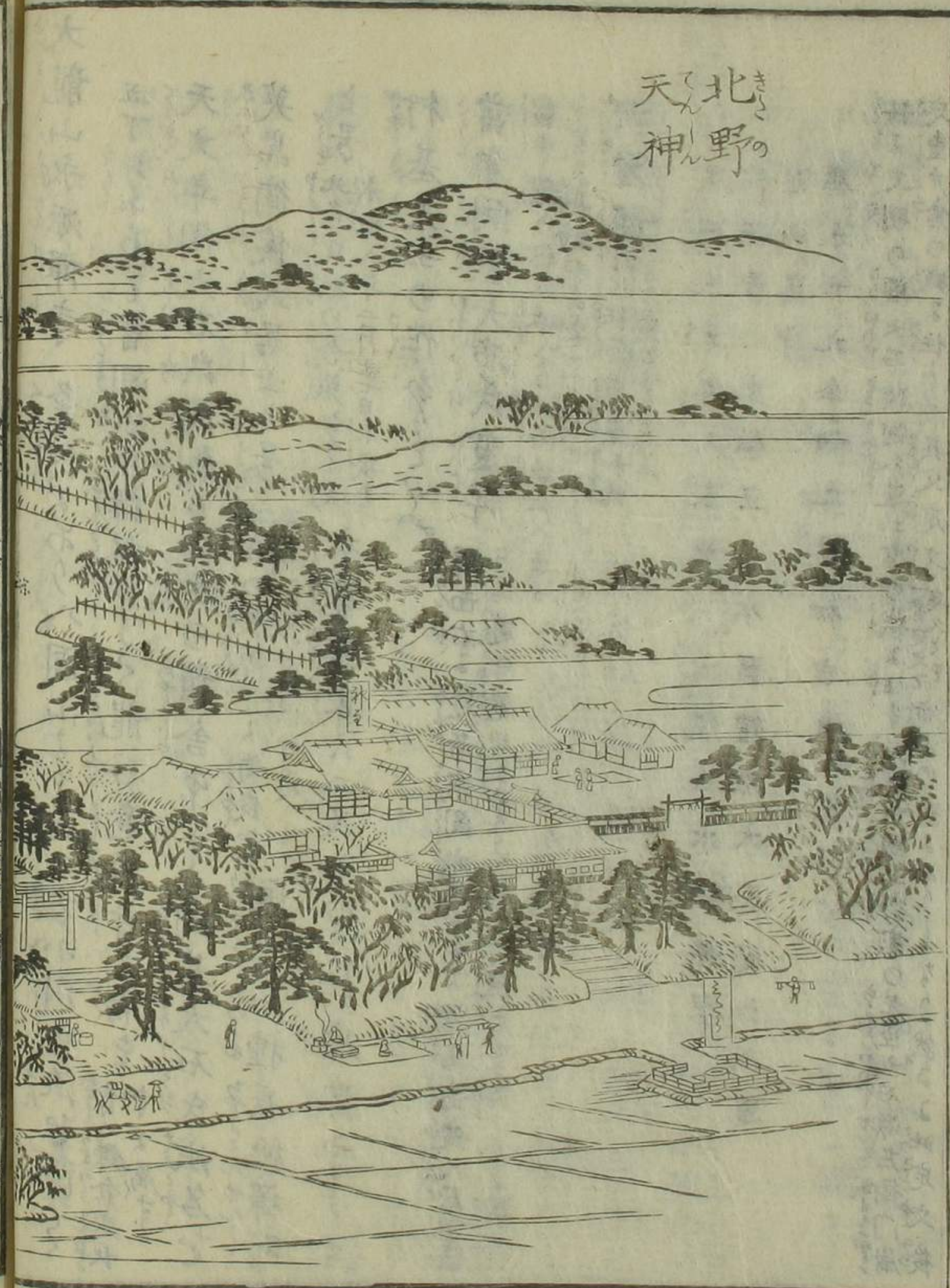
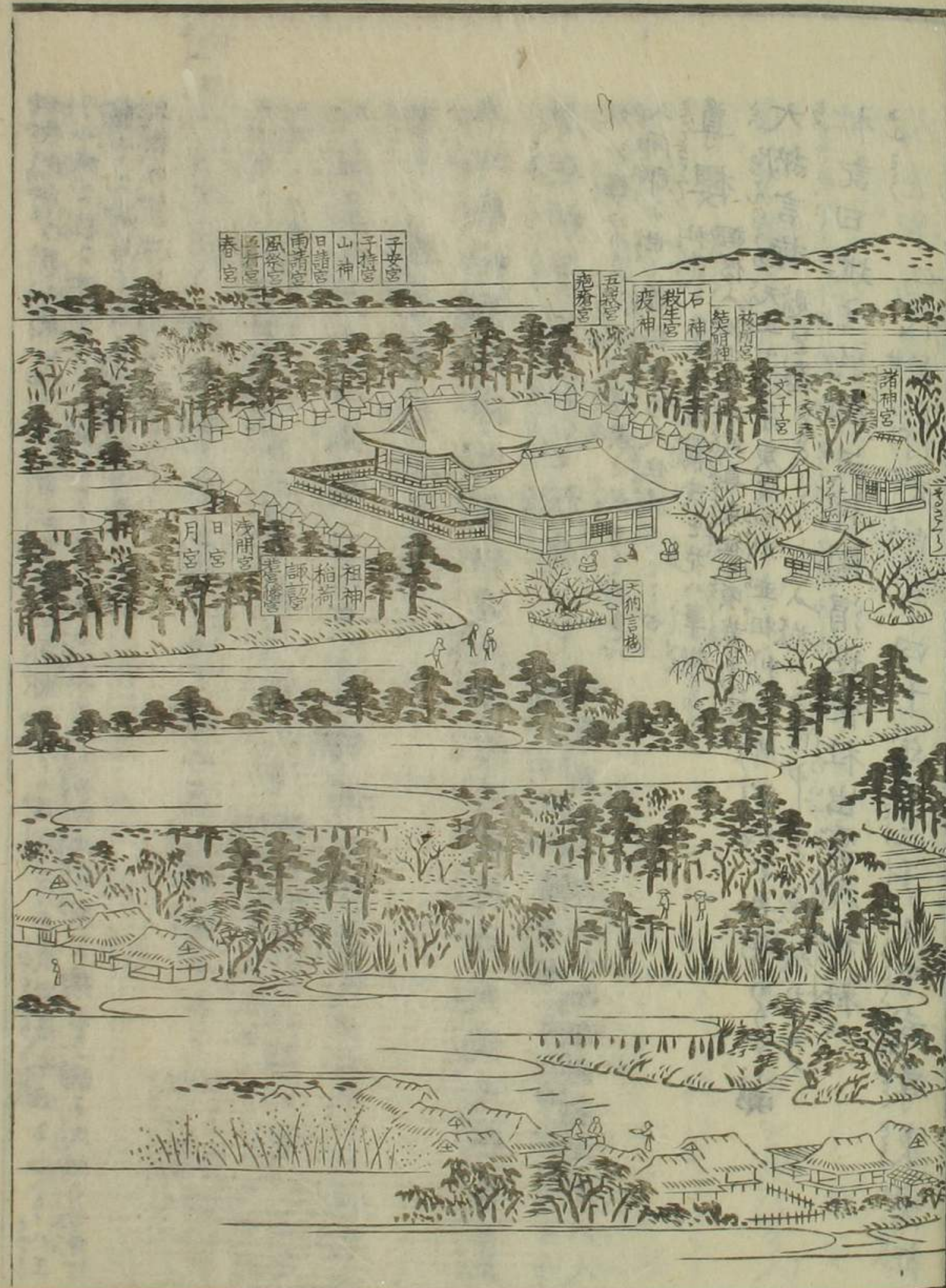
武州入東郡久米郷 大龍山永源禪寺

住持雪心叟融立 本願檀那大石遠江入道

直山道守 應永廿九年壬戌九月初吉日

按文明の頃大石駿河入道二宮の城に住り天文の頃上杉家の老臣大石源左衛門尉

定重戸倉の城に住り又其父定文書院文を竜山の城にありしなり然るは此定文後



北野天神の別氏照を尊とす苗野を繼せ同國由井に居城せしむ氏照後本姓に少り八王子の城に移る此等の人の祖先なるべし依て大石氏北條家子縁あり故に氏照の合葬を當寺に居らしめ又長瀬寺に氏照の靈柩を置るあり

北野天神社 永源寺より二十三丁西の方北野郷にあり 花洛北野天神と

又北野と武蔵野の大宮司栗原氏奉祀を 相傳天兒屋根命二十六代大中臣朝臣今麻呂の長男多美丸の苗裔

每歲正月十七日奉射二月廿一日ハ物部天神祭同廿五日ハ天満宮の祭より遠近より群衆せし

本社祭神物部神出雲伊波比神國渭地祇神天満天神篁手差

原明神等の四神を相慶とす 續日本紀神護景雲二年戊申秋七月壬午武蔵國入間郡の人物部直廣成等六人

尊櫻 社前あり枝葉繁茂花ハ單瓣あり 櫻侍人姓古日本武尊東征の頃

大納言梅 天正十八年庚寅加州垂相利家卿當社を再興あり一町

社記曰地主物部天神國渭地祇社出雲祝神社ハ

人皇十二代景行天皇の四十年皇孫日本武尊東夷征

討の時武蔵野に入賜あふ諸軍大に渴を 井泉を穿けし

堀兼井といふ是れ此所より 時ハ老翁忽然とて来り

尊と導く此地に至らしむる清泉ありく諸軍の勞を救ひ

翁の歸る方を 尊其時天神地祇劍の義神を祭るハ戦ひ

自伏しなるとなり 物部天神國渭地祇社出雲祝神社中く是を武尊

是なりとの佩せる草薙の劍ハ元出雲國八岐の大蛇の 同四十一年辛亥正月

尾より出るとを以て出雲祝神社と稱し 毎歲正月十七日

十七日土人集り方八丁の地ハ三神の社檀を經營せ 奉射の式あり

此遺風 同年二月二十一日ハ遷宮あり 慶長二年二月廿一日此所ハ

欽明天皇の十二年辛未十一月十五日武蔵野小手差原の靈神

及び日本武尊を合祭し小手指明神と崇まる又一條院乃

御宇菅丞相五世の孫菅原修成武蔵國の國主たりし時菅公の

靈ルあは後長徳元年乙未二月二十五日勅許よりり花洛北野

天満宮を始り關東に移り奉らる依坂東第一北野天神也

稱しなる源義家朝臣奥州の朝敵追討の時も宿願おぼつて
惣社建立あり其後建久六年乙卯九月十九日源頼朝御正
八幡宮一字を勸請ありてまへて本宮九社共ニ修造せられ
社領二百貫文の地を寄附しあふ此時式内の諸神勸請神宮を
領地二十貫文ありてまへて
夫より後大ニ荒廢せり然レ延文元年丙申尊氏將軍諸社と
建立し多ひしが又應仁の火ハ破れ是れを天正十八年庚寅加州の
大守利家卿再興あり殊ニ忝も御當家よ於て浄崇敬此
餘ニ社領を添へせり慶長十三年戊申浄造堂あり大久保
石見守
身と司りありし武門擁護の浄祈禱忌みりなり
慶安二年中も又四十二石の
社領を増しめらる
源氏満證狀一通社司栗原氏の家に蔵せ
其文左のごとく
寄進 武花園山野天虫食

同國山口郷内北野宮殿 虫食
并田畠在家 虫食
在別命虫食

右任先例致沙浄可祐りし状を件
寛永四年八月廿五日
右兵衛督源 虫食 在判

按此古文書源氏満なり虫食其名あるべし
大石源左衛門 古文書 同家蔵
北野宮神主職しりしを記し
兼其其の記しを記し

天文十一年二月十五日
道俊在判

北野宮 神主殿

按小道俊大石源左衛門の御子あり
大石源左衛門の御子あり此二通の外は
小田原北条家の朱印あり其文あり

小手差原 北野神社より西北の方十三四町を隔て河越入間川等の邊
まへく小手指原と号せり 豊島郡下徳馬村は小手差原の舊地残り由
云く小手差原ハ北野物部天神社より西北の方六七里四方の地をいふと今ハ壘野と云
徳子七百餘石の地と云ふ事あり云々
新葉集

むさしの原へおびきくはては差原といふありあけのりく
おびきくはては差原といふありあけのりく
おびきくはては差原といふありあけのりく

其の爲世はあゆむをいひてはむすむかひある命なりせ

中務卿

太平記曰正平七年

北朝の文和 紀元

閏二月二十日の辰

武蔵野

の小手差原へ打臨み一方の大將ハ新田武蔵守義宗五萬餘
騎を五ふ分ち一方の義興を大將めく其勢都合
二萬餘騎四方六里に扣へり一方ハ脇屋左衛門佐義治を大將ハ
て二萬餘騎是も五箇所に陣を張敵小手差原ありと聞えられハ
將軍十萬餘騎を五ふ分ち中道よりと寄られ去程ハ新田
足利両家の軍勢二十萬騎小手差原に打臨敵三聲時を作とバ

御方も三度時の聲を合せ上ハ三十三天迄も響き下ハ金輪際迄
聞ゆるんと震し略中饗庭の命鶴生年十八歳容貌無雙は兒
なるが今日花一揆の大將なるは殊更花を以て出立花一揆真先
小懸おとると見玉黨七千餘騎と戦ひ揉立ち一返も返さず
その引程と有るれ將軍は十萬餘騎混引し引立ち曾て
後を顧む新田武蔵守義宗旗より先に進むて天下の爲めを
朝敵なり我るハ親の敵に只今尊氏ハ頸を取る軍門に曝さむ
むハ何の時をう期まべきとく自餘の敵共の南北へ分れ引をバ
必しも目みかげを只二引両の大旗の引み付く何く迄も追蒐なす
引も策を奉追も逸足をかせば小手差原より石濱まで坂東道已ハ
四十六里を片時が間かぞ追付し將軍石濱を打渡り入る時
近習の侍共二十餘騎返し合せ追蒐敵の河中迄渡懸し
引組く討死し其間ハ將軍急を遁せ向の岸へかけ上り入

落後敵ハ三萬餘騎追蒐る敵ハ五百餘騎河の向此岸高く屏
風を立てたるが如くある小數萬騎の敵返し合せく此を先途と支
なり日已は酉の下に成る河の淵瀬も見え分む新田武蔵守義
宗續のく渡も小坂のむすず跡を續く御方ハな安うぬ者哉と
身を嚼く本陣へと引返さる新田武蔵守將軍を討漏しぬ今日ハ
日已は暮ぬるハ勢を集く明日石濱へ寄むと小手差原へ打
兵衛佐敷何所より扣へぬと杉合の兵共は問ふハ兵衛佐敷と
脇屋殿を一所に扣へし津渡を候つるが仁本殿も打負て東の方へ
落させぬ候へしとぞ答ふるさそ爰小見えぬ篇ハ敵を御方
を問ふハ此辺の御方ハ一騎も候まじ是ハ仁本殿兄弟の勢を白
旗一揆の者共が焼くる篇を候らん小勢あり此辺は津座候ん
るハ御方と覺え候へば夜小紛れしと苗吹峠の方へ打越させぬ候て
越後信濃勢を待調へらと重て津合戦候りと申るハ武蔵守

誓思案してぐわし此義然るべしとて苗吹峠ハつごごとと問て夜中ハ

落れぬ云以上其要

太平記は新田義宗朝臣尊氏將軍を討く小差原より石濱迄東道四十六里を片
時之間に越候なりとあるを隅田川の石濱より多麻川の瀨日野の津より川上
牛濱と唱ふる地其旧地名由土人云傳ハ依按は牛濱の地より多麻川を隔て向
於西龍の地を二の宮と号し絶壁ありと太平記は河の向の岸より屏風を立て
とのみ地勢相うなり又同書は苗吹峠卒吹峠とも書く宇須伊と訓し上野と信濃の
國東とを記すの誤あり當國地企郡將軍澤村とて地ハ古田村將軍東徳の時
陣營を布ぬる田跡中事土人其地を封し義祠を營し將軍大權現と崇めぬ
ゆへハ入間川の辺より上州への通路あり今市宿といふより西北はあり其軍
澤と前は苗吹峠と号する山城あり義貞朝臣分倍の軍破れし上州信州の國界ハ
ゆへハ入間川へ陣を引し其夜苗吹峠へ移りし事あり上州信州の國界ハ
此峠近四里ありとあり其夜中も至りつべしと思はる

山口觀音堂北野村より西南の方半道をかりを隔て新堀村あり狭山
の方入間郡は接する地の惣名を山口と号す吾菴山金兼院真光寺と号真言
土俗云此地ハ山口平内なる事と云人の城跡あり

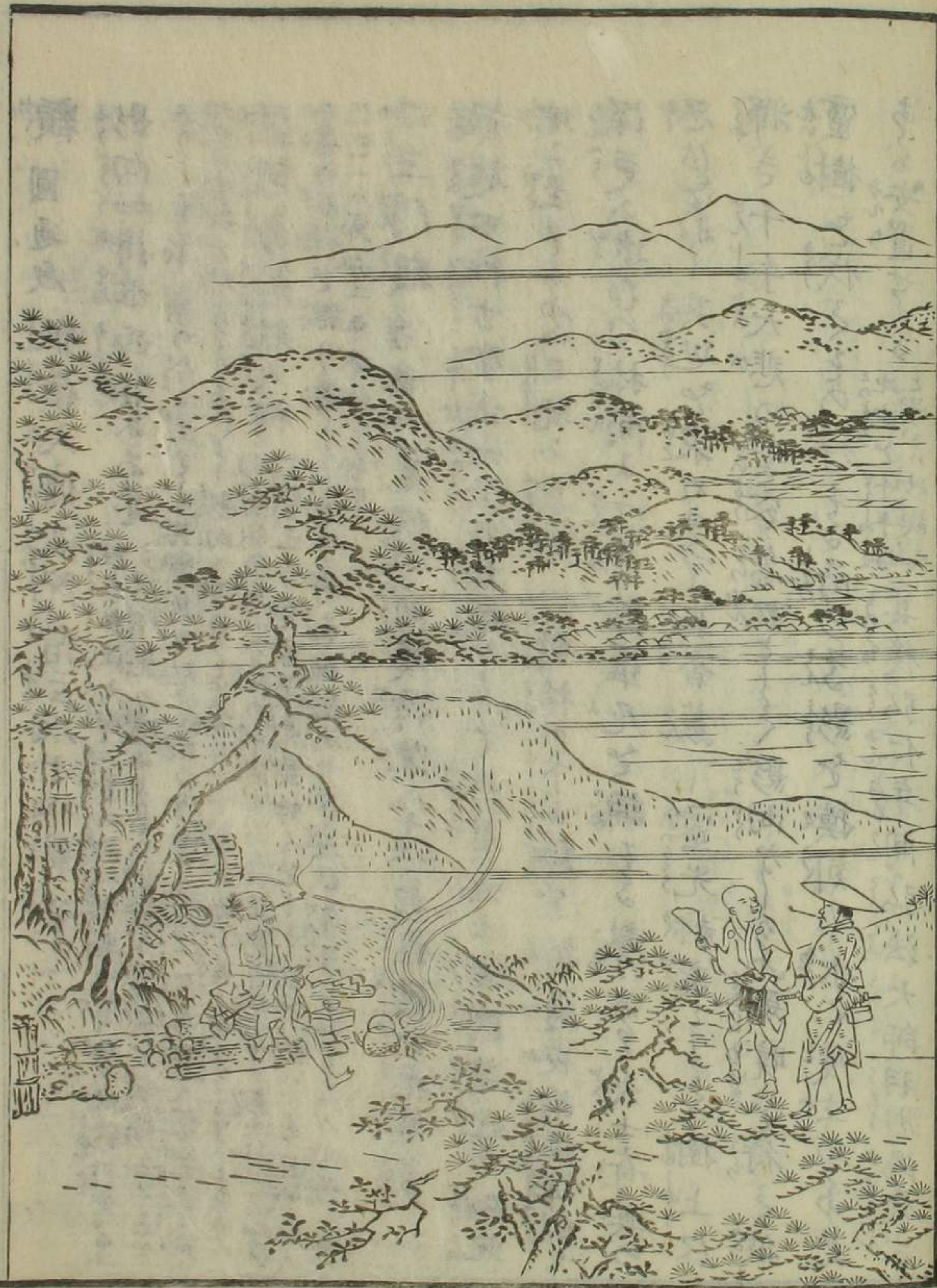
宗江戶大塚護國寺は屬せし弘法大師を以て開祖と稱す

本堂本尊千手觀音立像二尺三寸あり脇士多聞天不動明王兩像
三尺あり行基大師の作なりとも

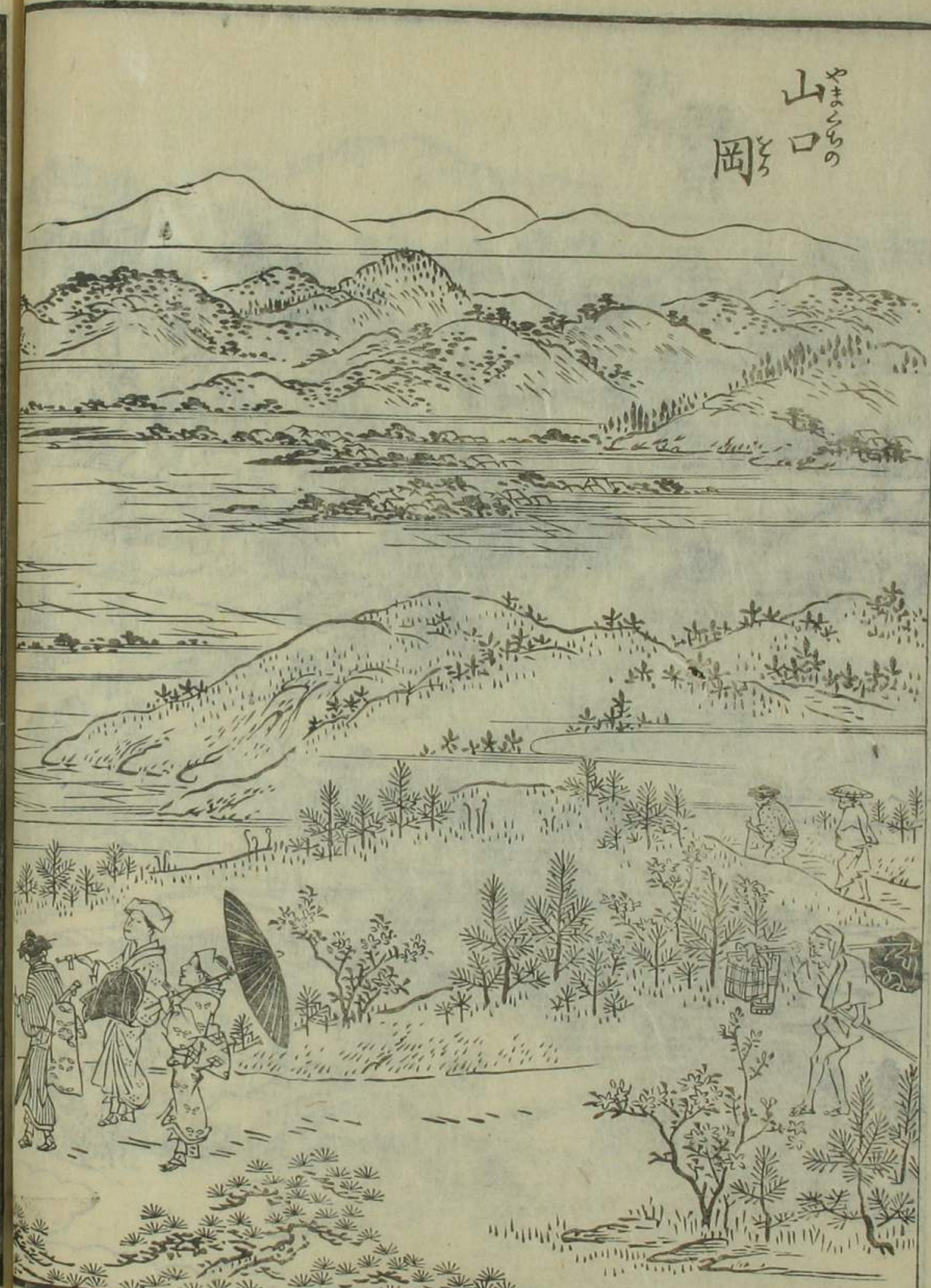
或ハ同大士感得の靈像といひ入

山
觀
音





山
口
岡



額 圓通殿 根嶺大傳法院僧正八十八翁筆

影向加持水西谷小あり 往古弘法大師一夏の間に千座の獲摩供修行あり

大悲の影を拜し 其の靈泉早懸りて濁りて一時有信の人此水中を臨観て

琵琶島辨財天祠 千手谷の東口の地の中洲あり琵琶の形なる故号とす

二基の石碑を採り得たり 碑面辨財天の字及び年号を銘を一八九五年

二王門額 吾菴山 筑波山前護持院八十八翁權僧正光星筆

縁起曰往古聖武天皇の勅願ありて行基大士諸國遊化の初此地

地に至りて日既暮ぬ仍樹林の下に錫を掛通夜誦經禪觀せ

深更小違ひて林間より千手陀羅尼を誦する聲あり大士奇異の

思ひを祈り其辺を求めりて異香薫り靈光赫奕とて樹上に

輝き千手大悲の聖容忽然とて影向なりて則曉を待て彼

靈樹を伐てその拜する所の影を摸刻し永く度生のゆえ

あふ安置せり 此地を千手谷と号す此故に 其後弘仁年間弘法大師羽州湯殿山小

行むとせし途途中に此地小あり一人の老翁來り告て

曰く此山中は行基大士作る所の大悲の靈像ありとて人其靈

あるを告げ我大徳の此地に至ると待て過し堂宇を營めんと

云て後其翁が行方を告げ 此老翁を地主權現とて依大師山中に入り

求むるを告げ翁が告ぐる所は千手大悲の像及び脇士多聞

不動等の二尊を感得なりとて一字の草堂を建立 當時の權

其後弘安年間國中大火疫癘流行し死に至る者少なり 時一人の

老僧ありて家毎小至り告て曰く吾菴は昔き大悲の尊像たせ

て來り祈り輩は病患悉く免るべし又吾庵をあらんとす

深夜山中光あり地に至ると云り里民其教をあらひ夜光と

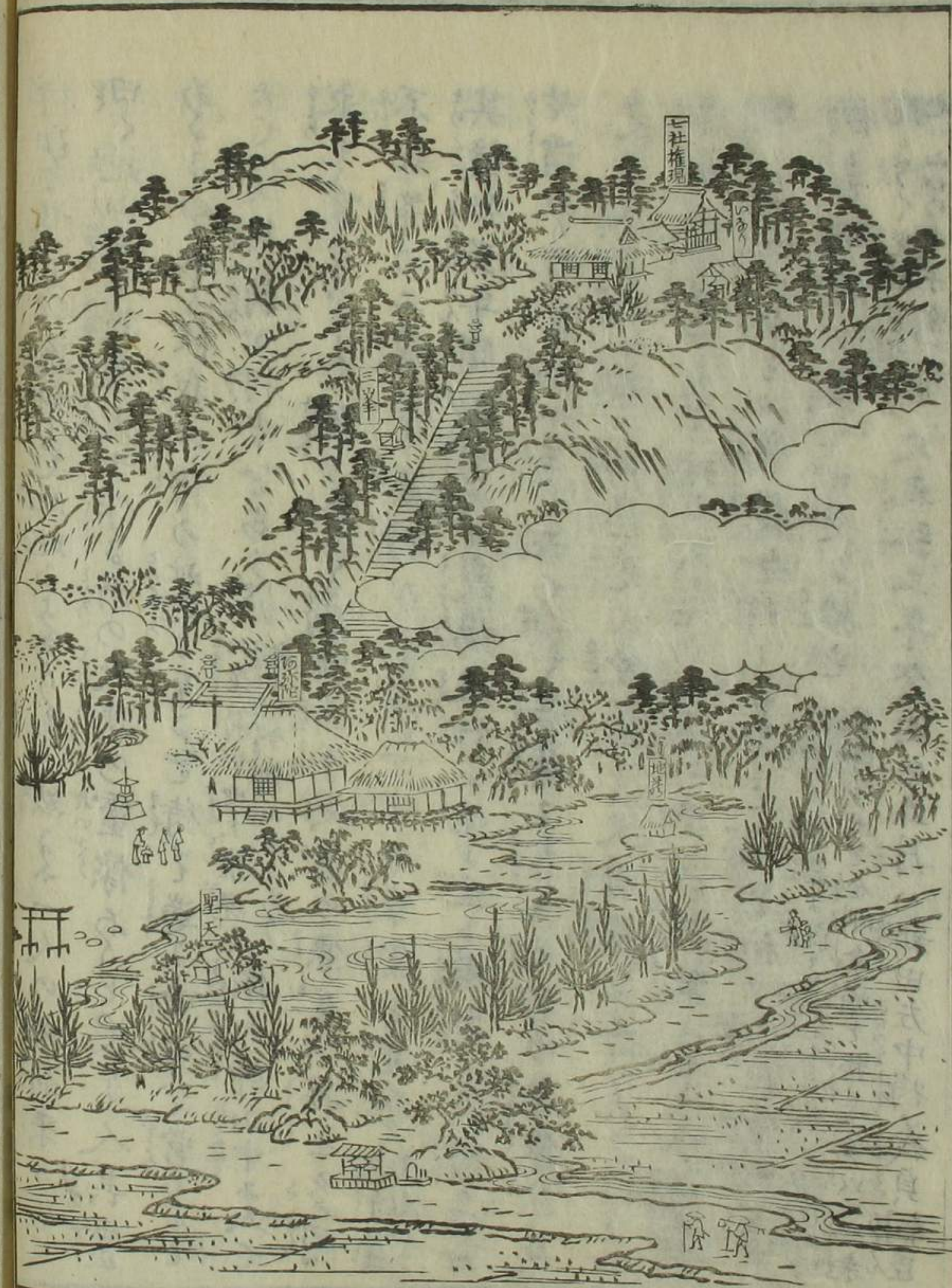
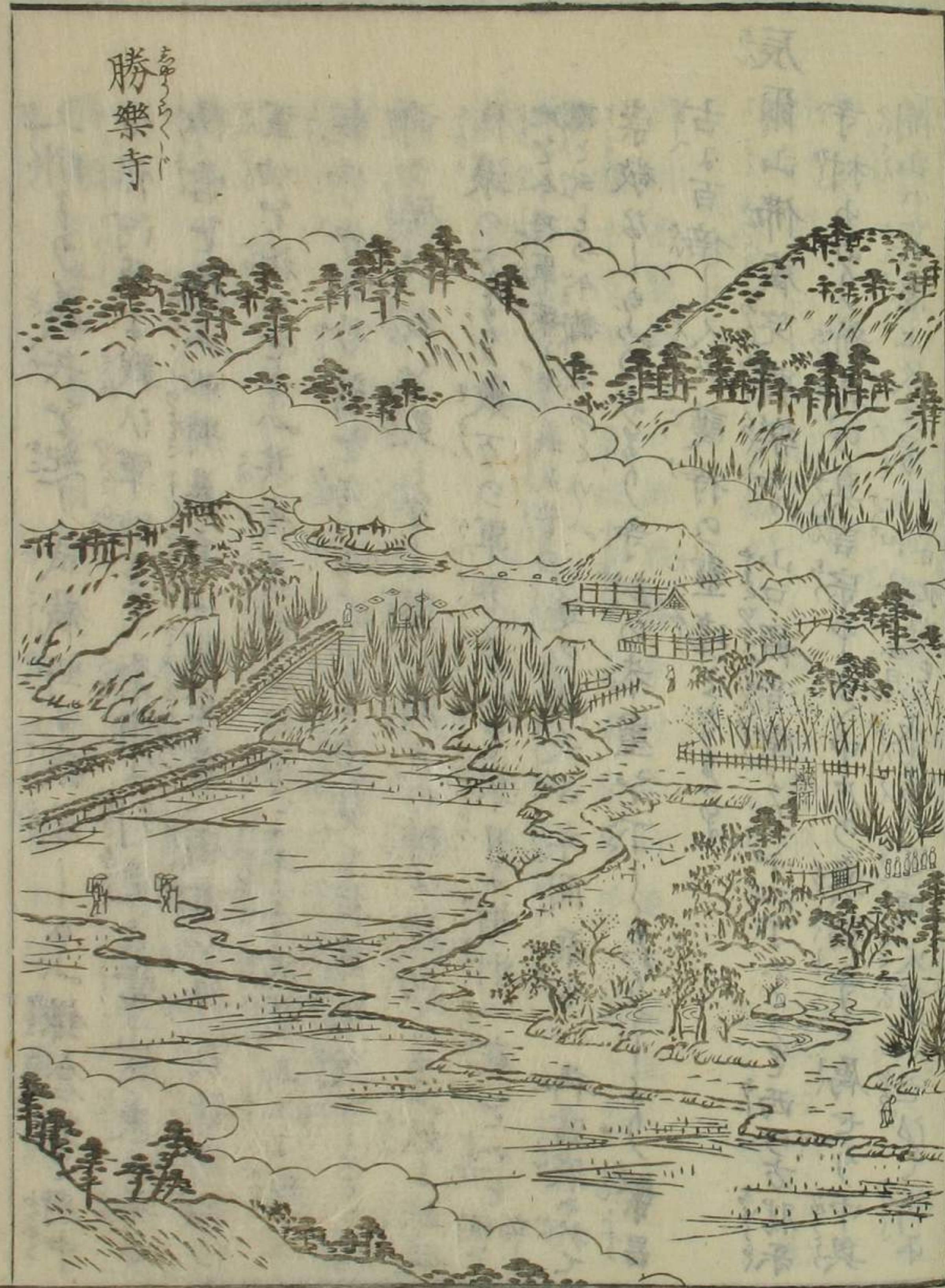
標し此地に至ると此靈像を拜し病を祈り大に靈驗を感て

歡喜踊躍し諸人日夜絶む 老僧の言語は説く山と吾菴とを以て金乘

院と号し光明を放する 御禪の地と金剛衆嶺と稱せしを以て金乘

地ハ山口の佛手堂なり 又元弘三年癸酉の五月ハ新田左中將義貞朝臣

勝樂寺



上州より義兵を起し武蔵野に旗擧し、その鎌倉勢と府中
 分倍河原に戦ひ軍敗れ、条川に引退き當山の東の峯に
 陣營を構ふ。此時義貞公觀世音へ願書を捧朝敵退治の
 軍功を祈らせし、其夜義貞公の夢に千手大悲馬上に現し
 親手は弓箭を与へ、夢覺て後感悦淺く庭
 前の櫻枝を策とす。盟て關戸の陣に發向し、然るに越後
 信濃の方より數万の軍勢差加ふ不日相州一家を亡し、
 地を今將軍塚と号義貞誓の遙の後天正年間泰も御當家於て
 櫻と云ふの今猶榮ふと云ふ。

崇敬なるものあり寺封の朱璽を下し、ありより繫昌
 古より百倍一人天護持の靈場となりしと
 辰爾山佛藏院勝樂寺 山口觀音堂より十二丁をとり西の方勝樂
 寺村あり新義の真言宗中戸の真福寺に屬せり中興
 開山ハ真惠上人と号 元和九年正月 本寺ハ近頃火災不亡びて新小

座像二尺をわきの十一面觀音を安置し、此火災不仍て悉く日記
 を亡したりとて草創の時世等詳なり、
 洪鐘 當寺大坊の前左の方あり銘文高麗郡とあり元禄年間災罹
 り其銘云く

武州高麗郡山口郷勝樂寺村奉新造立鐘銘曰
 諸方空相 寂滅異名 常樂我淨 箇々圓成

奉日侍講供養 奉庚申講供養
 奉念佛講供養 奉誘奉加供養

奉修山王七社大權現御宝前依 願主 藤原重信
 辰爾山別當佛藏院勝樂寺大坊 住寺中興開關 法印推大僧都
 尊海上上人 莫榮上人

延久三年辛亥九月十九日 開關 莫有順說
 本願 二見相覺妙性
 初誓

明曆三年丁酉九月吉辰 日敬白 御大工 推名兵庫頭吉純

此寺境の地ハ入間郡小属より再び按高麗郡中勝樂寺と号する寺あり後高麗山
聖天院改む此寺の地あり考ふべし
七社権現宮 勝樂寺より百歩を東の方山の上あり山王二十一社の中七社の神と
古當社の一の鳥居あり一曰路なりといひ傳へ毎歳九月十九日に祭禮修修

開山塔 七社権現の後に開山塔と稱せられども唯其唱りしやうと塔の形を存せざる
當寺往古ハ大伽藍あり鎌倉將軍家累世の祈願所なり

となり其頃を十二員の坊舎あり魏となりし物換星移
今ハその名の存し悉く田園の字は残り

對し其の稱と竟又大坊の西南堂地入といふ所ハ古瓦を穿ぬるあり古伽藍の
證也著し又文永嘉元正等の古碑数枚を存せり
按日本紀中敏達天皇元年壬辰夏四月高麗の使人來りて表疏を上る其表疏
鳥羽船史の祖王辰爾と云ふのあり羽を飯氣蒸く帛とて羽は即其文字を
写しし詳讀と當寺山号辰爾山と稱せしれあり今日記とひく其古とあり
あつて遺敷必かり

新堀玄蕃居住地 山口新堀の地は住せしと云太田道灌の家臣に
して江戸谷中江新堀あり故あり火時此地は移住し太田

家傳ある所の稻荷の神像を以て一社を勧請し今當寺に
護法神と稱す天女稻荷と稱す玄蕃後小豊島の新堀に故住せしと云

よめ此地中も新堀の号ありと云

山住彦三郎旧趾 七社権現より良の方三丁をかりを隔る小岡を

云土人ハ山住彦三郎某の城壘の跡なりといふ

此地小旧家十四五軒ありて其中二見家の古文書及び旗幕の

注文書等と蔵するものあり 鐵石職を業とする候者ありといふハ二見お監
又此岡の根に諏訪の神祠ありし石剣と神體とを 其質青く銅
其古文書曰

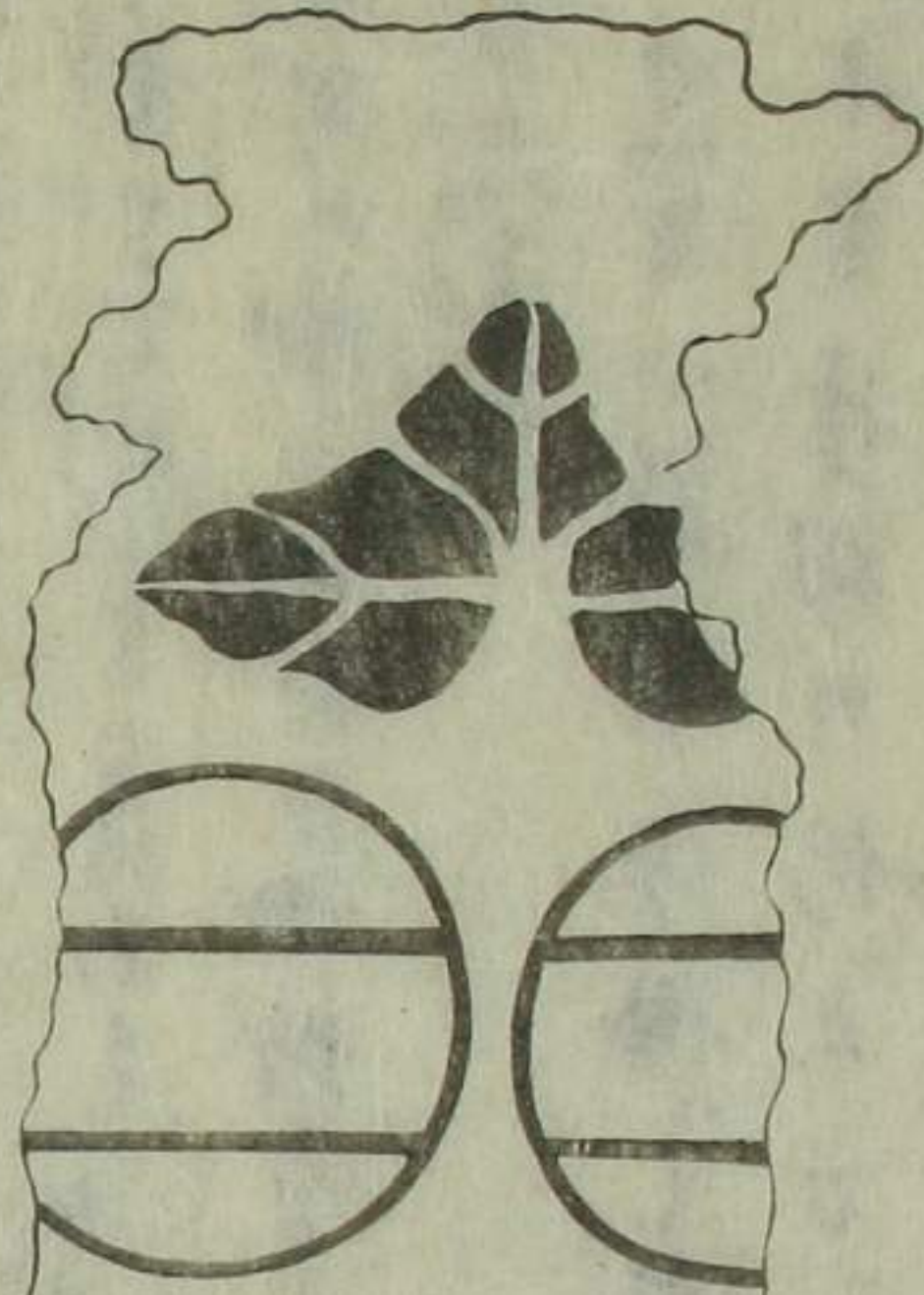
先日小室御沙働之時走りて有能人
中有神妙の仍大刀一腰を以て向後
承のお塚着也状の件

十一月二日

空哲判

二見の巻友

ハタハ此モンノ上三ツヒキリヤウ
アルヘシマクニハ二ノクロカルヘシ



按相州鎌倉松岡過去帳天文七年十月七日生實御所左兵衛督義明八正院
空善道哲と注したり空哲の二字を分り空善道哲とせしむ樹くこの古文書に
義明の二見お監ひひりひのあふ花押をとも考ふる義の字のやこれ
義明の花押ハ花押義續花押義古押義等の書もこを漏せ故に考ふる
所なり猶他日訂正せしむ

箱

箱根崎は驛舎の西北数百歩あり
奥羽等の國に相州大山へ登らんとも軍色此の箱根崎は往來の驛なり
箱根権現を以鎮守とする故箱根崎と稱し或ハ箱根崎と号するなり此

今知らるる古ハ池の周回三十丁ありありなり今ハ新墾々
悉く耕田となり又ハ林叢と變して幾ハ四形茂草此地なり松
風の響ハ波瀾よかると幾ハ其傍を存するもの
天の祠を營建せり菓菜と此地東北の岸頭より起る所の一峰を則
此地の産とを尤佳味なり
狭山の首ゆるく東に連るる凡三里餘を
池と主人狭山の池とも稱せり

多ふみ草の池をを於ハ水の流る人となき 知徑

堀兼井

河越の南二里餘を隔て堀兼村あり浅間の宮に

傍にあり小是を浅間堀兼と号せり
此社前ハ古の湫倉街邊に
行路なり今の宮ハ慶安中松平豆州侯建立なり
浅間の祠の左ハ凹地を
より別當と慈雲庵と号河越高林院の持なり
中の方六尺なる石を以て井桁と半土中埋れしもの
ありと堀兼の井と稱せり傍に往古川越秋元侯の家士岩田
某建る所の碑あり高と五尺餘其文左の如し

井の兼の堀



千載集

むさし
井の

堀

の

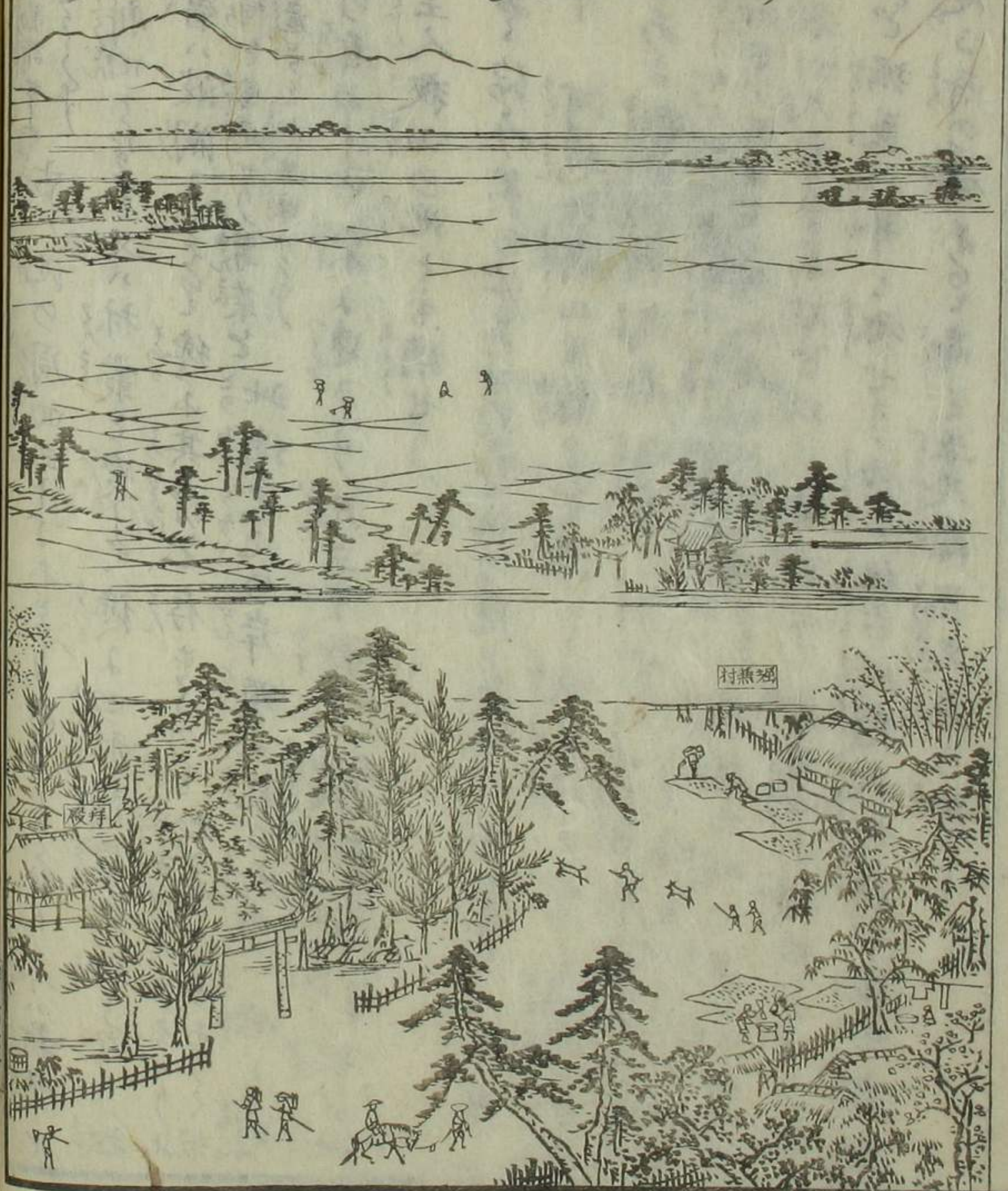
あるもの

うれしく

水の

辺

後成



此凹形之地所謂堀兼井之蹟也恐久而遂失其處
因石井欄置堀中削碑而建其傍併以備後監
里語堀而難得水故云尔兼通難未知只從俗耳
宝永戊子年三月朔

千載集

法師品湖見濕土泥決定知近水のうらと

宇治百首

むさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

俊成

むさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

冷泉
大政大臣

むさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

俊頼

夫木

むさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

伊勢

家集

むさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

為相

拾玉集

むさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

西行

むさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

慈鎮

連奇良材

むさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

人よむさし堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

回國雜記

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

道與
准后

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

同

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

同

北國紀行

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

竟惠

枕の草紙

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

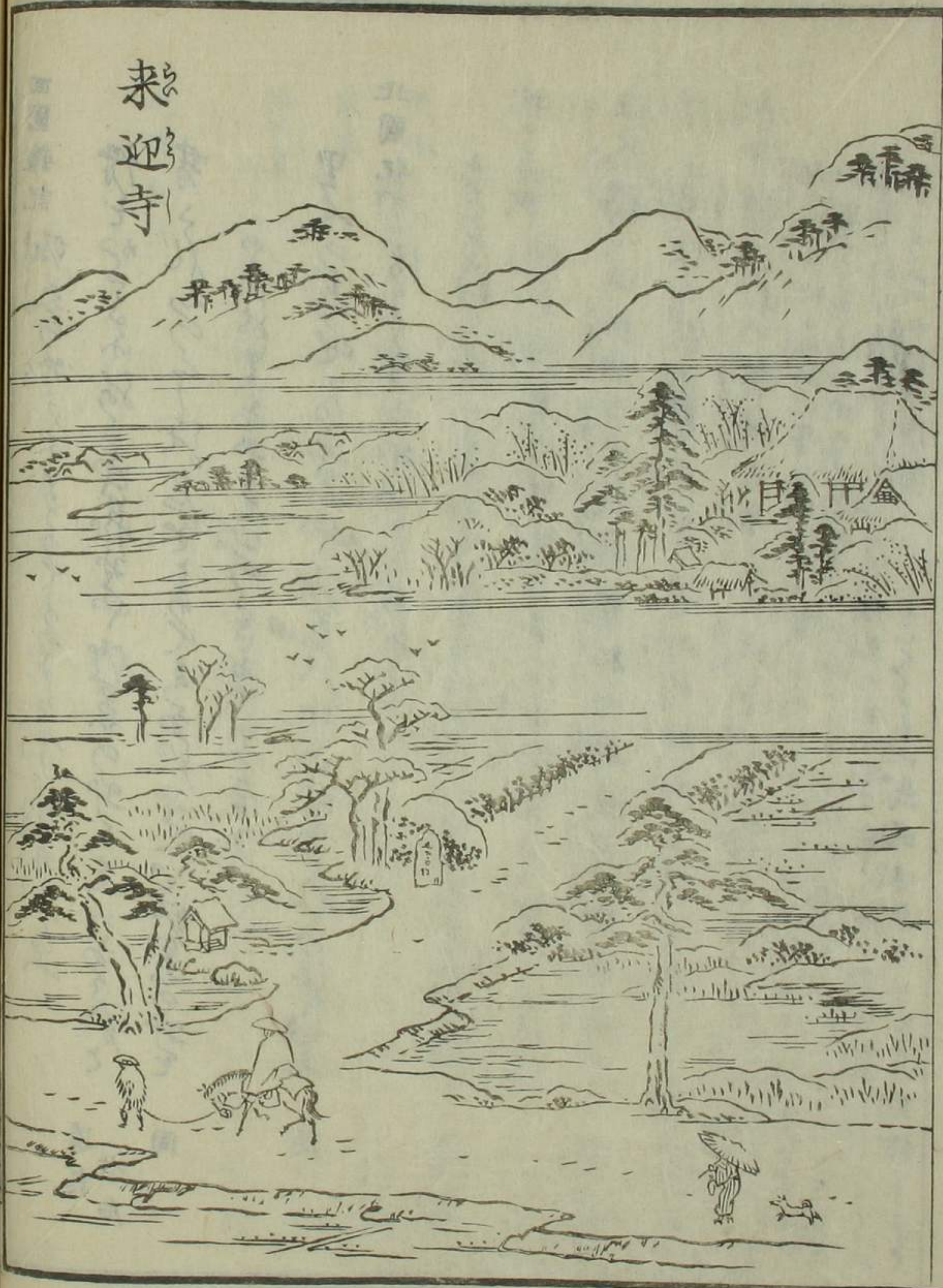
諸軍

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし

堀の井もあつたを堀く水の辺のむさし
按太平記元弘三年五月十五日義貞武蔵野の戦ひ小打負
引退くある此地の所なり又元和十三年の春光廣郷の戦ひ
端多のぬむ波の所堂云くかりし此浅間堀兼の所なり
其餘

来迎寺



還車阿弥陀如来

堀内村東光山来迎寺

曹洞派の

禪寺に安置を本尊阿弥陀如来に立像三尺脇士観音勢至に

両像ハ長二尺あり各佛工運慶の作なり

運慶と一三礼あり彌陀観音勢至一光三尊の佛軀を

造りむ點眼供養の日生身の如来現然とて来臨あり

光明を放ち新佛を照し又光明を放ちあり

とあり其奇特せよ著く遠近の道俗皈依渴仰せしは

堀の井と稱するものあり此地より六町南の方より二十歩あり其の間に

あり是とも堀の井と稱するものあり又北入間村にも堀の井と稱するものあり

堀の井と稱するものあり又北入間村にも堀の井と稱するものあり

堀の井と稱するものあり又北入間村にも堀の井と稱するものあり

堀の井と稱するものあり又北入間村にも堀の井と稱するものあり

堀の井と稱するものあり又北入間村にも堀の井と稱するものあり

車返古事



右大将頼朝卿是を傳へ聞ひ懇請願なるを秀衡初安比
 靈像なれども將軍の嚴命黙止ぐく速小兼諾一蓮輿を
 装飾武士數十人を〜靈像を鎌倉に贈るものせん中
 途中武州府中の邊に至るに蓮輿大盤石の如くふ
 くと更小動く〜右幕下其を聞し〜鎌倉八本尊
 有縁の地はあ〜と奥州に還るに由命あり是より〜
 其地を車返村と稱せり〜
 堀の内村の安〜と云
 禪師深芝順富大和尚の時一持と云
 澤或野老此地ハ秩父街道の驛舎中〜入間郡に属せり三
 八の日市あり〜賑は〜江戸四谷大本戸あり此所迄ハ西の方七里
 あり〜
 河越〜四里青梅へ
 五里ありとのみ

田園雜記

〜

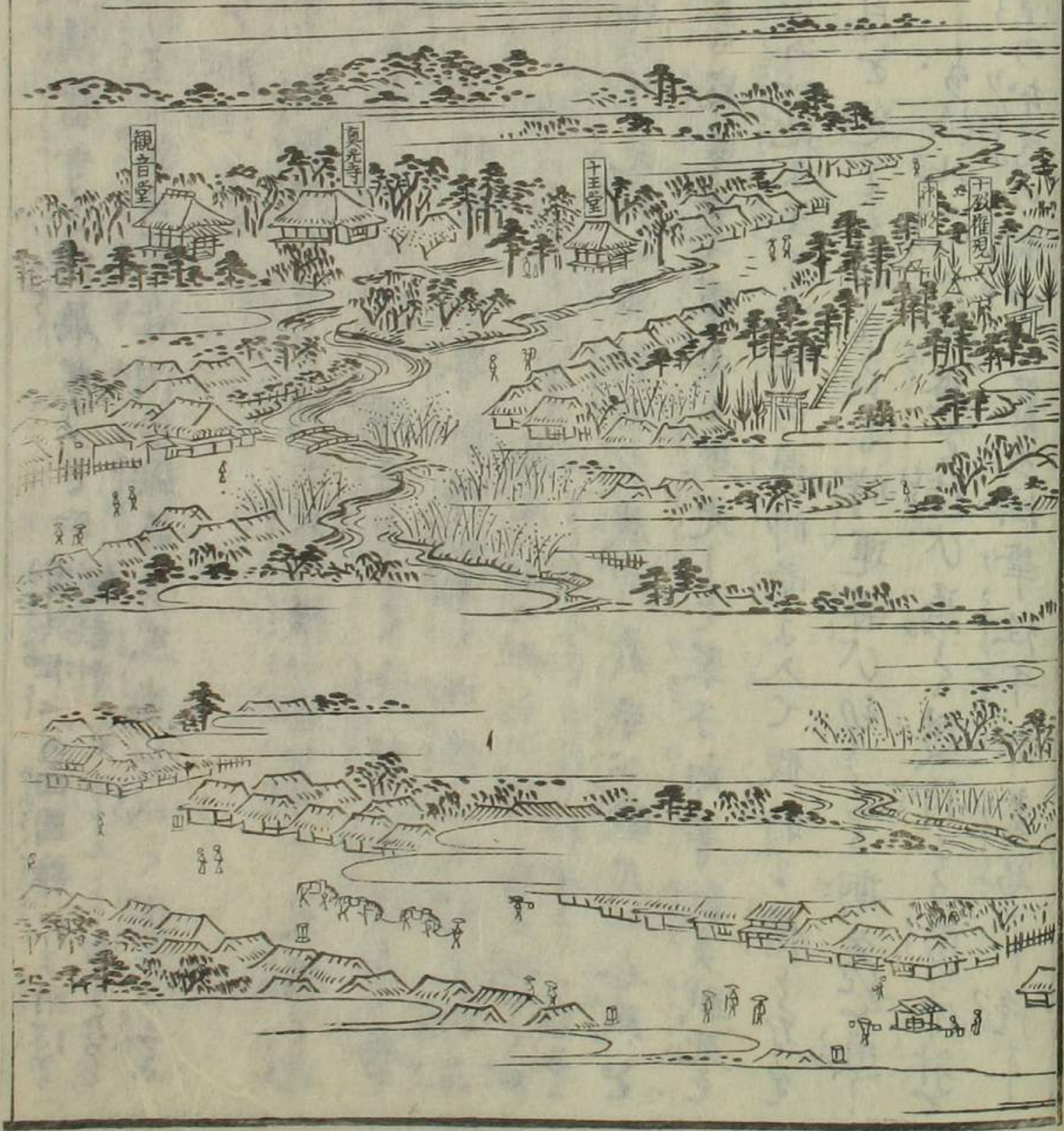
所澤卯花



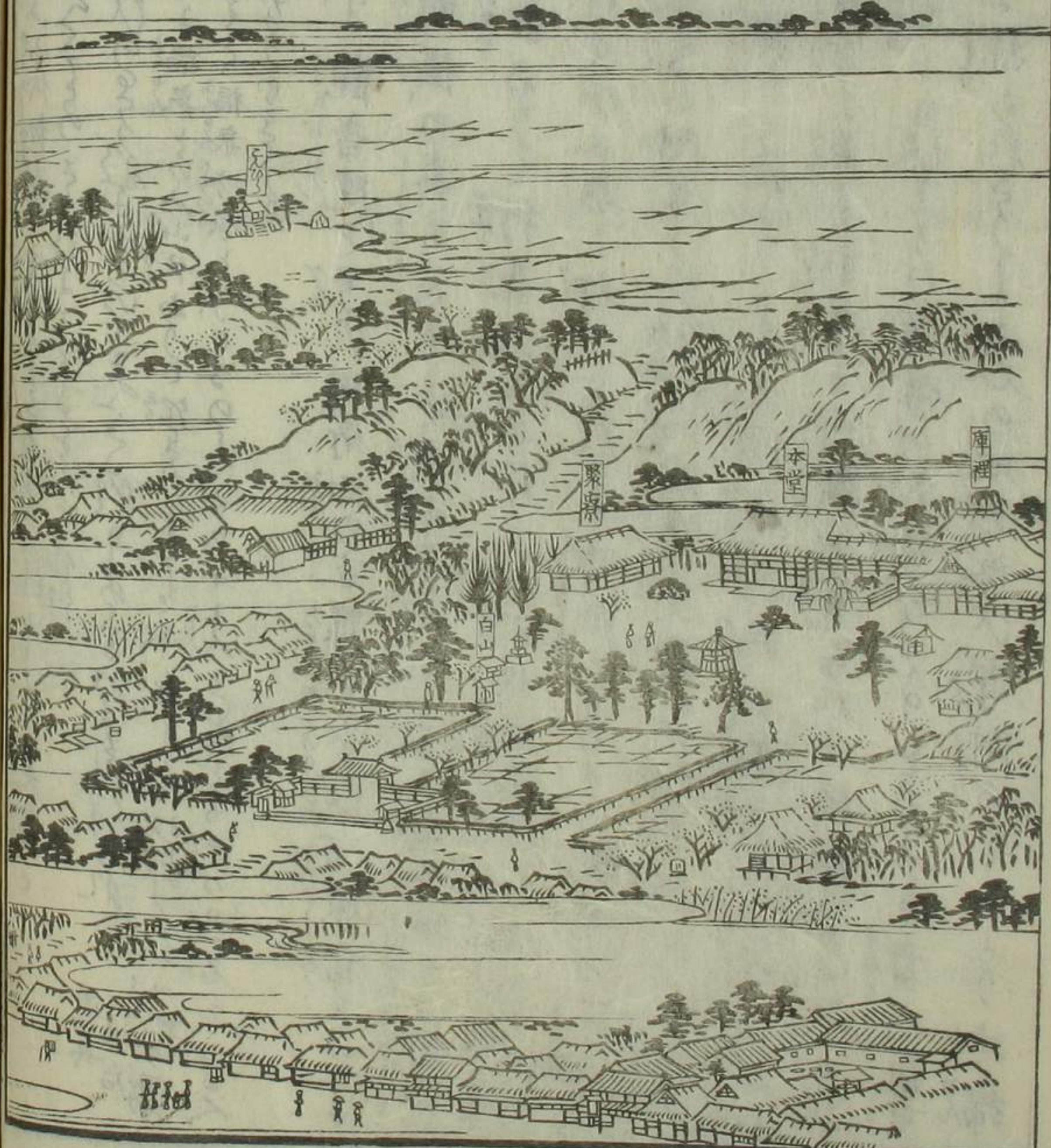
神代のひのころは... 道真
後前より福泉と山伏ありとされし今廢しり外此地の畑の
字は残す福泉塚と号するのこも多し土人といふ今ハ其名を
まれなるり

遊石山新光寺 觀音院と号し同所西の方驛舎の入口河原宿といふ
地あり新儀の真言宗中々成木の安樂寺は馬を本とする正觀音
立像一尺餘ありて行基大士の作といひ相傳建久年間頼朝卿下
野那須野及び三原は狩りありし時假らるし假家の跡の地を
當寺は本多に附せし其後星霜を経る兵乱の砌其
地を他は掠りし元弘年間新田義貞公北条高時征
罰の頃當寺に至り本尊を祈願を董られし後鎌倉を攻入る
高時を亡し多し靈像の加護なりとあり貴み凱奇
の後前は掠られし石の地を再び寄附ありしより連綿

田國雜記
 とくろはとくろ
 越後よまくり
 小福泉と云山伏
 観音寺とささ
 えととくろ
 小葛嶺ととくろ
 とくろととくろ
 とくろととくろ
 佐徳
 珍抄ひの
 とくろよ
 ののの
 とくろ
 塔の
 甘老浮
 うね
 道真准后



所澤
 薬王寺



今猶當寺に附屬せりと云
道與准后の四國雜記に所傳あり
 觀音寺ありてさうえとて出たりと
 ありて當寺 什宝に新田家寄附の鞍あり黒漆を以て塗るるよふ
 のよりなり
 中黒の伎を描画ありと

東光山藥王寺 自昌院と号も同所北の横小路を入り裏通る道

より向ふ側よりあり曹洞派の禪宗なり余村の永源寺に屬せ

中興開山の考山 藥師堂の本尊藥師如來を座像三尺計に行基

大辨和尚 大士彫造せる所なりとて
聖座の金の針金を以て造る極めく妙

宝龕を開 相傳ふ元弘の頃新田武藏守義宗公教度の合戦と

企むとていとも 家運衰へ軍毎に敗走し家子郎等教多戦死を

依て義宗公此地に至る一字の藥師堂は入て假時は僧とかりを

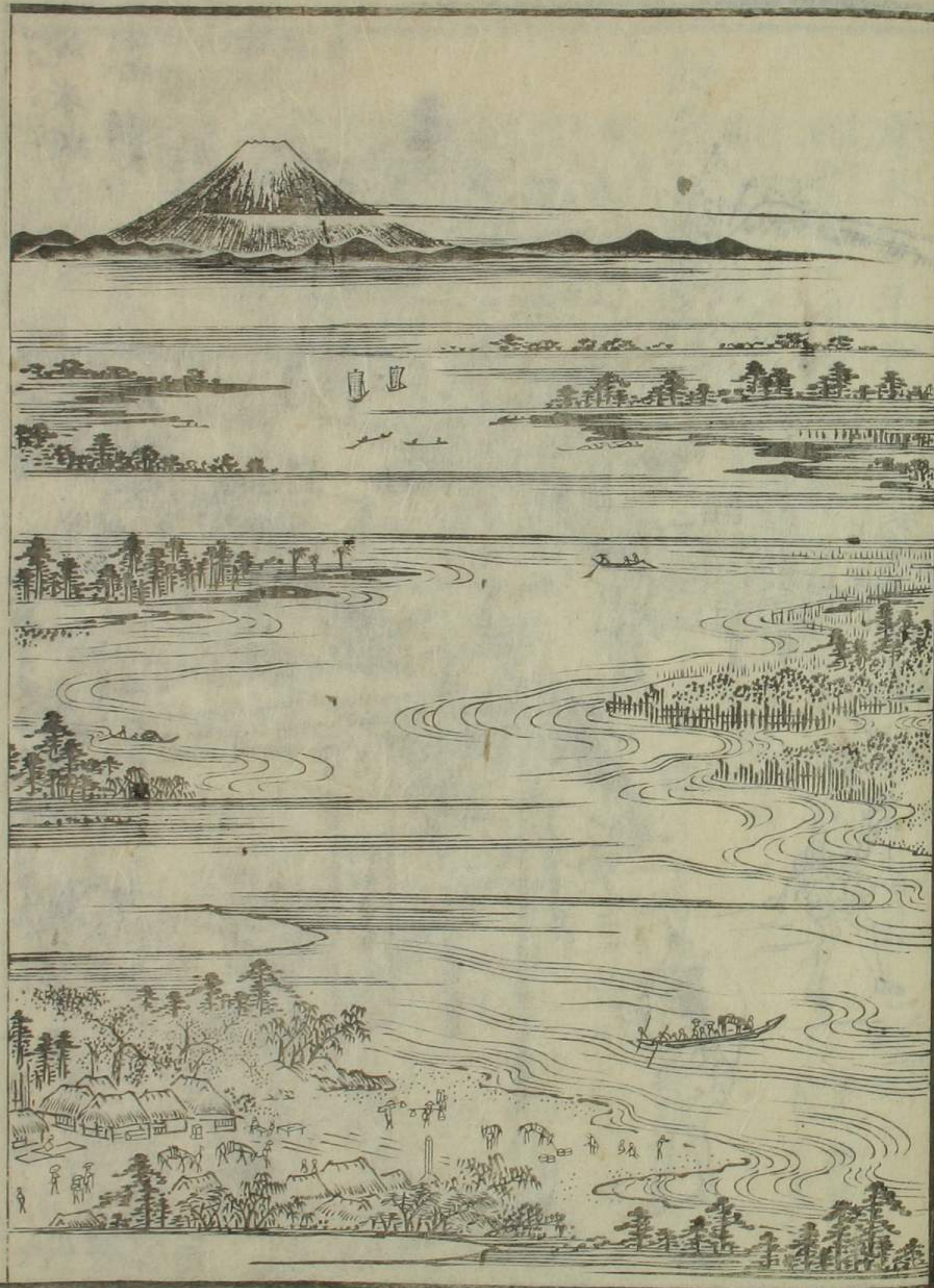
忍びて年月を送るゆひくとも時運再びゆるる期ありと歎

終に發心し此所を草庵と結び善く護持する所の佛射と

戸田
 羽黒靈泉

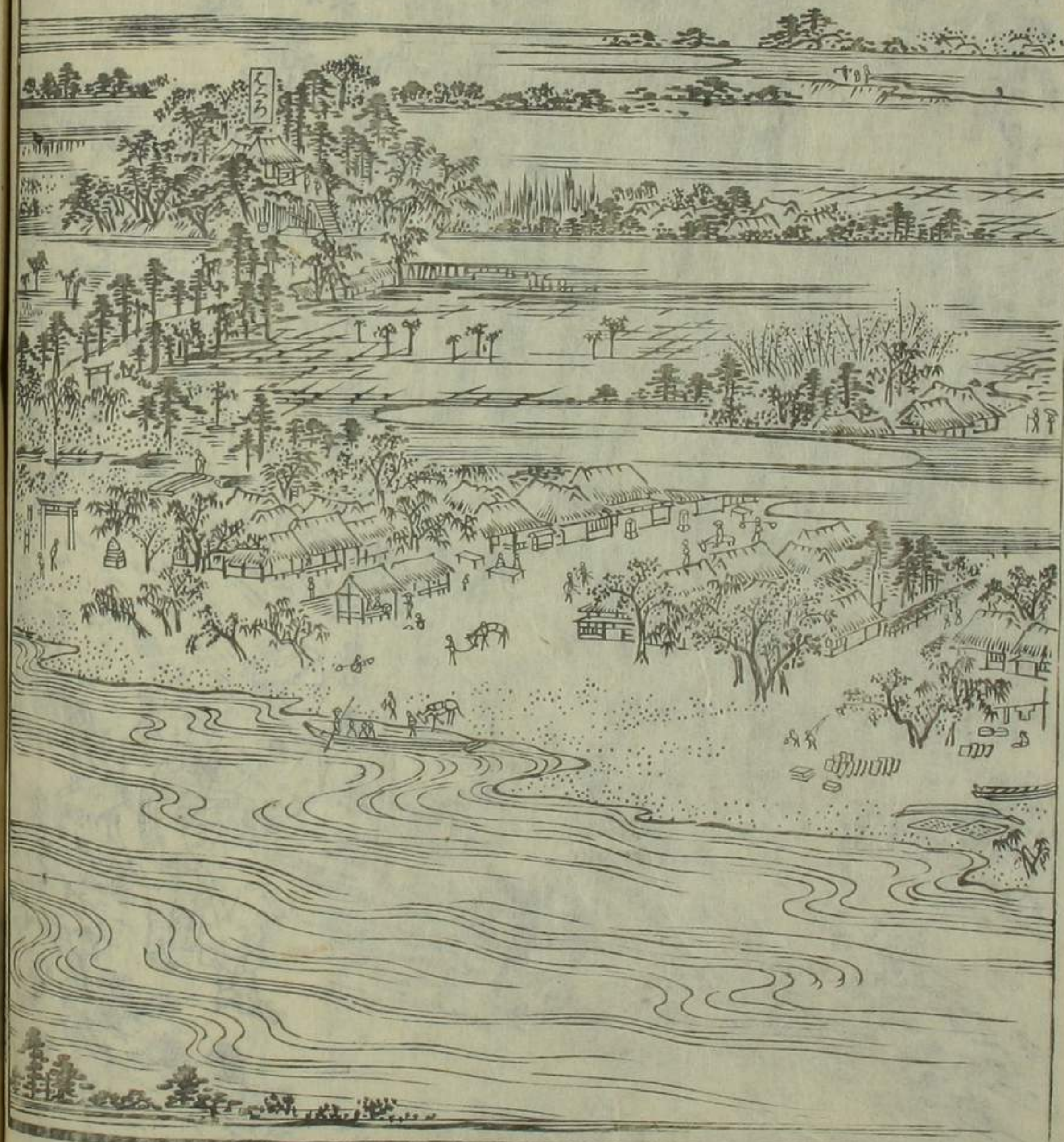
掠の木の
 間控より
 靈泉涌
 出を詣り
 此を汲
 者病を
 服あり
 驗あり
 て近頃
 本草綱
 目あり
 半河と
 ありて
 名を
 上池と
 あり





戸田川渡口
羽黒権現宮

水源入圃川中七
枝より登生下
流ハ荒川ともい
隅田川とも号く
為全舟けあり
此川水増志村を
川ひき渡そと
依其頭ハ理後ひ
子千住廻り江
所ハ昔ハ堤村
中馬をつとり
今出水の時ハ此
村中ハほそ



燒米坂

此地は燒米
と名づく家
あり故に名
本名ハ
浦和坂



應永二十年癸巳三月朔日壽齡九十一歳中と逝去ありと云

則當寺に開基のく自性院義英源宗庵主と号に
昔ハ藥師堂の
存してのれ世

蘭若と云を知らむとなり寛永の頃ありと云の
あり在と云を知らむとなり寛永の頃ありと云の

長誓山妙顯寺 戸田の渡口より二十町ありを隔て西の方新

曾村あり 戸田の羽黒権現 日蓮宗の本寺なり弘安三年庚辰

當國新倉の領主隅田五郎時光との久閑基を 寺記云時光ハ
惟康親王に屬

新倉に住む弘安二年甲州身延山に至り日蓮上人を謁して祝髪し 閑山ハ六光
名を日蓮とありと云中二年乙丑十二月十二日歳を當寺第三世と稱す 宗祖上人の旨に任せ當寺の閑

僧第四位民部阿闍梨日向上人なり 山と稱す 正和三年甲寅九月三日

本堂日蓮上人の像を安置せし 中老僧日法上人の作りたり世に子安日蓮
上人と稱せり等身なりと物に腰をくけ

釋迦牟尼佛堂 本堂より左の方あり本堂より廊を儲く世に子安釋迦
如来と稱す此靈像ハ當寺の開基時光が家累世傳る

所の念持佛なりと云文永八年其妻難産を愁く頃時光の夢に
告て日蓮上人の妙存を乞ひて安産なりと云靈像なり

告て日蓮上人の妙存を乞ひて安産なりと云靈像なり

寶藏

釋迦堂の後池の中島あり當寺第一の靈宝

開山塔

本堂の左あり日向上人及び開基陽田五郎時光四世日賢尊師の石塔也其並ひくあり何れも當寺三十三世の住侶日統師造立する所なり

寺寶子安大曼陀羅

宗祖上人の真筆なり此曼陀羅の如護あり

慈眼大師消息

贈身延山三十一世日賢上人墨田五郎時光鞍鏡

法華經開結

時光宗祖上人祈念を自の室の雜産をのれ利益并依る

鬼子母神影

日賢上人常は鬼子母神と云信十三歳の年法花首題の

宗祖上人真骨舍利

上人入滅の時時光の願は應し當寺曼陀羅

日向上人の日蓮上人画像

土佐光信法華經一卷

法華經一卷

室度は妙徳尼と号し

寺記曰文永八年辛未日蓮上人官府の命により法の為は佐渡

鳴子詣せられぬその年十月十日上人相州をゆく武州糸川に

宿し翌十一日新倉に至るその時新倉の城主墨田五郎時光

其室の難産なるを上人は告ぐ救苦の祈念を需む上人是とあそ

む路傍に叢祠を坐を儲け邊に清泉を汲み硯水と曼陀

羅及び安産の符を書たすひ是と授く曰く信心深く人必安産

なり又生所の兒も男子なり長あるの後に報恩のゆゑ

出家せしめをふし此地を立退り其日時を隔てて安産

あり生る所の兒も又男子なり時光悦び限り殊に

大士は曰く此符節を合せたるが如きを奇と其兒を徳丸と号く

其時の曼陀羅今猶傳へて當寺の竹室に又安産の時光是より宗教を

加持子安の妙符日蓮上人より傳へし今も相傳へ

其項上人の懇ひひ地を封し一字の精舎を開創せんとす此

大願を發起も同十一年甲戌上人鎌倉の赦免を得ぬ後身

延山に隱栖あり一う弘安二年己卯時光其子徳丸を具し

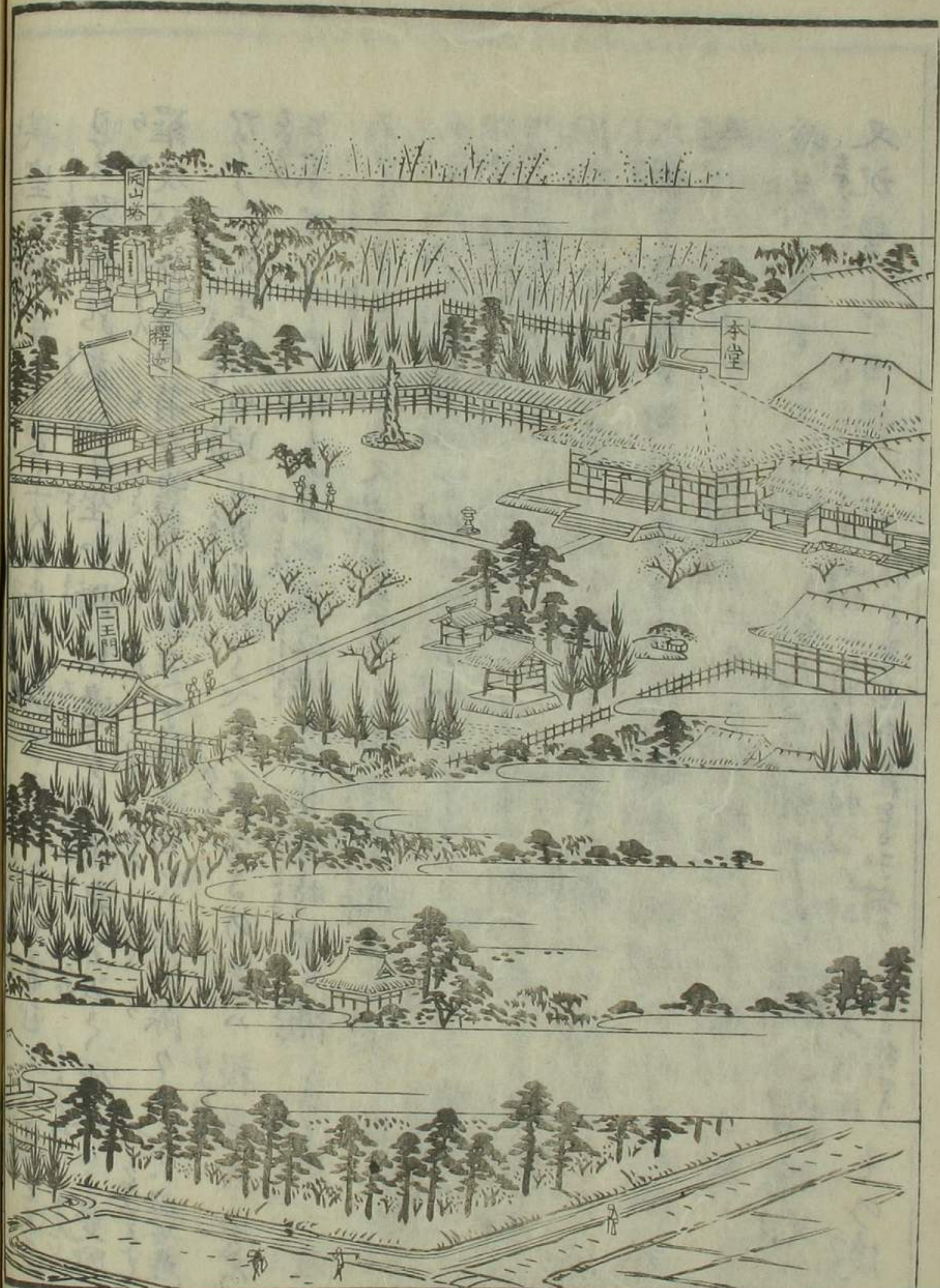
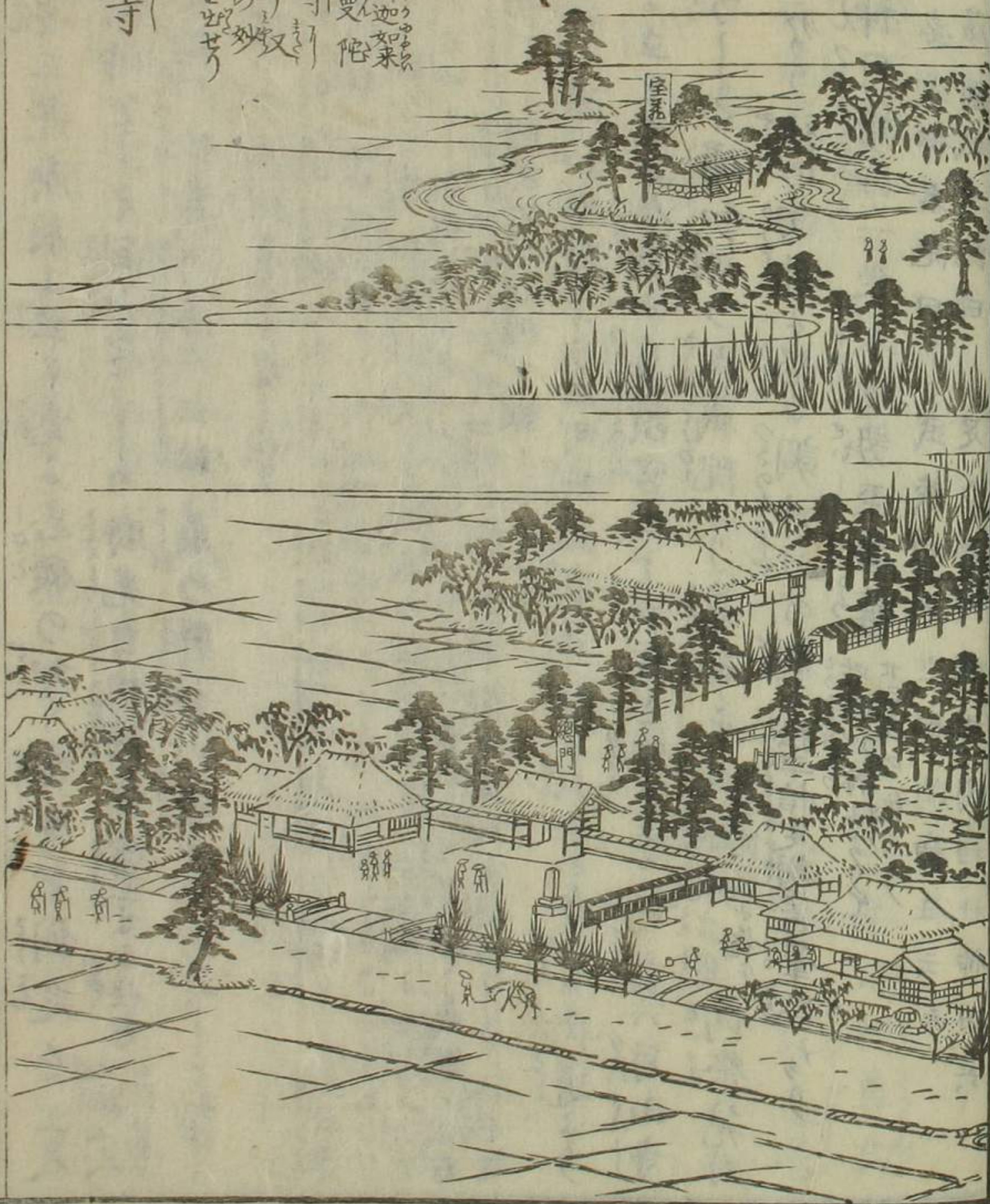
延山嶺に至り上人は謁して徳丸を出家せしむ

又祝髪して日徳と号

此時上人の書の本をよむと時上人は其時上人の書の本をよむと時上人は其時上人の書の本をよむと

妙顯寺

子安の釋迦如来
子安の曼陀
羅當寺
安置す
安産の妙
符とせり



弘安三年庚辰に至りて竟り志願の如く當寺を創建を上人日向師を以て開山たりし時先自相継ぐ當寺に住せり日徳上人
淡川左衛門佐義行居城田趾 蕨の驛舎の邊ありてとて

今其地とて云々

鎌倉大草紙曰長祿元年六月廿三日淡川左衛門佐義鏡を大將として武蔵國
新指下野ハ公がの近親ゆく九州探題の家なれば諸家も重き事あり
取立居城中に今に至る迄此所を武蔵の國司中あり足立郡は蕨とて所を
管領として關東と可治と云々

調神社 浦和の驛より三町計此方岸村と云ふあり社ハ街道より

右に立せり今世は月讀宮二十三夜と稱せり別當八月山寺
と号し浦和町の玉蔵院より兼帶を新義真言宗例祭八月

廿日なり社の向拜し掲る調神社の額ハ松平信定朝臣の筆跡なり
祭神月讀命一坐本地勢至菩薩 此本地佛はありて
延喜式神名記曰 武蔵國足立郡調神社云云
武蔵國風土記曰 足立郡大調郷調神社神田六

十束二字田雅日本根子彦大日天皇乙酉三月
所祭瀨織津比咩也有神戶部巫戸云云
社記曰當社ハ崇神天皇の勅願なり後建武三年足利尊氏
凶徒追罰の宿願ありるが靈應むすべし仍く社を造營

あつて延元二年二月五日社領の地五箇村を附せり又貞和
觀應の間宮方蜂起を此為に寺社悉く廢亡を依る康曆
二年佐々木近江守源持清當社を經營し至徳二年二月二
箇村の地を附たりとてとも天正十八年小田原北条家滅亡の
時の戦ひに神寶も共々散失し神領も又自ら廢せり然るに

御入國の頃悉くも
神祖 當社の来由を聞しめりて改て美田山林等を封せ
らるる竟り慶安二年朱章を下し賜ふ

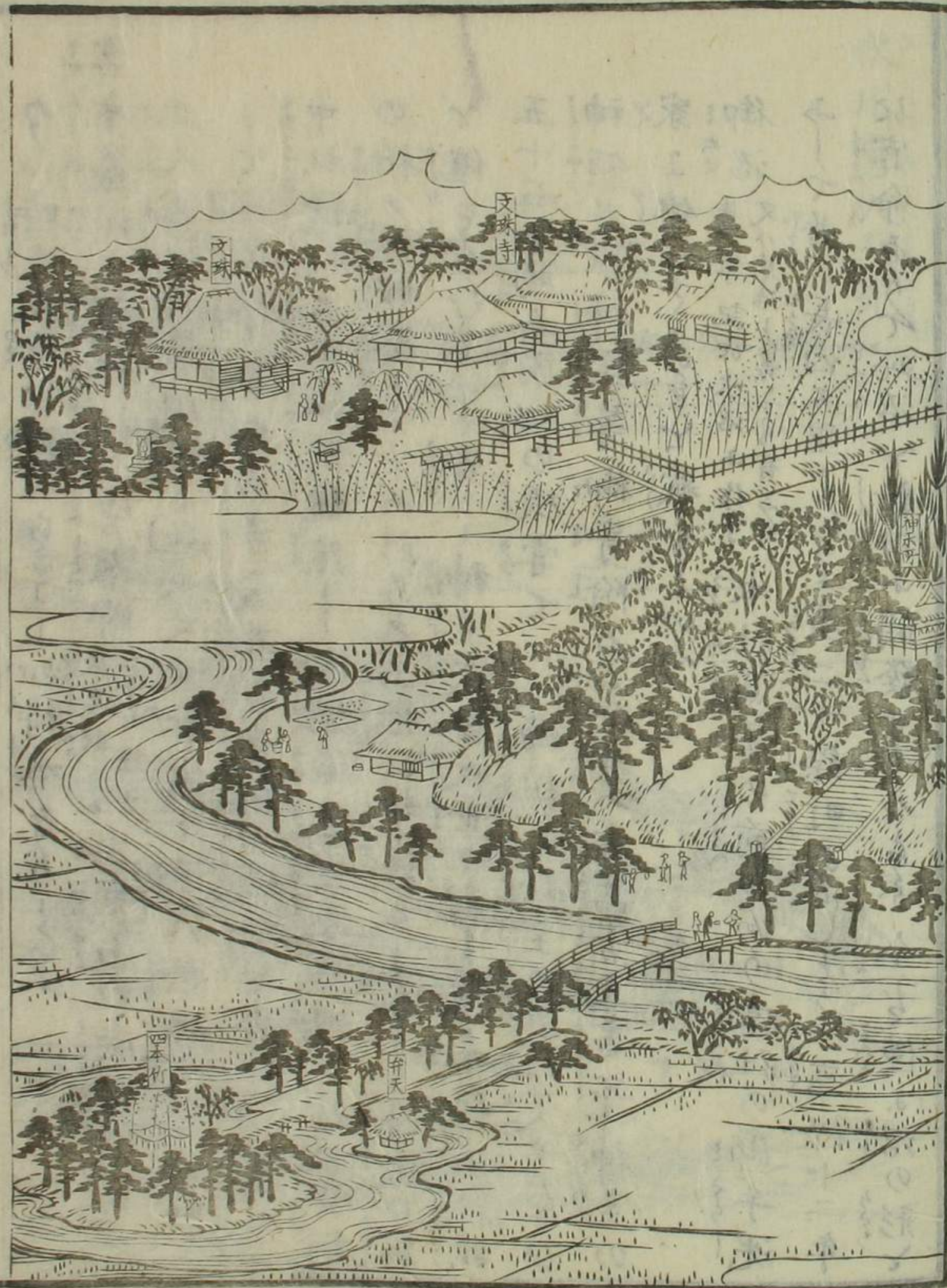
子安清水 同所長光山妙典寺にある所の池を以て早懸中の洞
とせりとの相傳ふ日蓮大士此池水を以て安産の符を書

とせりとの相傳ふ日蓮大士此池水を以て安産の符を書



調神社
 延喜式内の
 神あり今
 誤り月讀
 廿三夜と稱





三室村
元簸河神社



氷川宮大門先

のし時光う妻に與へらまゝ
 加持水なりとのよ
 宮本簸川大明神社 宮本郷
 大宮駅より三室山の南麓少何々
 土人宮本の簸川社と称へ又女躰宮と号し祭神大宮同躰
 一々本宮大己貴命右素盞尊左奇稻田媛命と齋ひ祀る當社山
 中枚檜神多く社頭巍然として瑞籬葦滑なり現る鼓の音朝
 の祈夕の報賽まゝ一めはあま山林にむけりさるる神感の興
 と催まらむひとの貴し神主武笠氏世々まはる奉祀し社領
 五十石と賜ふ國初の頃嘗て 神祖と神主の家に入せたまひ
 神領及び神宝等御寄附あらせり古器古文書等神主の
 家傳へくあまの藏まるといふ
 御沼 舊事記に水沼ふ作す 本社鳥居の前ふあり當社の御手洗
 又小見沼と書くも有ふや 少して昔ハ長四五里をめぐり廣二十餘町ありしと云や享保十二年
 に官命ありて此沼を新田小開發せりらる今も僅よ沼の形と



おみやのまき
大宮
氷川明神社

氷川宮大門



存も然も猶沼の水中より九月八日大神事止まらん又も十二月

大晦日の夜を時々龍燈現る事ありといへり

例祭九月八日と六月十四日なり就中九月八日を船祭とて御沼

の中へ神輿と船めて渡し奉る沼の中より神酒と供もり

儀式あり上代の瓶子今猶神主の家に此日神幸の時午前より北風に

て船あつり沼の中に至る還輿の時ハ必南風よ變りて神輿の

船まづ本の岸に到り着此事振古違ふといへり

大智山文殊寺大般若堂と號を社地より壹丁程社寶大般若經

一部持統天皇勅して納め賜ふ所といふ昔時関東兵乱屢なるも大般若經は轉讀

せりめらるるなり當社に納め賜ふ所といふ昔時関東兵乱屢なるも

正月八日天下泰平の御祈禱とて文殊寺に於て般若會修行も至りて毎年

蘇川原其地今知へり宮本社より大宮の辺と指て云へきり

武藏國風土記曰足立郡蘇川原出鮎鰻諸鮮芹柴

胡香需早水共為民用云云

右のしくわれ御沼の辺水澤の地と惣て呼らる見ゆ又大宮の南の方道乃

左右三十丁まりの原と大宮原とも唱ふは若くハ其辺まく瓜りハなるなり

大宮氷川神社

大宮驛の中

高鼻村

街道の右の方に鳥居立石あり

あり十八町入て御本社あり神領三百石神主角井氏岩井氏

奉祀を祭神三座本社の右ハ素盞雄尊

左ハ奇稻田媛命

此即武藏國第一宮にして延喜式名神大社大月嘗新嘗に列す

第一の官社

荒波々幾社

宗像社

五山祇社

本地堂

延喜式

一宮

神名帳

三代

武藏國

東鑑

同書

又於

慕景集

老

平貞盛願書一通

一筋

敬

月

膽

惱

暴

惡

莫

甚

馬

武藏國

東鑑

同書

又於

慕景集

老

平貞盛願書一通

一筋

敬

月

膽

惱

暴

惡

莫

甚

馬

然

愚

武藏國

東鑑

同書

又於

慕景集

老

平貞盛願書一通

一筋

敬

月

膽

惱

暴

惡

莫

甚

馬

然

愚

鎮山徒自把斧越致一戰之日刺中矢聿於彼戰場
殞命今貞盛賊兼任等苟神靈如護之身起一舉
居然兵欲誅朝敵報父仇非干戈退四維願者得
勝於瞬目之玄鑿無誤者先令見之瑞驗給仍祈
時丹心誠女鑿無誤者先令見之瑞驗給仍祈
願如件有誠玄鑿無誤者先令見之瑞驗給仍祈
天慶三年正月廿五日
平貞盛敬白

足利將軍尊氏公御教書

小田原北条家神領寄附之狀 一通

社記曰當社之本朝武運の守護神治國利民の神域と

て鎮坐年舊ぬ二千餘年の星霜和光あま新なり利生徳普

一東方八州乃蒼生ありく神威以仰きよみ以て

世々の武將も崇敬と嚴めて却敵勝利國民安泰の祈誓

と掛たまつるハ稀なり誠ニ神徳乃日々に新に年々小盛

にましまし誰人々もまじと仰りさるんや何乃輩々利物

乃和光と蒙らさるんやされも景行天皇の御宇日本武尊

東夷征討に趣きまら項當社ハ祈誓ありく程あく凶徒を鎮

めらふ其後聖武天皇の御宇諸國ハ一宮と撰定なりあふと凡

武蔵國あつた當社を以て一宮とあさり且奉幣使を向らる又

醍醐天皇の御宇中を神社ハ大小の社格を定られ當國四十四座の中

當社を撰て大社二座の中此冠たりむ其後朱雀天皇の御宇に

至りて貞盛繁盛兼任等の兄弟將門退治の爲東國ハ發向を

其時日本武尊の先蹤に准ひ當社ハ詣りて一通の願書を籠

まら果して靈應を得ると又治承四年頼朝寄願の旨あふより

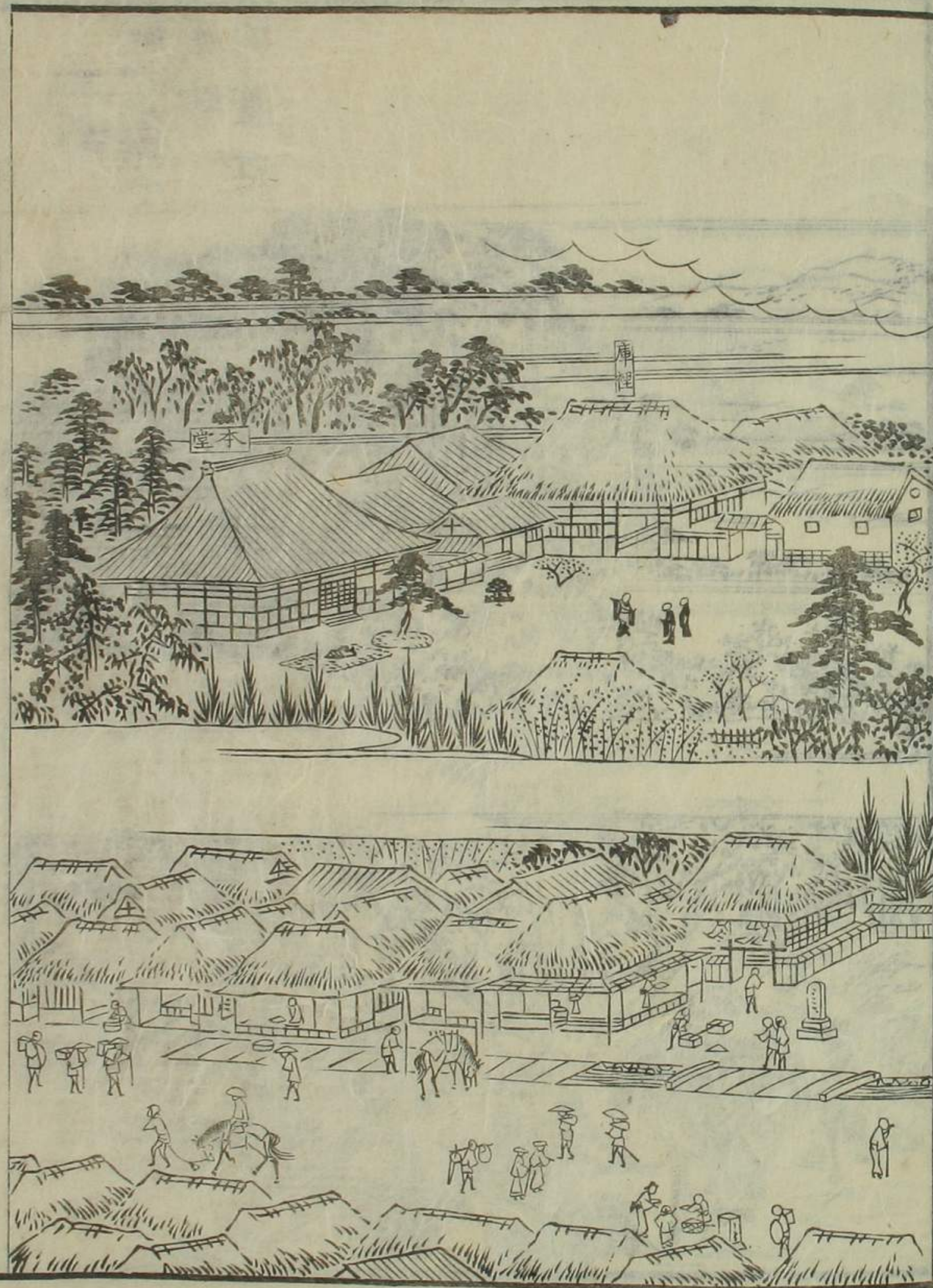
社頭を修營ありて大宮領永三貫文の地を寄附せられ社中

亂妃狼藉なつるべきが爲制札ゆび祈教書を賜ふ然るも

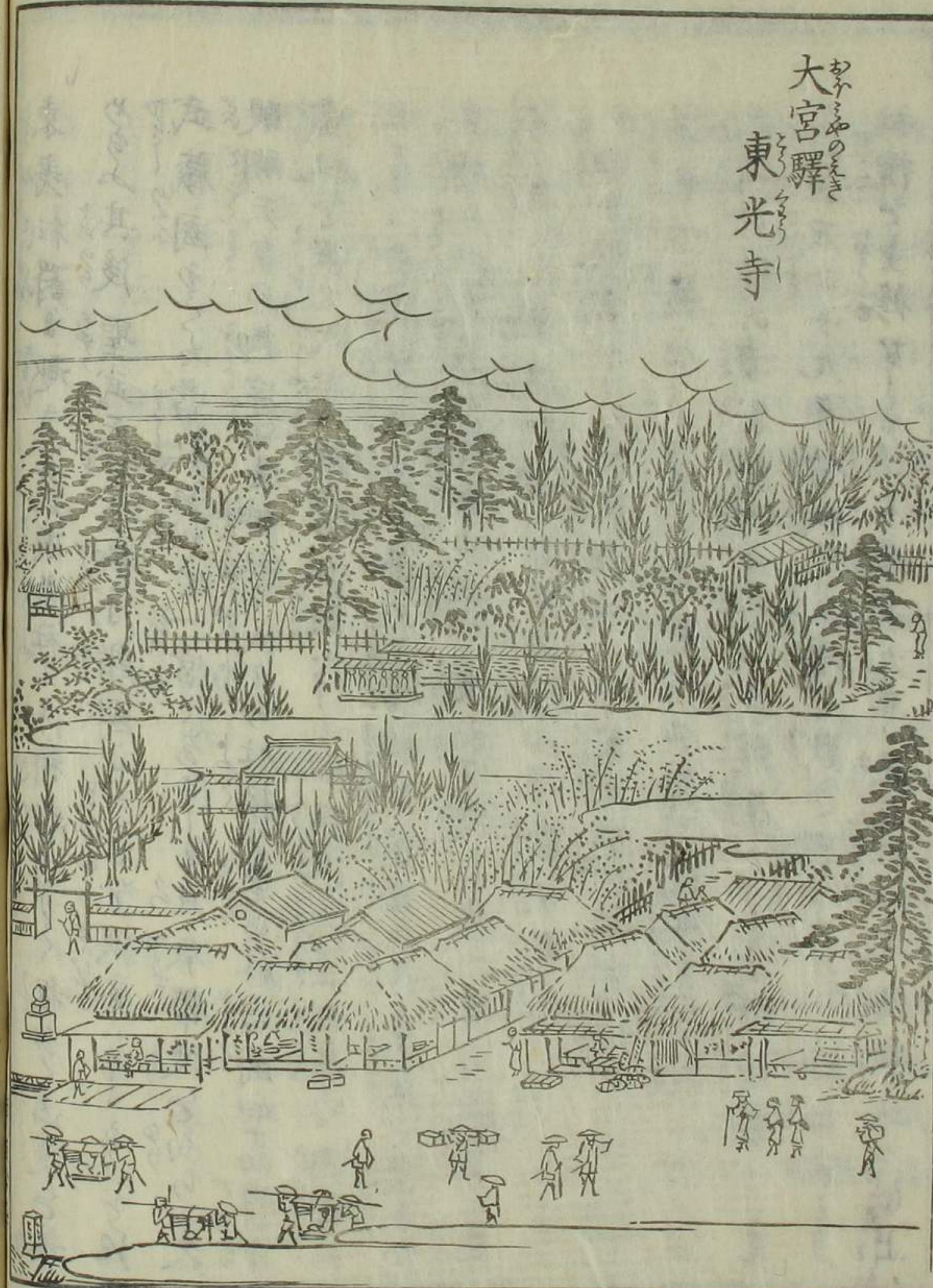
天文永祿の頃東國大亂起り争戰屢中り社頭荒蕪しるる

これハ天正十九年當社の荒廢を歎き思ひ召れ御當家より

社壇を重修なると又慶長九年足立郡あつた高鼻ゆび祈上



大宮驛 おみやのき
東光寺 とうこうじ





黒塚
 潮田出羽守
 城趾
 同墓碑



落合等の地と合せし社領に寄附なりし朱章の明奉を下
され官造の宮社に列せしむ

大宮山東光禪寺 同所大宮宿宮町の右側より往古八天台宗
なるが今宗風を轉しく曹洞派の禪林とす 赤谷の常泉 寺に属す 本寺を

金銅の薬師如来一寸八分ありし木佛の薬師の胎中に収む
開山ハ紀州熊野那智山の東光坊阿闍梨祐慶なり 長寛元年 癸未二月

廿八日近化傳聞天台宗東光坊阿闍梨宿慶法印熊野那智山下濱宮住侶西家三
男之蓋足立郡若光明房依為代代之且那所令下向此時大宮黒塚之悪鬼以法力
令退散云云寺説よ云く祐慶ハ西家の三男中より那智山下濱宮と云ふ住侶より長徳
年中西三条の家より遷り流濱宮の西殿と申候へ今猶あつて就中西の家ハ熊野
上徑の正嫡 鳥羽院の御宇開東より下向し法力を以て一字と記しき
なりと云く

て熊野の威光と開東より耀とのへる意ふりし寺を東光寺と号り
足立原より古塚あり黒塚と号く塚より悪鬼あり窟を宅とす
殺氣天と凌猛威人と排ひ慶師道力を勵しこれを伏せし

黒塚 大宮驛水川社より四町あり東の方森の中より 此塚は南
の方百歩

半と隔て東光坊の旧跡あり 二丁四方の間雜樹繁茂せり 往古東光坊阿闍梨祐慶悪鬼退
治の地なり昔ハ足立原と唱ふ世俗奥州の安達が原と云ふを誤
なり 奥州の黒塚ハ二本松と今 此所も奥州への海道なれば混交へ
目の間舟引山の此方より

あつしるなり 足立原の黒塚と武蔵國ともさハ
紀州那智山の記あり

潮田出羽守源資忠之墓 同良の方十町を隔り 資忠の城趾に
五六丁四方の

資忠ハ足立郡大宮壽能城主なり其先清和天皇九代
後胤後三位右京大夫兼兵庫頭頼政十九世の嫡流太田美濃守

三樂齋資正弟四の男之天正十八年庚寅四月十八日相州小田原
より討死を因り其家臣北澤宮内なる者恩寵餘澤の深を

思ひ私よこのところ小塚を営む元文三年戊午資忠六世の嫡孫
潮田氏資方再び北澤某よ命し墓碑を造りしむるの旨其

碑銘よ詳なり

江戸名所圖會天権之卷

終畢

